
心の記憶～あの頃に戻れたら...～

アイリーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の記憶〜あの頃に戻れたら…〜

【Nコード】

N8730F

【作者名】

アイリーン

【あらすじ】

工藤新一から江戸川コナンへ。そして1年後、江戸川コナンから工藤新一へ。事故に巻き込まれ、命と引き換えに記憶を失った新一。その事故は仕組まれたものだったのか？徐々に戻っていく記憶。たとえば思い出した記憶が嫌なものでも、今からの思い出は楽しいことばかりだと信じていた。新一と蘭は思い出と約束の場所へ行く。そして、ついに組織の魔の手が蘭に迫り、そして明らかになる組織のあの方。「どんなに信じられなくても、残ったことが真実である」新一は蘭を助けられるのか？そして記憶は戻るのか？心の底から戻

りたいと願うのは無理なのか？新蘭でおくる名探偵コナンの自分流
最終回。続編があるかも…

第1話 作者よりご挨拶

みなさん、こんにちは、アイリーンです。

だいぶ前、1度登録、そして少しでもだけ投稿しましたが、わけあって削除しました。

しかし、今回内容とストーリーをリニューアルして復活することになりました！！

みなさん、心配かけてごめんなさい・・・。

まだまだ新人ですが、よろしく願います。

そして、感想もどしどしお待ちしています。

第1話 作者よりご挨拶（後書き）

みなさん、おひさしぶりです。アイリーンです。

わけあって、小説を一時閉鎖しましたが、このたび復活することになりました！！

まだまだ新人で未熟者ですが、どうかよろしく願います。

そして、今後のストーリー執筆の励みと参考にしたいので、感想のほうもどしどしお待ちしております。

第2話 プロローグ（前書き）

この物語は、高校生探偵工藤新一がアポトキシン4869で江戸川コナンに幼児化してから、およそ1年後の物語である。

第2話 プロローグ

ここはどこだ!?

目の前は漆黒の闇で、とても静かだ。そんな日々がとてつもなく長く続いた感じがした

あれからどれだけの月日がたっただろうか……

オレは江戸川コナンとして身を隠し、ひそかに黒の組織の情報と、元に戻る方法を模索していた今、灰原が一生懸命アポトキシン4869の完全な解毒剤を開発すべく、研究をしている。

今まで何度も試した試作品の副作用で、元に戻れなくなっているかもしれない……

いや、運よく元に戻れたとしてもその先に何が待っているのか……いや、それどころか元に戻れたとしても、ただじゃすまないかもしれない……

「あなた、それを飲めば今度こそ本当に死んでしまうのかもしれないのよ?」

それに、オレが元の姿、工藤新一に戻ることでようしやなく周りの関係者全員に被害、組織の魔の手が及ぶだろう。やつらはそういうやつだ。

小五郎のおっちゃんに妃弁護士、目暮警部、佐藤刑事に高木刑事、歩美ちゃんたち少年探偵

団、それに、もちろん蘭も……

たとえ関係者が危ない目にあわされようとも、自分がそのことで死にいたとしても、オレは

それでもやらなければいけないことがある。

元に戻って、本当の声で、本当の姿で、本当の気持ちをやイツに……その願いがかなうなら、オレはどんな試練にも耐えられるだろう。

「君を確実に破滅させることができるのなら、僕は公共の利益のために喜んで死を受け入れよう」

第2話 プロローグ（後書き）

みなさん、こんにちは。作者のアイリーンです。

今回のこの物語は、名探偵コナンの最終回です。

ずっと、あつたらどんなんやろ？って気になってい

ました。

まだまだ未熟ですが、感想、ご指摘、アドバイスなど

がありましたら、どうか遠慮なくお願いします。

第3話 日常（前書き）

この物語は、名探偵コナンの真の主人公である工藤新一、いや、今は江戸川コナンである人物から見た様子を描いたものである。

第3話 日常

「強盗に殺人、放火に誘拐、ホントに事件が絶えねえよな……」

ある春の日、小学2年生になったオレはそんなことを考えていた。

元太

「なに言ってるんだよ、コナン？」

歩美

「そつよ、私たち少年探偵団じゃない？」

光彦

「探偵あつてこそその事件じゃないか、っていつもコナンくんが言ってたじゃないですか!？」

コナン

「わりあわりい!! そんな怒んなよ」

光彦

「でも、こんなに事件があふれてますけど、人間ってみんな仲良くできないんですかね？」

歩美

「みんなが仲良しならいいんだけどな……」

灰原

「無理ね。人間には感情があるもの。とても変わりやすいうえに厄

介な代物が……それが愛情や友情ならいいけど、何かのきっかけで嫉妬や恨みに変われば、殺意が芽生えることだってあるんだから……」

光彦

「いつもながら灰原さんはクールですね……」元太
「お前、ほんとに年ごまかしてんじゃねえのか？」

（ははは……あたってやがる……）

歩美

「もうちょつと小学2年生らしくしようよ、コナンくんは灰原さん。だって、私たち同じ学校に通う小学2年生でしょ？」

（そうか……もうあれから1年がたつのか……くそ！！早くアイツらをぶつつぶさねえと……）

（だめよ、工藤君。わかってると思うけど……）

灰原はオレをそう言うように無言で睨んでいた。（ああ、わかあつてるよ。それよりも解毒剤の研究、進んでんのか？）

（ええ、だいぶ。およそ半分つてところね）

（おいおい、まだ半分かよ……なあ、オレ1つ気になっていることがあんだけどよ……）

（あら、なにかしら？）

（……お前、本当は何歳なんだ？）

(……80才)

コナン

「うそ!？」

光彦

「うそ?」

歩美

「なにがうそなの、コナンくん?」

(やべ、何か言わねえと……)

コナン

「今日の給食、カレーじゃねえのかよ!？」

元太

「なんだよ、給食のことかよ……今日なんてオレの好きなパンだから、朝ごはんなんて3杯しかおかわりしてきてねえんだぞ」

歩美

「そうそう、コナンくんの嫌いなレーズンパンだから、ちゃんと好き嫌いしないで食べなきゃだめだよ?」

(げ!!マジ!?)

(はぁ……一体オレは何をやっているんだ……!? 本当なら、有名な高校生探偵工藤新一として、日本中を事件の捜査で駆け回っているっていうのに……早く元に戻りてえぜ!!)

歩美

「ねえ、それより今日学校終わったらまた公園でサッカーやろうよ？」

コナン

「やるやる!!」

(工藤君、あなた本当に子供ね……)

コナン

「ああ、オレは子供だぜ？ただし、ただのBOYじゃねえぜ。りっぱなDETECTIVE CONAN、なんだもんな」

第4話 夢か現実か…

そして小学2年生のある春の日……

歩美

「あ、おはよう、コナンくん!!」

コナン

「おう、おはよ」

元太

「コナン、遅せえぞ」

光彦

「もうすぐ授業が始まってしまいますよ?」

コナン

「わりいわりい。昨日遅くまで本を読んだからよ……おい、ところで灰原どうした?」

歩美

「灰原さんなら、今日休みだって」

コナン

「灰原が?珍しいな……」

元太

「食べすぎで腹でも壊したんじゃないか?」

光彦

「まっさかあ、元太くんじゃあるまいし……」

元太

「なんだと、光彦!!」

(ドタバタ……)

(灰原が休み? 風邪でもひいたのか、あいつ……)

そして、午前中……

先生

「今日は、まず昨日やった算数のテストを返します」

元太

「げっ、おれ48点だよ……」

光彦

「僕は80点です!!」

歩美

「すごおい!! みてみてみんな。コナンくんまた100点だよ!!」

光彦

「いつもながらコナンくんはすごいですね……」

コナン

「当たり前だよ、だってオレは……」

光彦

「オレは……？」

歩美ちゃんがオレの顔を覗き込む。

コナン

「いや……その……毎日ちゃんと勉強してっからな……」

歩美

「ふうん……？」

（あぶねえあぶねえ……オレ、今小学生だった……）

先生

「さて、みなさん、1たす1はいくつかな？」「2……！」

（おいおい勘弁してくれよ……なんで高校生のオレが小学生に混じってこんなことしなきゃいけないんだ……そもそもこんなことになったのは、黒の組織のやつらに飲まされたアポトキシン4869のせいなんだが……ああ、早く元に戻りてえ……灰原のやつ、早く解毒剤完成させてくんねえかな。この状態は拷問だぜ……それとも、オレは夢を見ているのか……夢であってほしいが……）

給食の時間。

歩美

「だめだよ、コナンくん、レーズンもちちゃんと食べなきゃ?」

コナン

「わ、わあってるよ……」

光彦

「そうですよ、コナンくん。健康になるためには、好き嫌いなく全部食べないとだめですよ?」

コナン

「そういう光彦こそ、お前もニンジンよけてねえで食べねえとダメだぜ。それに、説得力ねえし……」

第4話 夢か現実か…（後書き）

コナンくんの小学生としてのほのぼのとした日々・・・
。元に戻って組織をぶっ潰したい、けど、こいつらといるのも悪くはないかも・・・、と思っているコナンくんなのでした・・・。

第5話 解毒剤完成!?

コナン

「ううさびいゝもう4月だというのに、なんだよこの寒さは……」

光彦

「天気予報によると、今日は記録的な寒波が日本をすっぽりと覆うそうですよ」

元太

「そつだと知ってりや今日は朝飯を2杯しかおかわりしなかったのによ……」

歩美

「それでも充分だよ、元太くん。それに、ちょっとはダイエットしたほうがいいんじゃない？」

元太

「そ、そうか……？」コナン

「おい、そういえば今日灰原のやつはどうしたんだ？」

歩美

「灰原さんなら風邪で休みだつて」

コナン

「ふうん……（？）」

（そういえば、灰原のやつ、ここんとこずっと休んでるよな……まさか本当に風邪……とか……？）

？

とその時、オレの胸ポケットに入れていた携帯が鳴った。

（おっと、鳴ってるのはコナン用か……それとも新一用……？

音の発信源を探すと、それは新一用からだった。

（オレ、工藤新一の本当のアドレスを知っているのはあいつらしかいないけど……… いったい……… 灰原からメール、珍しいな。灰原のやつが工藤新一のほうにメールしてくるなんて………）

その受信画面を見ると、そこにはこう表示されていた。

『工藤君、あなたが今1番欲しがってるものがあるから今日の放課後、博士家に来なさい。もちろん、この選択が善になるか悪になるかはあなたしただけだね………』

（あいかわらず灰原は女王様きどりだがby作者）

「それにしても、オレが今1番欲しがってるもの、って……… サッカ
ーのプレミアムチケット……… とか？ いや、あの灰原の性格からして
それはないよな……… それとも………」

？

（そうか！！）

オレはそれがなんなのかわかった瞬間、ブルツと武者振るいがした。ついに……ついに灰原がオレと灰原の体を幼児化させた原因であるアポトキシン4869の完全なる解毒剤を完成させたのだ。オレはこの日がくることをどれだけ待ち望んでいただろう……

（灰原が最近学校を休みがちだったのはこのためだったのか……）

そんな喜び、を隠しきれそうにないオレの顔を、歩美ちゃん、光彦、元太は不思議そうに見つめていた。

歩美

「どうしたの、コナンくん？」

元太

「何かうれしいことでもあったのかよ？」

光彦

「あ、わかりましたよ。好きな女の子からのメールですね？」

コナン

「バ、バーロ、そんなんじゃないよ……」

歩美（コナンくん……私はコナンくんのこと、好きだよ……でも、なんでかな……私にはコナンくんの好きな人にはかなわないような気がする……コナンくんがそこまで好きな女の人って誰なんだろう……？）

第5話 解毒剤完成！？（後書き）

作者より

みなさん、お久しぶりです

事情があつて、4ヶ月近くも休んですみません……

でも、今後は少なくとも1週間に1度は更新していこうと思つていたので、感想・指摘・意見などがあつたら遠慮なくよろしくお願いします。

第6話 待ちぼうけをくらわしてるその男

ようやく……ようやくこの時が来た……

やっと……やっと元に……元の姿に戻る……

この日をオレはどれだけ待ち望んでいただろう……

1年前はこんなストーリーになるなんて考えてもいなかった。

でも、オレは信じてる

散りゆく花にも冷たい雨にも光そそぐ明日がある限り、

きっとオレは強くなれるハズ……

それが、例え、例え受け止められそうにない真実だったとしても

それによって己自身の命が、関係者全員の命が危険にさらされようとも……

本来なら、蘭をこれだけ待たせたのだから

それ相応のことをしなきゃいけないだろう……

でも……でもダメなんだよ……

そんなことをしたら、アイツは今よりももっとオレに会いたくなっちまう……

待ちぼうけをくらわしてるその憎々しい高校生は待っててくれ、の

一点張りで

姿を現すことも機械ごしに声を聞かせることも満足にできない、つていうのに……

思わず笑っちまうよな……ガキっぽくて……

今は何も言えないけど、いずれ時がきたら……

いつの日か組織を壊滅させることができれば……

オレは約束しよう……偽りも一点の曇りもない正直なこの気持ちを素直に伝えと……

それまで、もう少し……もう少しだけ待っててくれ……

そう考えると、今日1日の授業は身につかなかった。

（そして放課後……）

元太「はぁ……やっと終わったぜ……なんか腹減ったな……」

歩美「もう、元太くんったら！」

光彦「それはそうと、これから米花公園でサッカーをやりません？」

元太「お、オレもやる！」

歩美「ねえ、コナンくんも一緒にやるでしょ？」

コナン「わりいけど、オレはパス」

光彦「なんでですか!？」

オレは帰り支度をし、教室の出入り口に急いで向かいながらこう言った。

コナン「わりいな。今日は蘭の……いや、蘭お姉ちゃんのお母さんと食事の約束があつから。じゃあ、また明日な!！」
そう言つて、オレは教室を飛び出した。

歩美「コナンくん、それが私たちとサッカーすることよりも大切なことなのかな……?」

光彦「きつと、蘭お姉さんがずっと前から楽しみにしている食事会をダメにしたくないんですよ……」

歩美「コナンくん……なんだか、私、コナンくんがずっと遠くの知らないところに言つてしまいそんな気がする……」

第7話 甘酸っぱいレモンのように…

そんなオレの後ろ姿を歩美ちゃん是不安そうに追った。

そして、外はいつの間にか雨が降っていた。冷たく、重い雨が……

しかし、今のオレにはそんな雨は軽い障害の1つでしかなく、

いや、それよりも視界に入ってさえいなかっただろう。

やっと……やっと元の体に戻る……

そう、今まで待ち望んだ日が……姿が……ようやく訪れようとしている……

そんな目の前まで来ている真実に、オレはとても喜んだ。

そこまでの道のりは険しく、危険で、ミステリアスで、ちょっと酸っぱいレモンのような……

それでも、いつか元に戻る、組織を壊滅させ蘭と幸せに暮らす、という今にも儚くて壊れそうな希望だけは、捨てられなかったし、捨てたくもなかった。

そう、例えばこの雨がどんな真実（結果）に導きようと、

それまでにどんな試練が訪れ、危険を誘い、

それによって己自身と関係者全員の身に危険が迫り、

例えば自分の命を失うことになったとしても……

きっと真相にたどり着き、幸せな日々は訪れる……

そう考えると、どんな障害や試練も乗り越えられそうな気がした。

そう、この雨がある試練を導く序章になるとも知らずに……

そう考えているうちに、博士の家に着いた。

（とうとう……ようやくここまで来た……）

オレは決心した。

この線を越えたら後戻りはできない、

命を脅かされようとも、自分の目的を達成するために……

（よし、行こうー！）

キイイイイ……………

ピンポン

ピンポン

（博士、灰原、いないのか？　まったく、あいつの方から来い、って言うたくせに……）

コナン「おい……入るぞ……！」

玄関の扉を開けて中に入ると、

そこは書類が散乱し、パソコンはつけっぱなし、コーヒーはおそろしく煎れたてだったのだらう……湯気がたっていた。

！！

（ま……まさか……いや、早すぎる……）
オレは最悪の事態の予感がした。

コナン「おい！！　博士！！　灰原！！　いるのか！？　お願いだから返事をしてくれ！！」しかし、自分があせるばかりで返事はない。

（……………）

（う……ウソだろ……ウソだよな……博士、灰原……！）

そう心の中で叫んだ瞬間、後ろで物音がした。

（ま、まさか……黒の組織のやつらか……？）

オレはとっさに物陰に隠れた。

静かにゆっくりと扉が開く。

第7話 甘酸っぱいレモンのように…（後書き）

今までの時間は、レモンのように甘酸っぱく、苦い日々だった…

今後は、キッド様もいずれ登場させようと思います。
キッドファンの人、お楽しみに！！

第8話 完全なる解毒剤

(……………)

オレの鼓動は激しく音をたてた。

しかし、扉を開けて出てきたのは阿笠博士だった。

コナン「博士、博士なのか。無事だったんだな!？」

博士は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

阿笠「おお、来とったのか新一。じゃが、どうしたんじゃ？

ワシは身を心配するようなことはないんじゃが……」

コナン「いや、だってよ、テレビとパソコンはつけっぱなしだし、

コーヒーは煎れっぱなし、トドメに書類が散乱してるとなりゃあ、

誰でも何かあったんじゃないか、って心配するのが普通だろ?」

阿笠「すまん、新一。ワシのクセなんじゃよ、パソコンしながらテレビを見るのが……」

コナン「まあ、ホッとしたよ……ところで、灰原のやつはどうした?」

阿笠「ああ、哀君なら……」

「私はここよ、工藤新一君?」

コナン「灰原、本当にできたのか……？本当に元に戻れるのか……？」

クスッと灰原は不思議な笑みを浮かべる。

そして、灰原はそばにある棚から1つの薬を取り出して、こう言った。

灰原「ええ、そう、これがあなたと私の体を幼児化させた原因であるアポトキシン4869の完全なる解毒剤よ。

これを飲めば、もう小学生の江戸川コナンに戻ることはないわ……決してね……」

コナン「そ、そうか……ま、まてよ……お前、オレとお前の体を幼児化させた原因……」

って言ったよな……？まさか、お前も……お前もなのか……？」

灰原「ええ、私もあなたが考えているように、

あなたが無事元に戻ったの見届けたら、私も灰原哀に別れを告げるつもりよ……」

コナン「……………ホントにいいのか…………？」

オレはともかく、

お前まで元に戻ったらどうなるか…………」

灰原「……だって、しょうがないじゃない……」

私だって……私だってお姉ちゃんをジンのやつらに殺されたのよ？

お姉ちゃんのかたき、とりたいんだもの……

そのために組織を抜け出したようなものだし……」

………

コナン「まったくしょうがねえな……わかったよ……」

灰原は灰原なりにやるつもりなんだろ？

でも、どうするんだ？

俺たちは小学生という借りの姿に永久的に別れを告げないといけないんだろ？」

第9話 瞳の奥に秘めた思い

灰原「そ……そうね、工藤君も私も親の急な仕事の都合で……

っていうことにできたら1番いいんでしょうけど、

そんなことをしたら、私達2人が立て続けにいなくなったら……

あの子たちなら裏に何かある、って感ずくのも不思議じゃないでしょうね……」

（そう……私達は本来この世にはいてはならない存在……あの時……

あの時に本当なら工藤君も私も死んでいたはずなんだから……
借りの小学生としての姿……怖いわ……危険な匂いがすると真っ先に感じていたはずなのに、

最近鈍ってるんだわ……この灰原哀としての平和な生活に……）

コナン「……でもよかつじゃねえか。それだけお前がまともになってきた、ってことだろ？」

灰原は、その灰色のどこか寂しそうで悲しそうな瞳を向けた。

灰原「ど、どうして私の考えてることが……!？」

オレは思わず笑みがこぼれそうになりながら……

コナン「いや、やっとお前もまともになったんだな……つてよ。

それに、みえみえなんだよ、お前の考えていることは……

どうせ、おれとお前は本来いてはいけない存在……

とかなんとか考えてたんだろ？

でも、大丈夫だって。心配すんな。

危なくなったら蘭もお前もぜってえ守ってやつからよ……」灰原「
く……工藤君、あなた……あなた本当にわかってるの！？」

組織に背き、関った人間とその関係者がどうなるか……

本当に……本当に……」

その時、灰原の脳裏には組織に殺された姉の宮野明美のことがよぎった。

はあはあと荒い息づかいで、必死にそれを消しさろうと否定しながら……

この世にたった1人しかいない家族を失ったことを認めたくないように……

コナン「ああ、わかってるよ……今からオレがやろうとしていることが

どんなに危険で甘く苦い誘惑なのか……

でもよ……ダメなんだよ……

もう……もう……アイツの……アイツの涙はみたかねえんだよ……」
(工藤君……あなたもつらいわね……お互いに………)

しばらく静かな時間が流れる。

時計の針が指し示す音が聞こえなくなるくらい、

バクバクと音をたてる鼓動の中で、オレは蘭のことを思っていた。

第9話 瞳の奥に秘めた思い（後書き）

まだまだ数は少ないですが、数人の方から感想をいただきました。
ありがとうございます。

未熟で初心者な私ですが、これからもよろしく願います。

第10話 江戸川コナンを消す方法（前書き）

読者のみなさまへ

もうお気づきの方もいるかもしれませんが、途中から会話を誰がしてるのか名前を最初に入れていきます。

いきなり予告なく変更したこと、お詫びします。

第10話 江戸川コナンを消す方法

コナン「ところで、提案なんだけどよ……オレは両親の急な仕事の都合で転校、ってことでいいんだろうけどよ、

お前はどうするつもりなんだ？

なんなら、帝丹高校のオレのクラスに編入でもするか？」

灰原は、キツと怖い顔でこっちを睨んだが、

一瞬だけフツと笑みを浮かべた。

コナン「な、なんだよ……怖い顔で睨んだかと思ったら笑って……

お前って時々なに考えてるかわかんねえよな」

灰原はオレに顔を近づけてミステリアスな笑みを浮かべて言った。

灰原「クスッ……それは工藤君、あなたも同じことでしょ……？」

……まあいいわそれよりも、教育実習生のほうがいいんじゃないかしら？

いきなりいなくなっても不思議じゃないし、怪しまれないでしょ？

同じ元に戻るのなら、転校生も教育実習生もどっちも危険性には変わりないわ」

オレは右手の指を顎に当て、じっと考えた。

そう……いつものように……工藤新一が考えごとをする時にする癖を……

阿笠「大丈夫じゃよ、新一。君が考えているよりもいい方法じゃと思うよ」

コナン「まあ、博士がそこまで言うなら……

それでよ、江戸川コナンが転校するのはいつにするんだ？」
しばらくの間、沈黙状態が続く……

パソコンの動く音が聞こえるくらい……

この時間がどれだけ長く感じただろう……

灰原「そうね……いろいろ準備があるでしょうから、1週間後つてところかしら？」

なにしろ、江戸川コナンという人物を消さないといけないんだから……

もちろん、いずれ私も……」

オレは不安でどこか寂しい気がした。

そして脳裏には、蘭のことが浮かんだ。

今まで待たせてすまなかった……

もう少し……もう少しで正体を隠さなくてすむ……

アイツら……歩美ちゃんや元太、光彦らには悪いけどな。
長かったな……江戸川コナンは……

コナン「わかったよ……灰原がそう言うんなら何も言わないよ……」

灰原「じゃあ、1週間後、ここ阿笠博士の家に来なさい。

その時に薬を渡すわ。

じゃあね……工藤君……」

（灰原……お……お前……？）

コナン「……わかった……じゃあな……」

（灰原……気をつけろよ……）

オレは博士の家を出た。

外は綺麗な夕暮れで染まっていた。

(ヨッシャー!!)

やっと……やっと元に戻る!!)

!?

(今……今何か後ろを横切ったような……ま、いいか……)

オレは明日へと……守れなかった約束を守るために走り出した。

(ふう……ん……なるほどね……)

第10話 江戸川コナンを消す方法（後書き）

アイリーンです

皆さんは、名探偵コナンの歴代映画の中でどれが一番好きですか？

私は

、ベイカー街の亡霊、

もしくは

、迷宮の十字路、

がお気に入りです。

第11話 名言

外の雨はいつの間にか止んでいて、

空は漆黒の闇に染まりつつあった。

冷酷で極悪非道のやつらの色に……

それは、これから起こることを案じているかのようだった。

まさかこの後、元に戻ったオレに様々な試練が訪れるとは知るよしもなかった。

オレは、危険と幸せが混じり合っている未来に向かって走り出した。

オレは、とりあえず実の両親である、世界的人気推理小説家の工藤優作と

伝説の人気アイドル女優の工藤有希子に連絡をとることにした。

トゥルルルルルル………

コナン

「もしもし、母さんか？」

有希子

「あらあ、新ちゃんじゃない。新ちゃんのほうから電話してくるなんて、珍しいわね？何かあったの？」

（ハハハ……相変わらずだな……母さんは……）

オレは静かに話し始めた。

もう、これまでのように組織の黒い影から逃げなくてもよくなったから……

正体を隠し、周りを騙し続けなくてもよくなったから……

コナン

「……母さん……お、オレ……元の姿に戻るようになったんだ……」

有希子

「……ほ……本当なの！？……どうして……
どうしてそんな危ないことを一人でやろうとするの！？」

私が……私がどれだけ新ちゃんのことを心配してたと思ってるの！
？」

コナン「……しょうがねえじゃないか……灰原が完全なる解毒剤を完成させた、って言ったし、

それに……

それに……

もうアイツの悲しむ姿は見たかねえんだよ……

それに、前に言っただろ？

『君を確実に破滅させることができるのならば、僕は公共の利益のために喜んで死を受け入れよう。』

ってな。

もちろん、この選択がもたらす結果が、例え、危険で甘く、苦いもので、

それによって自分の命を落とすことになり、様々な試練が待っているとしても……」

そんなオレの決意を、母さんは静かに聞いていた。

最愛の一人息子が、好きな女の子に重大な告白をすることを静かに見守るように……

有希子

「クスッ……あら、妬けるわねえ……」

オレの顔は一気に赤くなった。

コナン

「バ……バ―口……んなんじゃねえよ!!」

有希子

「まあいいわ……それで？」

あの子はなんて言ってるの？」

第11話 名言（後書き）

さて、読者のみなさん、

アンケート第2弾！！

みなさんは、コナンの今までのアニメ放送の中で、どれが特に気に入っていますか？

私は、黒衣の騎士と工藤新一が殺人！？
が特に気に入っています。

次回以降も、コナン絡みのアンケートを実施しようと思います。

その他、そのアンケートのお題があったらどしどし送り下さい

第12話 戻る理由

(どうする……もうここまで来たら戻れない……本当にいいのか……)

オレはもちろん、灰原だって、歩美ちゃんたち、帝丹高校のみんな、小五郎のおっちゃん、

それに……それに蘭も危険にさらすことになる

………

まったく悩んでもしょうがない!!

オレは決めたんだ!!

組織と戦い、しかるべき時に蘭に全てを話すと……

それまで、オレや蘭たちの身に何もなければいいが……)

コナン「灰原は、江戸川コナンは両親の急な仕事の都合で海外に転校、

つてことにするのが、1番なるべく誰も傷つけずにすむ方法だろうから、つて……」

母さんは、深く息を吐く。

有希子

「しょうがないわね……あの子は他に何か言ってた？」

コナン

「オレが無事に元に戻ったのを見届けたら、灰原も宮野志保に戻るんだよ……」

しかも、帝丹高校に教育実習生として……だつてさ。

アイツにとって、オレは大事な実験体だからな……

それでよ、母さん、1週間後に毛利探偵事務所に、

江戸川コナンの母親として来てくれよな……元女優の演技、楽しみにしてるぜ」

有希子

「……わかったわ……」

コナン

「じゃあな……」

ここで、オレは電話を切った。

（新ちゃん……何かわからないけど、嫌な感じがするの……気をつけなさいよ……）

もう戻れない……

でも、後ろを振り向かずに、前を向いていこう……

蘭の笑顔を見たいから……

そして、オレは見えない明日に向かって走り出した。

ピーポーピーポー

……

（パトカーのサイレンの音……

遠くから……いや、意外と近いぞ……

何かあったのか……？）

（頑張れよ……名探偵……）

第12話 戻る理由（後書き）

おなじみアンケートのコーナーです!!

皆さんは、名探偵コナンの登場人物の中で誰がお気に入りですか？

私は、名探偵コナンの真の主人公である工藤新一様です。

後は、白馬探かな？（マニイ!!）

理由もあればあわせてお願いします!!

第13話 急な告白

夕暮れも深まった頃、オレは毛利探偵事務所の前にいた。

そう……すべてはここから始まった。

アポトキシン4869を飲まされて、体が幼児化、小学生の江戸川コナンになった……

あの時は、この仮の姿……偽りの姿に別れを告げることができるなんて、夢にも思っていなかっただろう……

それでも、オレは決めた。

例え、自分の目的を達成するためにどんな危険が伴なおうとも……

全ての謎を解き明かしたら、蘭……お前の側にいられるように……

どんなことにも耐えてみせると……

（ここまで……1年、か……長かったな……）

そしてオレは、探偵事務所の扉をゆっくりと開けた。

キイイイイ……

コナン「ただいま……蘭姉ちゃん……」

蘭「おかえり、コナンくん、今日はちょっと遅かったわね。
お腹空いたでしょ？」

待っててね？

今から美味しいご飯を作ってあげるから……」

その後ろ姿は、大切な人にご飯を作っているようで、とても幸せそうだった。

トントントン……

食材を切る音に混じり、鼻歌も聞こえた。

コナン「あの……あのね、蘭姉ちゃん……話があるんだけど……？」

蘭「なあに、コナンくん。学校のテストでも返ってきた？」

コナン「いや……そうじゃなくて……」

ボ……ボク……お母さんの急な仕事の都合で転校しなくちゃいけなくなっただ……」

……！？……

包丁が床に落ちる。

蘭「ど、どうして急にそんなこと……」

蘭の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

その姿は、必死に突然の出来事を否定しているようだった。

コナン「ボクだって……ボクだって、蘭姉ちゃんともっといたかったんだよ……」

でも、しょうがないんだよ……ボクのお父さんとお母さんの仕事で急に転校しなくちゃいけないんだから……」

蘭「わかってる……わかってるよ！！」

でもあまりにも急で……

コナンくんも新一みたいに急にいなくなっちゃうんだもん……

……

コナンくんが新一だったらよかったのにね……

バカね、私、何言ってるんだろ……

コナンくんが新一のはずなのに……」

蘭の胸は、今にも孤独と寂しさではちきれそうだった。

コナン「大丈夫だよ、蘭姉ちゃん……」

きつと、新一兄ちゃん、帰ってくるって……

だ……だからね……？」

そんな今のオレの精一杯の言葉に、蘭の涙はようやく止まった。

蘭「もう、コナンくんがそんなこと言わなくてもいいのに……でも、ありがと……少し元気出たよ。」

さあ、何食べたい？

今日はコナンくんの好きなもの何でも作ってあげるからね！」

コナン「わあい、ありがとぅ、蘭姉ちゃん……」

（すまない、蘭……悲しい思いさせちゃって……でも、それももうちょっとだから……

だからもう少し……もう少しだけ待っててくれ……）

第13話 急な告白（後書き）

またまたアンケートのコーナー!!

みなさんは、新一ちゃんと蘭ちゃんは結婚してほしいと思いますか？
そう思う人は、その2人の間に生まれた子供になんて名前をつけますか？

男の子と女の子にわけてどうぞ…

第14話 蘭は強い!?

そして翌朝。

その日は雲もなく、鳥のさえずりが聞こえ、柔らかな光が降り注いでいた。

コナン「おはよ、蘭姉ちゃん……」

……………!?

蘭「し……新一!？」

(や……やべ、起きてメガネをかけるの忘れてた)

オレは慌ててメガネをかけた。

小五郎「なに言ってたんだ、蘭？」

こいつが、あのお前をほったらかしてる小生意気な探偵坊主なわけねえじゃないか？」

そう朝刊を読みながら話しているのは、蘭の父親で

今じゃ泣く子も黙る名探偵、毛利小五郎。

と言っても、解決した事件のほとんどは、コナンのおかげでだ。

そして、無類の競馬と麻雀、お酒と美しい女の人好きである。
飲んだくれのとんだへボ探偵だが、数件だけ自力で解決したことがある。

蘭「そんなわけないでしょ？」

もう……

コナンくんがいくら新一の小さい時によく似てるから、って……

そんなことあるわけないのにね……」

蘭は、どこか寂しそうで懐かしいような顔をしていた。

（蘭、すまない……今はまだ言う時じゃないんだ……

すべての謎を解き明かしたら……組織と決着をつけたら……

すべてを隠さず話すから、もう少し……もう少しだけ待っていてくれ
……）

コナン「蘭姉ちゃんって……強いんだね……」

新一兄ちゃんがどこでどうしてるかもわかんないのに、

こんなに気持ちを強く持ててる……

ボク、新一兄ちゃんが羨ましいな……」

蘭は無理に笑顔をつくって見せた。

蘭「私は強くなかないよ……ホントは新一のことが心配でたまらないのに……」

思いつきり泣きたいのに……

勇気がないのかもね……」

しかし、次の瞬間、蘭の表情は一変して、強くたくましくなった。

蘭「でも、私信じてるんだ。いつか……きっと……新一がすべてを話してくれる、って……」

蘭からは並々ならぬ強い決意を感じた。

蘭「……ってもうこんな時間。早くコナンくんも支度しなさい。学校に遅刻するわよ!!」

コナン「あ、ホントだ。じゃあ、行ってくるね、蘭姉ちゃん!!」

第14話 蘭は強い！？（後書き）

とある読者の方から、1つ指摘を受けました。

私の中では、だいたいのストーリーと終わり方はすでに出来上がっています。その指摘もアドバイスとして受け取っておきたいと思っています。

ところで、そう言った私ですが、トリックの面では苦手で…誰かアドバイスしてくれる人はいませんか？

設定はネタバレになりますが、元に戻った新一くんが黒衣の騎士のように事件に巻き込まれる、という設定です。

その事件のトリックを皆さんにアドバイスいただきたく、この場を借りてお願い申し上げます。

第15話 久しぶりの電話

そして帝丹小学校2年B組の教室。

歩美「おはよ、コナンくん!!」

コナン「お、おはよう歩美ちゃん」

元太「おい、どうしたコナン。なんかいつもと様子がちがうんじゃないか？」

光彦「本当です。何か重大な決心をした後のような……」

そう、

昨日オレは重大な決心をしたんだ……

オレと蘭にとっての重大な……

それは、昨日のこと……

昨日の夜11時頃……

小五郎のおっちゃんも酒に酔ってすでに寝ていて、

蘭はちょうど戸締まりのために2階の探偵事務所にいた。

そしてその時、

ブルルルルル……

と探偵事務所の電話が鳴った。

（誰だろう、こんな時間に……）

蘭は少し不審がりながらも電話に近寄った。

！？

蘭は慌てて受話器を取った。

その理由は、受信画面に「非通知」と表示されていたからだ。

蘭「新一……新一なの！？」

コナン（新一）「よう、久しぶり……蘭」

蘭「今までどこ行ってたのよ！？こっちから連絡しようと思っても一向にできないし、本当に……本当に……心配したんだからあ！！」

コナン（新一）「わりいわりい、こっちも厄介な事件続きで忙しくてさあ……」

蘭「なによなによ!!
事件、事件、事件って……いつになったら帰ってきてくれるのよ!」

コナン(新一)「それなんだけどよ……」

もうすぐ今関わってる事件が片付きそうだから、

そっちに帰れるかもしれねえんだ……」

蘭「……それ、本当なの!」?

コナン(新一)「ああ、といつても1週間から2週間先になると思
うけどな……」

蘭「ホント……!」?

コナン(新一)「どうしたんだよ、蘭……?」

蘭「ううん、何でもない……ただあまりにも急で……」

でも……でも嬉しい!!

……よかった……本当によかった……」

コナン(新一)「……ごめん、蘭。今、一緒に捜査している刑事さ
んが呼んでるから切るよ。」

でも、安心してくれ。

ぜってえ帰ってくるし、すべてが終わったら……時がきたら……
いつかすべてを話すから……

じゃあまたな」

蘭「あ、ちょっと新一ー!!」

プープープー……

（新一……ホントに帰ってくるんだよね？

あの時のことが昨日のことのように感じるわ……

私……私、嫌な感じがするの……

大丈夫だよね、新一……？）

第15話 久しぶりの電話（後書き）

蘭ちゃんを感じている何かわからない不安とは…！？

さて、アンケートのネタが切れてしまいました…ゞ（´ー`）
ここで、逆に私に聞きたいことはありますか？
ある人は、一緒をお願いします。

第16話 浮気はダメだよね!?

時は元に戻り、朝、帝丹小学校の2年B組の教室で……

光彦「そうですね、言われてみれば……」

まさか、何か僕たちに隠してる可能性があるんじゃないでしょうね!」

コナン「いや……だから、それは……」

灰原「愛しの愛しの彼女と喧嘩でもした?」

コナン「バ、バーロ! んなわけねえだろ?」

歩美(コナンくんの愛しの愛しの彼女、って誰なんだろ……? でも、浮気はダメだよね!! (笑))

とその時、教室のドアが開いて、先生が入ってきた。

先生「はあい、みなさん。座って座って」

担任の先生のその声に、オレたちはみな自分の席に座った。そして、それを見届けると先生は静かに口を開いた。

先生「ええ、みなさんに残念なお知らせです。」

このクラスの一員である江戸川コナンくんが、

両親の仕事の都合で1週間後に転校することになりました」

クラス全員「えーーーー!?」

歩美「ほ、本当なの、コナンくん!？」

光彦「どうして今まで黙ってたんですか!？」

元太「オレたちみんな少年探偵団の仲間じゃねえか!？」

クラスのみんなと歩美ちゃんたちは、鳩が豆鉄砲をくらったように
びっくりした顔をしていた。

灰原「そんなこと言わないであげて。

彼はあなたたちの悲しむ顔を見たくなくて言わなかったのよ」

光彦「それで、いつどこに転校するんですか？」

コナン「海外だよ」

そう言った瞬間、歩美ちゃんと元太の顔は、不謹慎にも輝いていた。

歩美「いいなあコナンくん」

元太「鰻重なんかいくらでも食べれそうだな」

コナン「おいおい、お前ら……」

今はそんなことを言う時じゃねえだろ？」

元太「だってよお……」

光彦「でも、寂しくなりますね……」

歩美「もう会えないのかな……」

歩美ちゃんたちは、オレ、江戸川コナンという人物が永遠にいなくなり、一生会えないとは考えていなかっただろう。

コナン「そんなわけねえよ。月に1回は手紙を書いたりするからよ、

それまでいつも通り少年探偵団、頑張ろうぜ!!」

第16話 浮気はダメだよね！？（後書き）

そろそろ、コナンくんという人物がいなくなる時が近づいてきました。

歩美ちゃんの一言は、とても小学生とは思えません！！

さて、みなさんに私からいろいろアンケートがありました。が、逆に私に質問はありますでしょうか？

どんなことでもかまわないので、感想と併せてお待ちしています。

第17話 いなくても…

元太「お、おう。任せとけ!!」

歩美「私、がんばる!!」

光彦「コナンくんがいなくても大丈夫ですよ……ですよね、灰原さん?」

灰原はクス、っと笑った。

灰原「ええ、そうね。鬼の居ぬ間に洗濯、っていうところかしら?」

コナン（おいおい灰原……オレのことを鬼……ねえ……それにしてもよ……時々思うんだけど、お前って、小悪魔だよな……）

灰原（あら、ありがとう。ほめてくれてるのかしら?）

コナン（いや、違うんだけど……）

光彦「2人で何を話してるんですか?」

コナン「だー!!」

ああ、もうそれはいいから早く帰ろっぜ!!」そう言って、オレは足早に教室を出て行った。

歩美「ホント、コナンくんは脱走とかくれんぼだけはうまいんだから」

そして、オレたち5人は米花公園にサッカーをするために向かった。
しかし、米花公園も見えてきたころ、なにやら人がたくさん集まっていた。

光彦「なんでしょう？」

歩美「きつと、事件よー!!」

元太「よーし、少年探偵団、出動だー!!」

光彦・歩美・元太「おーーー!!」

歩美ちゃん、光彦、元太たちはその人だかりに向かって元気よく走っていった。

コナン「おいお前ら!!……… ったくしょうがないな………」

(とか言っつて、オレは事件かもしれないので、うれしいのだが………)

灰原(工藤くん、あなたって子供ね……… まあ、許してあげるわ。もう少し……… もう少しだものね……… 江戸川コナンとしての残り少ない時間をじっくり楽しむといいわ………)

第17話 いなくても…（後書き）

久しぶりです。

ある先生から指摘をうけたので、読みやすいように文章を少し変えました。

次回からもよろしくお願いします。

第18話 ある春の日（前書き）

読みやすいように文章表示を少し変更しました。これからも更新していこうと思っていますので、どうか応援よろしくお願いします！！

第18話 ある春の日

江戸川コナンとしての時間が残り少なくなったところ……

トキはオレが小学2年生になったばかりの春のこと……

時刻は夕方

赤くてきれいな夕暮れが、次第に黒い闇に染まりつつあった。

黒の組織の、冷酷かつ残酷なやつらの色に……

そしてその組織の情報を追っているうちに、オレが幼児化してから1年がたち、もう少しで組織の正体がかめそうなところまできていた。

そんな春の日、オレたち少年探偵団はまたまた事件に遭遇しようとしていた。

歩美「やっぱり目暮警部と佐藤刑事に高木刑事だー!!」

佐藤「あれ、コナンくんじゃない。どうしたの？」

元太「コナンのやつと米花公園でサッカーする予定だったんだけどよ……」

光彦「コナンくんがもうすぐ転校しちゃいますから……」

歩美「その前に、少しでも少年探偵団として活躍しようと思って……」

……」

目暮「そうか、コナンくん転校するのか……」

高木「いつもおもしろいことに気付いて、事件解決に導いてくれたのに……残念だなあ……」

目暮「そうだな、工藤君がいてくれたらこんな事件もすぐ解決してしまうんだろうが……」

高木「コナンくん、工藤君のこと、何か聞いてないかい？」

佐藤「工藤君の遠い親戚なんですよ？」

オレはドキッとした。心臓の鼓動が激しくなり、冷や汗が左の頬をゆっくりと静かに落ちていく。

その工藤新一が目の前にいるオレ、江戸川コナンだとは夢にも思わないだろう。

体が幼児化して小学生になって、たまに元に戻ることも……

そんな簡単に体が伸び縮みしたら、完全犯罪なんかし放題だが……

それにしても、まわりの人たちはオレたちを見て、不思議に思わないのだろうか？

どこに警視庁の殺人や放火、誘拐などの凶悪事件を担当する刑事さんと知り合いの小学生がいるだろう？

コナン「うん、新一兄ちゃんなら、まだ事件の捜査で忙しいみたいだよ。ところで、何か事件があったんじゃないかなったつけ？」

第18話 ある春の日（後書き）

久しぶりに更新しました。何か表現とかその他のことで言いたいことがあったら、素直にお願いします。

第19話 不安と運命（前書き）

久しぶりの更新です。いたらないこともありますが、これからもうか応援してください

第19話 不安と運命

目暮「ああ、そうだったね」

（まったく…こいつら（↑高木刑事と佐藤刑事）は……）

目暮警部は黒く染まりはじめた空を見上げながら、ぼーっとしていた。

冷酷で残虐極まりなく、目的のためならいかなる手段をこつじてでも、達成しようとする黒の組織のやつらの色に……

しかし黒の組織といっても、詳しいことは何ひとつわかっていないのが現状だ。

いったいやつらは何をしようとしているのか？

オレを小さくしたアポトキシン4869という妙薬は、どのようにしてうまれたのか？

そのうち、オレが幼児化して生きていることがバレて、蘭たちまわりの関係者全員に危害が及ぶのではないだろうか？

そう考えると、不安で不安でたまらなかった。

オレはとんでもないことに巻き込まれたのではないだろうか？

そう、あの時、蘭と行ったトロピカルランドで、謎の組織の取引現場を目撃しなければ……

いつもの道を通り、いつものようにしていれば、こんなことには……

こんなことには……

いつそのこと、今までのすべての記憶を……

蘭と笑い、驚き、ケンカをし、事件を解決していたあの生活・記憶を忘れて普通のどこにでもいる高校生の工藤新一（江戸川コナン）としていたらどんなに楽だろうか？

そうすれば、もう組織の黒く、闇に紛れて静かに音もなく忍び寄ってくる魔の手に怯えなくてもすむ……

そう……

オレの組織に関する記憶がなくなれば、蘭たちに命の危険が及ぶこともないだろう……

そう、オレの記憶さえなくなれば……

ハッ！！

いけないいけない……

オレは、いつからこんなにも不安で自信喪失な人間だったのだろうか？

あんなに、自信たっぷり事件を捜査し、解決していたのに……

このままじゃダメだ

勇気を振り絞って、やつらと対決しなければいけないのに……

これからは、その今にも消えてしまいそうなのはかない勇気を心の奥に大事にしまい、大切にしながら、自分の運命を悟りながら、戦うことを誓おう……

そうオレは考えていた。

歩美「コナンくん、どうしたの？深刻そうな顔して……」

その歩美ちゃんの声に、オレはハッと現実世界に戻った。

「コナン、うん、なんでもねえよ……」

第20話 まさか…（前書き）

みなさん、こんにちは。そしてお久しぶりです。

事情があつて、長いこと更新できませんでした。

本当にごめんなさい。こんなにもほうつておくのは、小説を書く者として失格ですよ…なかなか他の人の指摘とかも反映できませんし…本当にごめんなさい。

これから、なるべく皆さんの貴重な意見・ご指摘を反映しようと思います。

辛口でもかまいません。どうか素直に思ったことを言っして下さい。

最後に、こんな作者でもよければ、これからもよろしく願ひします。どうか応援してください。

第20話 まさか…

コナン「それで、話それたけどさ警部さん、なんかあったの？こんなに人だかりとパトカーがいっぱい……」

歩美「きつと何か重大な事件があったのよ！！」

光彦「少年探偵団としては、見逃すわけにはいきませんね」

元太「よおし、少年探偵団、出動だー！！」

コナン「あ、おいお前ら……」

オレがそう呼び止めるのも聞かずに、歩美ちゃんたちは詳しい経緯や事情を聴こうと、周りにいる野次馬たちの人混みの中に入っていた。

ここんとこ事件がなくて退屈（？）だったけど、その顔は久しぶりにエサにありつけた犬のように輝いていて、また狩りをするサバンのライオンのようにたくましくも見えた。

灰原「彼ら、たくましくなったわね。あなたと出会う前と比べたら……」

そんな灰原は、どこか不安でもあるし安心もできるような複雑な顔をし、微笑さえも浮かべた。

バックの黄金色の沈む太陽の光を背中に浴びながら……

その灰原を見て、オレは思わずクスッと笑ってしまった。

灰原「なによ、私の顔に何かついてる？」

コナン「いいや、変わったな……つかお前も笑うんだなあ……転校してきた頃は24時間常に組織の追っ手に怯えて警戒してたっていうのに……」

灰原「そうね、それだけ平和になった、っていうことかしら？」

そんなオレと灰原のちよつと大人で普通の人には理解が難しい会話を聞いていた目暮警部は、不思議そうにオレらを見つめていた。

目暮「あの……コナン君？」

コナン「ああ、ごめんなさい、目暮警部」

目暮「オホン！ー！それでさっきの君の質問に答えるとだな……高木君」

高木「はい」

高木刑事たちは、ようやく本題に入れるよ……と仕事モードの顔になった。

目つきが鋭く、いかなる悪事も事故も防ぎ解決しようとする刑事の顔に……

高木「死亡していたのは、この近所に住む会社員、緒川仁志さん。年齢は28歳。職業はプログラマー。発見されたのは、今日の午後

3 時点で第一発見者は近所に住む主婦。犬の散歩中だったそうです」
コナン（プログラマー……？そういえば、前にも原さんっていう人が組織の一員でジンのやつらに殺された、っていう事件があったよな……まさか今回もまた奴らの犯行じゃないだろうな……）

オレはそう嫌な予感がしたが、恐る恐る聞いてみた。

万が一にも奴らの仕業じゃないことを心のどこかで祈りながら……

コナン「それで、死因は……？」

第20話 まさか…（後書き）

さて、コナンファンの人ならもうご存知かと思いますが、今回の作品中にちよつとだけ出てきた、プログラマーの原さんって人は知ってますか？映画『天国へのカウントダウン』から少し引用させていただきます。

ところで、みなさんは今年の映画見ましたか？見た人は、どのように感じましたか？そして、次回映画作品にどのような期待をしますか？

ながながとなりましたが、気が向きましたらご回答よろしく願いいたします。

第21話 カラー（前書き）

今回は、ちょっと長いです…

第21話 カラー

コナン「それで、死因は……？」

高木「死因は胸部を銃で撃たれたことによる出血死。ほぼ即死状態だったようです」

コナン（銃にプログラマー……っ なわけねえよな……）

そうまた奴らの犯行なんかじゃないと嫌な感じがした時、オレの後ろで灰原が青ざめた顔をしていて震えていた。

コナン「どうした、灰原？」

灰原「工藤君、私……組織のにおいがする……」

一気に顔が緊張感と共に引きつる。

コナン「おい、ま、まさか奴らの犯行なんじゃ……」

灰原の緊張感はまだ続く。

灰原「わからないわ……死んだあの人から組織の匂いがする、っていうだけ……。でも、知ってるのよ、あの人を……」

コナン「組織で一緒だったとか？」

灰原は、恐怖に自分の体と感情を支配されそうになるのを必死にこらえていた。

灰原「ええ、あの人は優秀なプログラマーだったの。そしてそこに

組織は目をつけ、私と競わせて新たなる毒薬を作らせようとしたわでも……」

コナン「でも……？」

灰原「自分が作らされている薬が、とても恐ろしいものだとかつたのでしょね。彼は組織の黒い色にまだ染まりきっていなかったから……そして、彼は脱走した。その後、私は彼と開発競争していた薬を完成させた……それがアポトキシン4869よ」

コナン「そして、緒川仁志さんはジンに殺された……でも、まだそうと決まったわけじゃ……」

その瞬間、一転して灰原の顔と口調は陰しく、激しくなった。

灰原「あなたまだわからないの！？かつて組織の一員だった彼が殺された……そして彼は私と近い関係にあった……それだけで充分よ、私を誘き出すのは……」

灰原の表情は、より恐怖と不安に染まっていった。夕方、それはまるで奴らのシンボルカラー、黒が、死、という鋭利で冷たい刃が灰原を包み込むようだった。

オレは、そんな灰原をなるべく安心させるように言う。

コナン「大丈夫だ、心配すんなって……例え奴らの犯行でそれがオレと灰原を誘き出すためだったとしても、守ってやるからさ。蘭もお前も……」

灰原「工藤君……」

佐藤「あの、コナン君？さっきからなに話してるの？」

高木「いつもの君なら、事件のこととかもつと詳しく聞いてくるのに……」

目暮「そういう我々も、事件とはなんの関係もないただの小学生に事件の概要をもらしてはいるがね……」

高木「あ、はい、すみません……」

佐藤「いつものくせで、つい……」

目暮「まあいい、小学生は早く家に帰りなさい。ほら、君たちも」

光彦「はい」

歩美「じゃあね、コナン君、灰原さん」

元太「また明日な!!」

歩美と元太、それに光彦は元気よく走っていく。

コナン「さあ、オレたちもそろそろ帰ろうぜ」

灰原「そうね、まあ、精々元に戻ったら私を守ることね。」

(ははは……相変わらずクールで可愛げがないやつ……)

第21話 カラー（後書き）

なかなか前に進まなくてごめんなさい。

でも、今から少しずつ物語の中心に入っていくので、最後までどうか駄文にお付き合いください。

第22話 大切なトキ（前書き）

今まで、投稿済の誤字脱字をどうやって直すのか、恥ずかしながらわかりませんでした。今後は、ゆっくりですが直していこうと思いますので、どうかよろしくお願いします。

第22話 大切なトキ

そして、江戸川コナンとしての最後で大切な日々は、1日1日と過ぎていく

組織との長年にわたる戦いに、決着〱ケリ〱をつけようとする自分……

大切な人と笑顔を亡くさないために、

そして何よりも、蘭に、オレの本当の声で、本当の姿で、本当の気持ちで……

『ありがとう』

『ただいま』

と言いたい

いつか、死んでも帰ってくる、って言ったよな……？

どうして今までこんな大切なことを疑われても隠し続けてきたか……

なぜ姿を急に現したり消したりするのか……

そして、江戸川コナンとオレの本当の姿である工藤新一との関係は……

聞きたいことはいっぱいあるだろう

それでも、時が来たら……話してもいいという日が来たら……何もかも塵1つもない真実を話す、と約束しよう

それまで、もう少し、もう少しだけ待っててくれるか……？

そう心の整理をしていると、あっという間に時間トキは過ぎていく……

涙もろくて、世話やきで、友達思いで、優しくて、素直になれないちんちくりんの蘭とオレのための……

いつもと変わらない柔らかな日差しが降り注ぐ4月終わりの朝、運命の日はやってきた。

蘭「おはよう、コナンくん。とうとう今日でお別れだね……あたし、コナンくんと一緒にいると、まるで新一がずっと側で守ってくれたみたいで、嬉しかったな……」

小五郎「ふん、いつまでも姿を見せない坊主をいつまで待ってるんだか……」

蘭「もう、お父さんったら……新一は、今事件の捜査で忙しいの！

！
┐

（ハハハ……相変わらず素直じゃないおっちゃん……）

第23話 一発殴って…

蘭「それでね、コナンくん。新一、なにか言ってなかった？」

毛利のおっちゃんは、コーヒーを飲みながら朝刊に目を通している。

小五郎「案外変な薬を飲まされて、どっかに隠れてんじゃないのか？」

ドキ…！

（ハハハ……ほとんど当たってやがる……それが今目の前にいる才
レだなんて、到底言えねえよな……）

蘭「もう…！お父さんったら……そんなわけないでしょ！？」

オレは、慌てて話題を変えようとした。

工藤新一が表舞台に現れなくなったのと、おっちゃんが名探偵として有名になりだしたのは同時期だから、工藤新一があの時死なずに実は生きていて、小五郎のおっちゃんにアドバイスしていると、誰でも簡単に想像できるだろう。

（そしてオレが本来の姿を取り戻した後（江戸川コナンという実在しない人物を消した後）、そこに組織が気付くにしてもしないにしても、関係者全員が悪の毒牙の標的にされてしまうのは避けられないだろう……）

コナン（守ってやらなきゃな……涙もろくて正義感が強いコイツを……例えば自分が組織との戦いで記憶をなくし、蘭たちのことを守ってあげられなくなったとしても……）

蘭「ん？なにか言った、コナンくん？」

（やべっ！！今の聞かれてたかな……？）

オレはなんとか取り繕うとする。

コナン「いや……その……もし新一兄ちゃんが帰ってきたら、蘭姉ちゃんは許してあげるのかなあ、って……」

蘭は、立ち上がって笑顔で答える。

蘭「もちろん……ハアアアア……」

ボコオオオ！！

蘭の空手をくらったロッカーは、すごい音とともに歪んでしまった。

……

蘭「一発殴って許してあげるわよ」

コナン（怖っ……蘭の一発なら人を殺しかねないな……）

蘭「あらなにか言った、コナンくん？」

蘭は指を鳴らしながら睨んでいる。

コナン「あ、学校行かないと……行つてきまーす!」

蘭「気をつけてね、コナンくん。ほら、お父さんも……今日は依頼人が来るんでしょ？」

小五郎「わあってるよ……」

(コナンくん……とうとう今日お別れだね……)

第23話 一発殴って…（後書き）

誤字脱字を直す方法がわかりません…教えてください方は、小説家になるう秘密基地、までか直接コメントと共によりしくお願いします。

追伸

まだわかってないことも多いダメな作者ですが、どうかあたたかく応援してください。

第24話 作者より皆様へご挨拶2

みなさん、こんにちは。作者のアイリーンです。

さて、もうすでにお気づきかと思いますが、現在進めている作品の題名を少々変更させてもらいました。

突然で、しかも何も事前に報告がなく、大変申し訳なく思っております。。。。

今までの流れとこれからの展開をもう1度考えた結果、タイトルを変えたほうがよりわかりやすく、かつイメージにもあうと思ったので今回、こうして数少ない私の作品の読者の皆様、そしてそうじゃない方にもこうしてご報告させていただく機会をつくらせてもらいました。

さて、今までなんとか更新を続けてきましたが、最近、なかなかアイディアが浮かばなくてスランプ気味です…………

続きを楽しみにしてくれている読者の皆様には、とてもゆっくりの更新と物語の展開について物足りない方もいることでしょう。

そこでお願ひがあります。

少しでも変に感じたり思ったことがあったり、逆に私に質問したいことなどありましたら、何でもいいし辛口でもいいので、遠慮なくよろしく願ひします。

そして話は別に変わりますが、先日ようやく過去に公開した文章の誤字脱字を直すことができました。

何人かの読者の方から指摘はされていたのですが、方法がわからずここまで時間がかかってしまいました。すみません。。。。

最後に、この駄文をここまで読んでくださった読者の方々、そしてコメントをしていただいた方、これからも読みやすく、面白い作品を作っていく努力をしますので、当作品をどうか末永くよろしくお願いたします。

第25話 ぜえええったい…（前書き）

久しぶりの更新です。超マイペースでごめんなさい。

第25話 ぜえええったい…

そして、帝丹小学校2年B組の教室では…

光彦「コナンくん、遅そいですね…。」

元太「朝ご飯おかわりして遅刻してんじゃないのか？」

歩美「もう、やだぁ元太くんったら…。」

光彦「あ、噂をすれば…来ましたよ！！みんな！！静かにして！！」

オレは、何も知らずに教室へと向かって歩いていく。

とうとうお別れだな…

案外、江戸川コナンも楽しかったな…

みんなと一緒に…

ここまで…長かった……………

そんなことを考えながら、オレは教室の前まで来た。

しかし、なんだか教室の様子がおかしい。

静まり返ったように物音ひとつしない異常なまでの静けさ…

(ま…まさか…いや、そんな……………)

最悪の事態を予想した。

中では、歩美ちゃんたちがジンのやつらに拳銃を向けられてるんじゃないか…

いや、それとも

もう、すでに……………

「は、は、は…ぶあつくしょん!」

(……………へ!?!……………くしゃみ!?)

そんなオレが人知れずみんなの身の安全を心配しているとは知らず、誰かがくしゃみをする音がした。

コナン「い、今は…元太？無事だったのか！？」

そっいいながら、オレは勢いよく教室の扉を開けた。

………

教室にいるすべての児童の視線がオレ1人に集まる。

みんなは無事だったようだ。

光彦「無事ってどういうことですか？」

歩美「あたしたち、そんな心配されるようなことはしてないんだけど…？」

オレはどう弁解するか言葉に迷った。

コナン「いや…その…。」

歩美「ふうん？まあいいわ。最近のコナンくん、ちょっと変だけど

…それよりも、ほら、光彦くん…。」

光彦「あ、あれですね…。」

光彦は、カバンの中にしまっていた白くて四角いものを取り出した。

そして、こういいながらオレにそれを手渡す。

コナン「なんだ、これ？」

光彦「僕たち2年B組のみんなとコナンがお互いのことずっと忘れないように、ってメッセージを書いたんです。」

コナン「お、お前ら…。」

オレは、胸の底からなにか暖かい風が吹いたような気がした。

暖かく、ぬくもりのある柔らかく優しい光が…。

コナン「あ、ありがとう…。」

お互いに涙が出そうになるのを、必死にこらえた。

泣いたら、会えない…

別れなきゃいけないのなら、笑って別れよう…

コナン「永遠の別れなんてことはないぜ。1ヶ月に1度は連絡するからよ…。」

光彦「本当ですか!？」

歩美「コナンくん、私のこと…少年探偵団のこと…クラスのみんなのこと、絶対、ぜえええったい忘れないでね!!」

歩美ちゃんをはじめ、クラスのみんなはいつの間にか大粒の涙を流しながら泣いていた。

(愛されてたんだな…江戸川コナンは…)

第26話 別れの時（前書き）

久しぶりの投稿＋かなり長めですが、それでもよければよろしくお
願いします

第26話 別れの時

そして、運命の日の授業は滞りなく終わった。

その授業中、オレはずっと蘭のことを考えていた。

今まで、長かった…

そういえば、すべてはあの時から始まったんだよね…

あの時黒の組織の謎の取引現場を目撃し、殴り倒されてアポトキシ
ン4869を飲まされて江戸川コナンになる必要がなければ、こう
いう生活はなかったかもしれない。

小学生に逆戻りして、歩美ちゃんたちと少し危険で、でも冒険的な
生活ができるなんて…

アポトキシン4869に感謝するわけではないけど…

でも…

江戸川コナン…楽しかったな…

ありがとう、みんな…そしてさよなら…

そして授業も終わり、オレたち少年探偵団は毛利探偵事務所にむかった。

ゆつくりと

いてよかった

一緒にいれてよかった

そんな気持ち確かめるように、噛みしめるように…

そして毛利探偵事務所に着いた時、オレの携帯が鳴った。

そこにはたった一言

『もうすぐ行く』

というメール

(そうか…いよいよお別れか…)

オレはずっと開けたくても開けられないでいる鉄のかたい扉を開けた。

蛍光灯の明るい光と夕暮れ時の色が混じっている。

歩美「蘭お姉さん、キレイ…。」

コナン「蘭姉ちゃん…？」

蘭の後ろからぐれん色の美しい光が注いでいる。

そして、蘭の顔には光るものが…

コナン「蘭姉ちゃん…泣いてるの…？」

蘭はようやくオレたちに気付いて振り返った。

蘭の純粹で美しい瞳から、銀色の涙が静かにこぼれ落ちている。

蘭「あ、歩美ちゃんたち…それにコナンくん。お帰り…嫌なところ見られちゃったかな？待っているだけって、こんなにも辛いんだね…でも、新一が待っててって言ったから…死んでも帰ってくるって言ったから…。」

蘭の瞳からは次々と大粒の涙が落ちる。

コナン「大丈夫だよ、蘭姉ちゃん…新一兄ちゃん、きっと帰ってくるよ…例え別人になったとしても、きっと…だから元気出して？」

蘭はつらそうな微笑を浮かべた。

蘭「コナンくんが新一だったらよかったのに…バカね、私…コナン

くんが新一なわけないのに…。」

（悪い、蘭。ホントはオレなんだ。オレが工藤新一なんだ。姿形は変わってもずっとそばにいたんだ…訳あって今は真相を話せないけど、いつか時が来たら…真実を話すと約束しよう。だから、だからもう少し……）

ピンポン

ピンポン

ベルが鳴る。

（ついに来たか…江戸川コナンに別れを告げる時が…）

扉を開けて入って来たのは、江戸川コナンの母に変装したオレの母親だ。

母さんはオレを見るなり抱きついてきた。

母「コナンくん、寂しかったでしょ？今まで1人にしてごめんね。
さあ、みんなにお別れの挨拶をしなさい。」

コナン「歩美ちゃん、光彦、元太、それに蘭姉ちゃん…今まで短い
間だったけど本当にありがとう…ボク、みんなに会えてうれしかった…
幸せだったよ…遠くに離れ離れになっても絶対に忘れないから…」

光彦、元太、それに歩美ちゃんたちは大泣きしながら聞いていた。

コナン「それから、蘭姉ちゃん、新一兄ちゃんからなかなか連絡が
なくて不安で心配してると思うけど、絶対に…絶対に新一兄ちゃん
は帰って来るから…どんなになってもきつと帰って来るから…だから
心配しないで？お願い。」

蘭はますます涙をこぼす。

蘭「ん、わかった。ありがとう、コナンくん…私を勇気づけてくれ
て…。さあ、飛行機の時間が来ちゃうから…バイバイ…コナンくん…」

車が走り去るのを見送るのかと思ったが、蘭はそうそうに事務所に
帰ってしまった。

まるで、これ以上愛する人が自分の目の前からいなくなるのが耐え
られないかのように…

(蘭…もつすぐ会えるよ、今度は工藤新一として…)

第26話 別れの時（後書き）

いよいよ次回からコナンくんが元の姿に戻る章が始まります。非常にスローペースでしたが、ここまでつきあってくれた読者の皆様に感謝します。これからも応援よろしくお願いします。

第27話 いよいよ…

阿笠博士の家に向かうまでの時間は、とてつもなく永遠のトキのよう感じた。

でも、もうすぐ本来の姿を取り戻すことができる。

蘭の涙を見ないですむ。

自分を偽らないですむ。

そう自分を偽り続けていたら、あの時からあっという間に1年がたっていた。

その間必死に組織の情報を集めようとしたものの、まだ何もわかっていないのが現状だ。

いったいやつらは何者なのか？

何をしようとしているのか？

どのようにしてオレと灰原の体を幼児化させた妙薬、アポトキシン4869は作られたのか？

そして、あの方とは誰なのか？

まだわからないことが多すぎる。

それでも、一步一步進んで行かないといけない。

例えば先にどんなことが待っているとしても、そのために己自身の命を落とすことになることも…

有希子「新ちゃん、着いたわよ。」

そんなことを考えているうちに、阿笠博士の家に着いたようだ。

オレは門を開け、玄関のドアを叩いた。

コナン「博士ー灰原、いるのか？入るぞ！！」

扉を勝手に開けて入ると、灰原はパソコンの前でキーボードを打っていた。

コナン「なんだ、いたのか。いるんなら返事しろよな。」

灰原は打つのを止めて振り返る。

灰原「あら、彼女に別れの挨拶はすんだの？」

コナン「ああ。それで、解毒剤、くれるんだよね…？」

灰原は立ち上がり、そばにある棚から1つの薬を取り出しながら言った。

灰原「ええ、これがアポトキシン4869の完全なる解毒剤よ。これを飲めばもう元に戻ることはないわ。決してね…。」

オレはごくつと唾を飲んだ。

胸がバクバクと鳴る。

灰原「最後に1つだけ聞かせてちょうだい。ホントにいいのね？ここを過ぎたら、もう後戻りはできないわよ？」

コナン「ああ、覚悟はできている。どんなことが起ころうとも、耐えて蘭と笑い合いたい。だから頼む！！オレに解毒剤をくれ！！」

灰原は深く息を吐いて続ける。

灰原「わかったわ。じゃあ、これが解毒剤よ。戻ったら1度連絡することね。」

灰原はオレに薬を渡した。

それを受け取り、オレは隣の工藤邸に向かった。

仮住まいしていた沖矢昴さんは新しい住まいが見つかった、とかでついこないだ出て行ったばかりだ。

門は久しぶりの家主の手によって開けられた。

そして、まっすぐに2階の自分の部屋に向かう。

母さんは1階を懐かしそうに見ている。

周りに誰もいないことを確かめて部屋に入る。

そして薬を飲む。

バグー！

バグー！

（来た来たー！！）

段々痛みが酷くなる。

体中の骨が溶けるような

（久しぶりの感触だな…でもいつになっても慣れないけど…）

……

そしてオレは意識を失った。

第28話 最も出会いたくない…（前書き）

今回から、コナンくんが新一に戻るので、セリフの最初の人物名を
コナン↓新一に変更しました。

第28話 最も会いたくない…

そしてどれだけの時間がたっただろうか？オレはまだ意識が朦朧とする中、目を覚ました。

（戻ったのか？…オレは…無事に…）

立ち上がろうとするが、なぜか力が入らない。

膝を床につき、ふと横を向く。

そこにあつた鏡には、元の本来の体に戻った自分、工藤新一がいた。

（あーあ、服が破れかけてるよ…まあしゃあねえか…体が急に大きくなったんだから…）

！？

そう考えていた時、ふと人の気配がした。

（ま、まさか…）

恐る恐るその方向を向こうとすると…

「よお！！無事に戻れたみてえだな、名探偵君？」

新一「キッド！！どうして…。」

キッド「いや、なに、愛しの愛しの最も出会いたくない恋人が元に戻ると風邪の噂に聞いたんでね。」

（ははは…相変わらずキザなやつだな…）

新一「それで何の用だよ？それを言うためだけに、わざわざ警察の包囲網の中をここまで来たんじゃないやねえんだろ？」

夕暮れも深まった外からは、パトカーのサイレンの音と何人もの足音があわただしく聞こえる。

そしてその聞こえてくる中で一番目立つのが、「探せ！！この近くにいるはずだ！！やつを逃がすな！！」という怪盗キッドの逮捕に全精力を注ぐ専任捜査官、中森警部である。いつもあと1歩のところで逃げられているのは、キッドの方がずる賢さの面で上回るからか…

キッド「まあ、それはだな……………」

目当ての宝石が見つかったから、そのご挨拶にな。」

新一「そうか……でもやめるなよ……お前がいねえとオレ……張り合いがねえ……ん……だよ……」。

オレは、先ほどから感じていた謎の疲労感から崩れるように床に倒れ込んでしまった。

第28話 最も会いたくない…（後書き）

やっと元に戻った新一くんですが、なぜか体調が悪いみたいで…掲示板のほうで「記憶喪失にする方法」とかでみなさんからアイデアを募っていました。が、オリジナルテイに欠けると思いましたので、私が考えている方法にすることにしました。みなさん、すみません、そしてアイデアありがとうございます！！

最後に、みなさんだったらどんなコナン最終回のシナリオを考えますか？

第29話 副作用！？（前書き）

今回はセリフが多いです。しかも長め…

第29話 副作用！？

オレはゆっくりと床に崩れ落ちた。

キッド「！？おい、どうした工藤新一！？」

キッドはキッドの服装のままオレに近寄って声を掛ける。

その覗き込んだ顔からは汗が流れ落ち、荒い息づかいをしている。

キッド「なんだよ、すごい熱じゃないか！！すぐに医者をして……じゃなかった、隣に住んでいるちっこい姉ちゃんを呼んでくる！！」

キッドは入ってきた窓から出ようとする。そんなキッドの白いマントの裾を力が入らない手で精一杯掴んだ。

新一「待ってくれ、キッド……灰原と博士、実の両親以外にはまだオレの正体を言うわけにはいかないんだ……そして頼みたいことがある……これを……この包みを毛利探偵事務所のポストに入れておいてくれ……差出人の名前を書かずに……時期をみて関係者には必ず本当のことを言うから……た……たの……む……」。

意識が再び途切れようとするその瞬間まで、オレは蘭や関係者の無事を、その包みを無事に届けてくれるように願っていた。

そんなオレのたった1つの願いを感じたのか、キッドはきびすを返して言う。

キッド「わかったよ、またどこかで会えるといいな、名探偵……」

そうしてキッドは衣装をすばやく脱ぎ捨て、普通の高校生の姿に戻って窓から出て行った。

（やっぱ何回やっても慣れねえな…それにしてもどうして…なんなんだ、この疲労感は……………）

灰原「副作用…」

いきなり声が聞こえてきて、オレはその方向を驚いて向いた。

そこには、解毒剤の開発者である小さい姉ちゃんとその保護者であり、正体を知っている数少ない人物の太った中年の頭がハゲたおじさんが立っていた。

灰原「副作用…きつと副作用ね。当然でしょ？今まで試作品で何度も何度も急に大きくなったり小さくなったりを繰り返してるんだから…。その疲れが溜まったのね、きつと…。」

そう言いながら、灰原はオレの脈拍や呼吸状態をチェックしていた。

新一「それで…オレは大丈夫なのか…？」

灰原「2、3日はおとなしく寝ていることね。体が急な成長で疲れているのよ。早く愛しの愛しの彼女に会いたければ、私の言うことを素直に聞くのね。わかった？」

新一「わあってるよ……………」

オレは灰原が差し出した疲労回復の薬とビタミン剤を飲み、灰原と博士の治療経過観察を受けながら自宅でおとなしくしていることにした。

第29話 副作用！？（後書き）

新一くんの体の不調の原因は、今まで試した薬の副作用でした。他にも似たような設定にしている人はいるかもしれませんが、私が充分考えた結果、こうさしてもらいました。

第30話 警部の悩み（前書き）

今回はキッドの正体である黒羽快斗（でしたっけ？）とそれを追う
警視庁中森警部の会話です。しかもセリフが長めです…

第30話 警部の悩み

そして、その頃工藤邸の近くでは…

？「探せ！！まだこの近くにいますはずだ！！やつを逃がすな！！」
？「あれ、中森警部じゃないですか。どうしたんですか？こんなところで…。」

中森「おお、快斗くんか。いやな、このあたりにあの怪盗キッドが逃げたハズなんだが…快斗くん、キッドを見かけなかったかね？」

快斗「いいえ、見ていませんが…。」

（まさかその探している怪盗キッドが今目の前にいるオレだなんて、到底言えねえよな…）

黒羽快斗は心の奥でそうつぶやきながら冷や汗をかいたが、それでもポーカーフェイスだけは忘れなかった。先代キッドだった父親の教えを守って…。

快斗「…警部、元気ないですね？何かあったんですか？いつもの警部らしくないですよ？」

中森「おお！！聞いてくれるかね、快斗君。…実はなかなかキッドのやつを捕まえられなくてな…あと1歩のところで追いつめておきながら、いつもまんまと逃げられてしまって…上は今度キッドを捕

まえられなかったら、私を専任捜査官から外す、とまで言っている。
快斗君…ワシはどうしたらいいんだろ…。」

（ラッキー！！しつこい警部から逃げられる！！…でも、ここで答えとかなないと疑われるよな…）

中森「快斗君…？」

快斗「…ああ、そういえばキッドもマジックを得意としているそうですが…マジックは種を明かせば簡単ですよ…ほら、こうして左手に人々を注目させておいて、実は右手で次の準備をしているんです。今までキッドを捕まえるのにいつも同じ手を使っていますでしたか？それじゃあキッドに逃げられてしまうのは当然ですよ。キッドをどうしても捕まえたいのなら、それと同じか超えるようなシルバーブレット（銀の弾丸）を味方につけることをおすすめします。…
…… それでは警部、私は用事がありますのでここで…。」

快斗はこれ以上しゃべってしまうと正体がバレてしまうと思ったのか、中森警部から離れようとする。

中森「ありがとう、快斗君…わしゃあ少し元気が出たよ。…ところでその荷物は？どこかに行く用事があるのかね？」

快斗（怪盗キッド）「いえ、最も出逢いたくない恋人に頼まれたもので…それでは失礼。」

中森「……………？」

快斗（怪盗キッド）は夕暮れも深まり、黒く染めはじめている空を見上げてつぶやいた。

（また逢えたらいいな…工藤新一…）

第30話 警部の悩み（後書き）

次回はついに復活成功（！？）した工藤新一が、さっそく事件に巻き込まれます。その舞台はなんとまたあの場所で…

なんです。みなさんはどこだと思いませんか？

第31話 再び…（前書き）

ところで、本作品とは関係ありませんが、アニメ名探偵コナンの声優、毛利小五郎役でいらっしゃいます方が降板されるみたいですが、みなさんはどう思いますか？

第31話 再び…

そして4日後……

阿笠

「よし、もう大丈夫じゃろうて、新一」

灰原

「思ったより回復までに長くかかったわね。やっぱり、相当あなたの体に負担がかかってたんでしょね」

新一

「そりゃあ急に体が小さくなったり大きくなったりを何度も繰り返してるからな…」

オレは今までのことを思い出し、笑った。

外交官殺人事件の時も、学園祭の事件の時も、殺人犯工藤新一の時も、よくもまあ今までなんとかごまかしてきたことが……

新一

「さて、今日から高校生探偵工藤新一は再始動だ。難事件でも起きてねえかなあ」

オレは鼻歌を歌いながら、4日間寝込んで目を通していなかった、
たまりにたまった新聞と郵便物に目を通していた。

すると、1つのチラシに目が止まった。それを取り上げて読む。

新一

「ん、なになに……帝丹高校新入生歓迎会！？　そこであの劇をやるんだって！？　しかも今日じゃん！！」

「あの劇」とは、オレ（江戸川コナン）が灰原に作ってもらった解毒剤の試作品を飲んで、帝丹高校の学園祭で起こった事件を解決した、というものだった。

そこで上演されていたあの劇を、今度は新入生歓迎会でやるというのだ。

灰原

「はあ……言っても無駄なようね……その顔はまた前みたいにするつもりね……でも、気をつけなさい。まだあなたの体調だって万全じゃあないんだし、それを組織の関係者が万が一観に来ていたら……」

灰原は身を縮めてかすかに震えていた。そんな灰原を見て、オレは安心させるように言う。

新一

「大丈夫だって。もしそうだったとしても、オレに何かあったとしても、それを乗り越えて守り、取り戻してみせるさ。大切な時間を……蘭もお前もな」

灰原（工藤君……）

博士

「さあ新一くん、そろそろ行かないと始まってしまうぞ。まあ、また隠れて行くんじゃないだろうが、一応変装くらいして行くんじゃないぞ！」

灰原

「私も吉田さんたちと博士とみんなで見に行くから。まああまり無理はしないことね」

新一

「わあってるよ……じゃあ、行ってくる」

オレは変装して帝丹高校に向かった。何か嫌な予感が、前と同じ感覚がするような、そんなことを感じながら……

空を見上げると、雲が立ちこめ、今にも雨が降りそうな天気だった。

第32話 カラスの羽（前書き）

今回は、少し蘭ちゃん目線の気持ちが入っています。そして、舞台がいろんなところに飛び飛びです……本当にすみません。しかもかなり今回は長いし……ゆっくりお付き合いしてくださいと嬉しいです。

第32話 カラスの羽

そして、その頃帝丹高校では……

蘭

「すっごおい、これ全部お客さん!？」

園子

「そりゃあもちろん、なんてったってあのロミジュリをしのぐ超ラブロマンス、って銘打っちゃったんだもの!! それに、これを帝丹高校の伝統にしたのは(……)っていうかうちらが勝手に伝統にしたんだけどね(……)工藤君がもしかしたらまた戻ってきてくれるかも、っていう……」

蘭

「うん……」

蘭の表情はなぜか曇っていた。

私はいつまで待ってればいいんだろう？

追いかけてもいつも振り切られて、振り返ってあたりを見渡したらいつも新一はいない。

闇に吸い込まれて、もう以前の新一は2度と戻ってこないような……

新一は、もう私のことなんか忘れてしまったのかな？

きっとあの新一の容姿と名声になら、どんな女の子でも近付いていくだろうし……

ううん、そんなことないよね！！　新一は絶対戻ってくる。どんなことがあっても、例え瀕死の怪我を負ったとしても……
そう言ってたもんね！！

もう少し、信じてみよう……きっと新一はまたどんな形になろうとも戻ってきてくれると……

今日も時間ができたら、事件が片付いたら観に来てくれる、って言うてたけど……どうなんだろう？

園子「蘭？　　らあん？　　ちよつと聞いてる？」

その園子の言葉に、蘭は現実に戻る。

蘭「ん？　　ごめん……」

園子「なんか最近蘭変だよ？」

蘭「ホントに何でもないってば！！」

園子「それならいいんだけど……あ！！　　それより早く衣装に着替えないと、時間だよ！！」

そう言い、園子は蘭を控え室に連れて行った。

舞台裏で慌ただしく生徒たちが劇の準備をしている一方、客席では……

客A「ごめえん、お待たせ!!」

客B「遅かったじゃないか」

客A「トイレが混んでてさあ。それに彼、なんか具合が悪いみたいで……」

客C

「大丈夫?」

客D

「ああ……」

ジリリリリリリ

客C

「あ、劇が始まるみたい。さあ2人とも、早く座って!!」

客AとDはそれぞれの席に座った。すると、会場が徐々に暗くなつていく。オレはその時を逃さないようにこっそりと舞台裏に入った。

そして劇が始まる。

「大変長らくお待たせいたしました。
これより、シャッフルロマンスを上演いたします。ごゆっくりと
観覧ください」

（舞台裏）

園子「さあ、先生そろそろ見せ場よ。早く着替えないと……？」

（舞台上）

衛兵A「おのれ何奴！？ これをブリッジ王国ハート姫と知って
の狼藉か！？」

敵国兵A「もとより承知の上よ」

敵国兵B「姫を亡き者にし、婚姻を壊せとの命令だ。我々王国にと
つちや今まで通りいがみ合ってた方が都合がいい、って訳よ」

敵国兵A「どけええええい！！」

衛兵A・B「うわあ！！」

ハート姫を守っていた衛兵A・Bは、敵国兵に切られて倒れた。

敵国兵 A「さあ、こいー!!」

ハート姫「きゃあ!!」

とその時、舞台にスポットライトが照らされた。そして、ひらひらと舞い落ちる何かが……

敵国兵 B「か、カラスの羽!? ま、まさか……」

敵国兵 A・B「うわああああ!!」

敵国兵が上を見上げるよりも早く、謎の騎士は舞台の真ん中に飛び降りた。そして、守るようにハート姫の前に立ちふさがった。

敵国兵 A「くそ、引け、ひけえええい!!」

ハート姫「1度ならず2度までも、わたくしをお助けになるあなたはいったい誰なのですか?」

（オレだっつうの……なんて言えるわけねえよな……でも、もう逃げ隠れしないって決めたしな。待たせたな、蘭……）

なんていうことを必死に仮面の下に隠しながら考えていた。

蘭は、まさか前と同じで黒衣の騎士がオレだなんて考えてもいないような顔をしながら続ける。

ハート姫「ああ、黒衣をまとった名も無き騎士殿? どうかわたくしの願いをお聞きいただけるのならその漆黒の仮面をお取りになつて? 素顔をわたくしに……」

黒衣の衣装と漆黒の仮面をまとったオレは、ゆっくりと体を蘭の方に向ける。

そして、仮面をゆっくりと脱ごうとした

その時!!

「きゃあああああ!!」

第32話 カラスの羽（後書き）

さて、次回はまたしても客席で事件発生です。明らかに、原作をヒントにしていますが、トリック他はいろいろな所ヒントをもらい混ぜ合わせた形にしようと思っています。

トリックその他描写等は相変わらず苦手ですが、これからも応援よろしくお願いいたします。

追伸

関係ありませんが、私は個人的にリアルラブロマンスをしちゃっています。本当に関係ないしどうでもよく聞こえますが……

第33話 呪われてる？（前書き）

お久しぶりです。

みなさんは、黒衣の騎士が誰なのか、もうおわかりですよ？原作の劇を知っているのならすぐに理解できるかと思いますが……

第33話 呪われてる？

「きゃああああー!!」

静寂な空気を切り裂くかのように、突如客席から聞こえた悲鳴は会場中に響き渡った。

「なんだ!? 一体なにがあつたんだ!?」

「人が倒れてる!! 誰か警察を呼んで!!」

……!?……

「どうして彼は動かないんだ？」

1人の観客が、体育館の床に倒れて動かないでいる男性に近寄り、首に手をかざした。

「……だめだな、もう死んでいる……」

「うそ……いや、いやああああ!! 住友くん!!」

園子「ちよつとちよつとお、また事件? 呪われてんのかしら、

この学校と劇は……」

園子は、舞台そでのカーテンの影から、不謹慎にも期待していた。

きつとまた彼が事件を解決してくれる、と……

そしてその園子の後ろで、現場に鋭い視線を向ける劇の衣装、黒衣の騎士のマントと仮面をまとった人が、人が死んだ現場に不運にもまたまた遭遇してしまつて震えている蘭を守っているように見えた。

蘭「先生、やっぱり事件なんですか……先生……？」

蘭は返事がない黒衣の騎士を不思議そうに見上げ、心のどこかでまた新一がどこからかひよつこりと現れて、その見事な推理で解決に導いてくれないか、つとそんな期待を寄せていた。

しかし、蘭がそう不安そうに騎士のマントにしがみついている間も、黒衣の騎士の衣装を着た人はただ黙って現場を見ているだけだった。

（自殺か……それとも殺人……？）

オレは事件と聞いて飛び出しそうになったが、みんなの混乱を招く恐れがあるため、ここはぐつと耐えて遠くから見つめ、観察していた。

それからしばらくして、遠くからパトカーと救急車のサイレンの音が聞こえ、帝丹高校の体育館の前にピタリと止まった。

高木「はあいみんな、さがってさがって……ってあれ？」

佐藤「客がたくさんいたにしては、現場がえらい保存されていますね……？」

目暮「いったい誰が……？」

第34話 またかよ!! (前書き)

平次と和葉の関西弁が変かもしれませんがご了承ください

第34話 またかよー！

？「その声は目暮警部やないか」

聞き覚えのある声とともに野次馬をかきわけて出てきたのは、なんと、っていうかまたもや服部平次だった。

目暮「おお服部君に和葉君じゃないか！！ どうして君はここに……？」

（そうそう、今オレも同じことを言いたかったんだよな。 どうしてこいつがまたここにいるんだ！？ って）

服部はまだオレのことには気づいていないようだ。

服部「いやな、アホな女のアホなお願いを聞いてしもつてな……」

和葉「アホアホ言っな、アホー！！」

そう言い争いをしているのは、オレ、工藤新一と同じ高校生探偵として関西のほうじゃちと名の知れた探偵、服部平次とその幼なじみの遠山和葉だった。

（またアイツ夫婦（！？）漫才してるよ……）

そんな警部と服部たちのやり取りを、オレは恐怖と不安に支配されて震えている蘭を黒衣の騎士の衣装の背中に守りながら、遠く舞台袖の陰で聞いていた。

目暮「ああオホン！！ それで服部君、いったい何があったのか教

えてくれるかね？」

そう目暮警部が言った瞬間、服部の目つきがガラリと変わった。どんな些細なことも見逃すまいとする探偵の目に……

服部「いやな、和葉のやつとたまたま劇を見に来てたんやけどな、その最中に観客の1人が苦しみだして倒れてしもったんや」

和葉「あたし突然のことだめっちゃ怖おうて……また事件が起こったんとちゃうかって……なあ警部はん、これ、やっぱり殺人事件なん？」

目暮「そのことはまだわからんが……ところでこの人たちは？」

第34話 またかよ!!（後書き）

新一くんが元に戻って最初の事件は帝丹高校新生歓迎会での事件
……無事解決できるでしょうか？

っていうか勝手に新生歓迎会作ってるし、あの劇を伝統にしている……

第35話 事情聴取（前書き）

久しぶりの投稿です。しかも会話が多めで……

第35話 事情聴取

遙「はい……私達は、右から青龍保奈美さん、私、里岡遙といいます。隣は清水平明くん、そして……彼が住吉史宏くんです。私達、みんなこの帝丹高校のOGで、同じ銀行に勤める職員なんです」

目暮「ほう、みなさん出身も職場も同じなんですか？ では、彼に恨みをもつ人間に何か心当たりは？」

保奈美「いいえ……」

平明「まあ、それを言うならこの私でしょうね」

目暮「……と言いますと？」

そう聞かれた男、清水平明は淡々と話し始めた。まるで、被害者、住吉史宏が死んでくれて当然……みたいな冷たい言い方で……

平明「先程彼女が説明しました通り、私は主に都心部で展開しています清水銀行の支店長をしています。そして彼女らは部下で、彼が私が銀行のお金を横領した、と疑っていたんです」

平明は、先程救急車で運ばれていった被害者、住吉史宏を指差しながら答えた。

その言動には恨みがこもっているようだった。

いや、彼だけじゃない。ここにいる関係者全員が彼に何らかの恨みや怒りなどの感情を向けているような……

彼らはそう言葉には出していないが、さすが目暮警部は警部だけのことはある。オレが感じたことと同じことを感じたようだった。

目暮「ほう、それで殺してしまおうと……？」

平明「それだけでオレを犯人にするのかよ！？ 冗談じゃねえぜ！
！ 遙だって彼を恨んでるって聞いたぜ」

高木「どういうことですか？」

遙は刑事に詰め寄られて大きく粹を吐き、観念するように応えた。

遙「ええ、私は彼の愛人だったのよ。でも、だからって犯人にされちゃたまらないわ！！」

佐藤「それは私達警察が調べることよ。さあ、3人ともこちらでもう少し詳しい話を聞かせてちょうだい」

高木刑事が佐藤刑事の指示で、関係者の3人を体育館の隅に連れて行った。

（舞台裏）

園子「あゝあ、また事件か……こういう時に彼がいてくれたらな……」

蘭「新一のこと？」

蘭は辺りを見回した。もしかしたら新一が戻ってきてくれていないか、と……

蘭「あれ？ 先生どこ言っただろ？」

園子「トイレでも言っただんじゃない？」

その頃、黒衣の衣装と仮面をつけたままのオレは、なるべく目立たないように何か変わったことがないか会場内を調べていた。

これは殺人なのか？
それとも自殺？

殺人だしたらどうやって？

凶器はどこに隠した？

動機は？

そもそも、あの人たちにあれ以外に共通することなんかあるのか？

オレは次の瞬間、阿笠博士に連絡していた。

新「あ、博士？ ちょっと調べてほしいことがあるんだけど…
」……

第35話 事情聴取（後書き）

次回または次次回から、新一くんファンの皆様お待たせいたしました！！の予定です

第36話 メリーホームズ（前編）

長いです……

第36話 マリーゴールド

佐藤「目暮警部、病院から連絡です」

目暮「なんと？」

佐藤「先程運ばれた男性、住吉史宏さんですが、先程死亡が確認されたそうです」

遥「そんな……」

保奈美「どうして住吉くんが……」

青龍保奈美、里岡遥、清水平明の3人はひどく動揺していた。

静かに涙を流す者

無言で下を向いて落ち込む者

そして……

（あれ？ 今、あの人…… どうして…… あれは何を意味しているんだろう……）

オレはそう考えながら、遠くからその様子を見つめていた。

……とその時！！

ブルルルルル……

（なんだ、博士からだ……なにに……なんだって！？ それであの人あんなことを……これで動機はわかったけどわかんねえ……凶器はなんなんだ！？　そしてどこに隠した！？　犯人が捨てそうなところはすべて調べたし、犯行の重要な証拠にもなりうる凶器を犯人がいつまでも持つておくはずはないけど……）

そう考えをめぐらせていると、なにやら騒がしい。どうやら目暮警部たちに、なにか動きがあったようだ。

高木「……はい……そうですか……」

目暮「どうかしたのかね、高木君？」

高木刑事は、振り返って警察手帳を見ながら言った。

高木「鑑識からの報告です。死因は遅効性の薬物が体内に入ったことによる窒息死。そしてこれと関係あるのかわかりませんが、死亡した住吉史宏さんの着ていたジャケットの内ポケットからマリーゴールドの花が見つかったそうです」

服部「なんでマリーゴールドが？　なんか意味があるんやろうか？」

和葉「絶望……」

服部「どうした、和葉？」

和葉「絶望……マリーゴールドの花言葉は、たしかそうやったと思う」

服部「絶望……か。彼はなにかに絶望しとって自殺た……か、もしくは犯人によるなんらかのメッセージか……」

遥「どうして住吉くんが自殺なんか……」

保奈美「そういえば住吉くん、車でござとそとなにかを探していたわね……」

佐藤「その車はどこにありますか？」

遥「駐車場に止めてありますけど……」

佐藤「案内してください」

佐藤刑事、高木刑事、千葉刑事の3人は雨の降る中駐車場に止めてある車に走って向かった。

オレは静かにさりげなく室内からその様子が見れる場所へと移動した。

そして別の部屋では……

園子「あああ雨……それに事件も起きてせっかくの歓迎会が台無しよ、ねえ先生？」

先生「しかたありませんよ、こう事件が起きてしまったんでは……」

園子「それにしてもこの学校は呪われてるのかねえ……」

そして駐車場では……

保奈美「あ、この車です、私達が乗ってきたのは……」

高木「それで彼がなにかをしていた、というのは？」

保奈美は助手席の上の棚に手を伸ばした。

！？

佐藤「どうかしましたか？」

保奈美はしばらく黙っていたが、ようやく口を開いた。

保奈美「いえ……そういえば住吉くん、最近なにか悩んでいたような……」

高木「それは……」

となにか高木刑事が言おうとした時、車の後部座席を調べていた千葉刑事が叫んだ。

千葉「佐藤刑事、高木刑事。車の後部座席の下からこんなものが……」

と言いながら、千葉刑事は1つの小さななにかの薬品が入ったビン
を差し出した。

高木「これは……」

佐藤「とにかく、いったん現場に戻りましょう」

佐藤刑事たちは、雨が激しく降る中を体が濡れないように腕で覆い
ながら走って体育館に向かった。

（……あの人、さっきは……でも、もしそうなら……そう
か……よし、こうなったらオレが……）

様々な立場、宿命を背負った多くの人間が1つの場所へと集まってい
いく。

千葉「目暮警部!!」

服部「おお千葉刑事。で、どうやった？」

千葉「予想どおり、車の後部座席の下からこの小ビンを見つけまし
た。おそらく中身は毒物かと……」

佐藤「目暮警部……」

目暮「うん、これより我々は本件を自殺と断定して……」

？「待ってください、目暮警部!!」

第36話 マリーゴールド（後書き）

みなさんもうお気づきですね？この事件は帝丹高校の学園祭のハート姫の劇の事件を参考にしています。そのため、各所で似た描写やセリフがあります。

そしてトリックに動機も、いくつかの事件を混じりあわせて考えています。みなさんはそれがなにかわかりますか？

そして、次回はついに……真打ち登場です！！

第37話 真打ち登場！！（前書き）

みなさまお待ちしました！！いよいよ真打ち登場です

第37話 真打ち登場!!

?「待ってください、目暮警部!!」

雨はますます激しくなり、大きな雷の光が青黒い人物の姿を照らす。

それはまさに、再び蘇った悪魔を歓迎し、喜ぶかのように……

?「これは自殺なんかじゃありません。巧妙かつ裏のある殺人です」

蘭「あ……」

その悪魔か善良な神かどちらなのかわからないが、その男はゆっくりと目暮警部らのもとに歩いてくる。

服部(……この声、この独特の口調……まさかこいつは……)

?「そう、彼は殺害されたんです。光に照らされた暗い観客席で。しかも、その証拠を犯人は今もなお所持しているはず。ボクの導き出したこの犯行が真実だとしたらね……」

その男は、不気味なのに自信たっぷりな不敵な笑みを浮かべた。

目暮「き……きみはいつたい……?」

（ついに再び戻ってきた……どんなに谷底に突き落とされようとも、切り立った崖に追い詰められようとも、そしてどれだけ危険でも、取り戻したい、守りたいものがあるから……）

あたりを見回し、ゆつくりと今まで隠していた仮面を脱ぐ。

？「お待たせしました、みなさん。工藤新一です」

みんな「えー！？」

オレが正体を現した瞬間、まわりがざわついてきた。

女子生徒「きゃー工藤先輩よ」

女子生徒「こっち向いて工藤君！！」

男子生徒「よっ！！ 待ってました名探偵！！」

生徒「工藤！！ 工藤！！ 工藤！！」

そしてどこからともなく湧き上がる工藤コール。

写メを撮る者、興奮のあまり気絶する者まで……

新一「しー静かに！！ この宴の続きは、この戦いが終わったあとで……」

服部「かーっっ相変わらず語るな、工藤？」

蘭「新一？ 本当に新一なの！？」

新一「バー口、寝ぼけた顔してんじゃねえよ」

第37話 真打ち登場！！（後書き）

新一「おい、作者。オレを悪魔なんてそれはないんじゃないかねえの？」

灰原「ペンネームにふさわしくはないわね」

作者「すみません？表現苦手なんです」

こんな作者ですが、みなさんこれからも応援よろしくお願いいたします！！

第38話 明かされた真相（前書き）

皆さんおひさしぶりです。投稿が遅れて大変申し訳ないです？

今回は長めですが、一気に事件解決へと進みます

第38話 明かされた真相

蘭「し……新一？ 本当に新一なの！？」

蘭は突然目の前に現れたオレを、今にも泣き出しそうな潤んだ瞳で見つめていた。

そりゃそうだ。なんてったってオレと今すぐ話したい時も話せず、今すぐ会いたい時も会えず、蘭が泣きたい時だって本当の姿でいてやれなくて寂しい想いをさせてたんだから……

でも、まさかその本人が、ついこないだまで毛利探偵事務所に居候していた江戸川コナンと同一人物だとはあとになって知ることかもしれないし、一生わからないままかもしれない……

まあその話は、オレが完全復活して試練を乗り越えてその時がくるまで話さないとして、今はそれよりもこの事件を解決する方が先だ。

オレは蘭にゆっくりと近づく。

新一「ああん？ 寝ぼけたこと言っただけじゃねえよ……」

蘭「どこに行ってたのよ……私……私……とっても心配してたんだから……」

蘭の澄んでまっすぐ対象に向けられた瞳からは大粒の銀色の涙が静かに、ゆっくりと頬を伝ってこぼれ落ちる。

目暮「それに帰ってきてそうそう悪いんだが、これは彼が自殺したんじゃないのかね？」

目暮警部がそう問いかける中、服部がオレに歩み寄って小声で話す。

平次（なあ、お前ほんまに工藤か？ そっくりさんとかちゃうやろな？）

新一（あ？ まだ疑ってんのか？ なんならまだ彼女に話してない秘密を話してやるまんがな、服部兄ちゃん？）

平次は慌ててオレを会場の隅に連れて行く。

平次（いやいやそれだけは勘弁してくれ、頼みますわ工藤くん？ それよりも、今回は体はほんまに大丈夫なんやろな？）

ああたぶんな……
新一

その聞こえそうで聞こえないやり取りを遠くで不思議そうに見ていた目暮警部たちの元に、オレたちは戻った。

新一「だから彼、住吉史宏さんは自殺なんかじゃない、この中にいる犯人に殺された、と言っているんです」

目暮「この中に犯人がいるだって！？　しかしだね工藤君、彼は実際に何かに悩んでいたようだし、こうして使ったとみられる毒物も見つかっているんだよ？　その中のどこに彼が殺されたと証明する証拠があるのかな？」

オレは自分の推理を自信たっぷりに続ける。

新一「ええ、凶器はまだ犯人が持っているはずですよ」

高木「しかし工藤君、彼らの所持品をくまなく調べたけど何もそのようなものは出てこなかったんだよ？」

オレは不敵な笑みを浮かべる。

新一「そりゃあ出てきませんよ。なんてったってまだ犯人は凶器を身につけているんですから……」

佐藤「身につけてるって……」

新一「それは金属で着けていても誰にも怪しまれない女性特有の代物……青龍保奈美さん、あなたが今着けている左胸の下着のワイヤーですよ」

全員「ええええええ！？」

新一に名指しされた犯人、青龍保奈美のもとにみんなの視線が集ま

る。

保奈美は慌てて言い返す。

保奈美「なんで私が犯人にされなきゃいけないの？ 何の根拠も証拠も動機もないのに……」

新一「あなた、先程車に行った時、車のダッシュボードに手をのばしかけて止め、また違う手を動かそうとしましたよね？ それはどうしてですか？」

保奈美「そ……それは……」

保奈美は新一に詰め寄られて言葉に詰まる。

新一「まあ、凶器を処分しようにも片方だけないのは怪しまれますし、それに彼の首もとに小さな血痕もありましたしね。調べればすぐに判明すると思いますが……」

新一の鮮やかな推理に逃げらなないと観念したのか、保奈美はその場に崩れて吐き出すように話しはじめた。

保奈美「そう、私が彼を殺したんです！！ 数年前、豪華客船沈没事故で荒波の中救命ボートに必死につかまろうとした私の姉をね！！ それをあの男、姉を突き飛ばして殺したんです」

高木「それが本当だとしても、彼のその行為には緊急避難が適応され、罪にはならないはずですが……」

涙で言葉が詰まりながらも、静まり返った現場に非常の叫びが響きわたる。

保奈美「ええ、わかっていたわ……わかっていたけど許せなかったのよ！！ その姉には婚約者がいて、私もその彼が好きだった……彼が怒りで溢れそうな感じで話してくれたわ……姉が“S・H”というネームプレートを握って亡くなったこと……彼がその人、住吉史宏という人物であることを突き止めたこと……そして姉の婚約者は彼に殺されたわ……」

新一「半月ほど前にあったプログラマー殺人事件がお姉さんの婚約者、いやあなたと密かに付き合っていたんですね？」

保奈美は誰も知らないはずの事実を告げられて大変驚き、観念し諦めたようにオレを床に崩れて見上げた。

保奈美「……さすが噂の有名な高校生探偵、工藤新一ね……」

佐藤「さあ、後は警察署で聞きましょうか……」

佐藤刑事と高木刑事は、静かに犯人をパトカーへと連れて行く。

姿が見えなくなるまで目で追った後、目暮警部はオレの元にやってきた。

目暮「いやあさすが工藤君だよ。見事な電光石火な解決劇だったな。ところで、これから警視庁での事情聴取に立ち会わんかね？」

新一「……は……はい……」

蘭「新一？ どうしたの？ 汗びっしょりだよ？」

オレは蘭に『ここで待ってる』と言おうとした。

が……！！

バグ……！！！！

新一「あう……！！！」

オレはいきなりバグバグと激しく心臓が痛み、脂汗が体中から流れ出した。

ゆっくりと意識が遠のいていく。

新一「ら……蘭……オレは……またせ………」

蘭が隣で心配そうにオレを覗きこむ中、意識を失った。

.....

蘭「新一……？ どうしたの？ しっかりして新一 いいいいいいいい！！」

第38話 明かされた真相（後書き）

新一くん倒れちゃったよ？これからどうなるんでしょう？楽しみ？
楽しみ？

今回の事件は、過去にあったものを組み合わせで作ったものですが、皆さんはそれが何と何を使ったのかおわかりですか？ コナンのやつだけとは限りませんよ？

でもいくらその辺が苦手だからって、そうしたらオリジナリティにかけてしまいますけどね…… 本当にごめんなさい？

そしてこれからもゆっくりと末永く応援よろしくお願いします！！

第39話 突然の異変（前書き）

話を引き伸ばしてすみません……

第39話 突然の異変

新一「はあ……………はあ……………はあ……………」

それは突然だった。

激しい頭痛と共に、オレの心臓がバグバグと暴れ、体中の骨や筋肉などのあらゆる組織が溶けるような感覚に陥る。

（こ……………これは……………この感覚は……………うそだろ！？ オレは完全に元に戻ったんじゃないかねのか……………？ ……だ……………だめだ……………また……………またこんなところで戻るわけには……………）

隣では、蘭と目暮警部たちがオレの体調の急激な悪化に戸惑っていた。

目暮「工藤君、大丈夫かね？ だ、誰か救急車を！！」

蘭「新一……………ねえ、いったいどうしたの？ 大丈夫？ 苦しいの？」

新一「め……………目暮れ警部……………救急車は……………救急車はやめてください……………」

服部は前にもあった同じような事態を恐れながらも、工藤新一をこの大勢の人がいる目の前で江戸川コナンに幼児化させるわけにはいかない、と考え、苦しんでいるオレの肩を抱える。

平次「あかん！！ それはだめや！！ とりあえず他んここで工藤のやつを治療するために安静にできるところはないんか、ねえちゃん

！？」

服部は必死の形相で蘭に叫ぶ。

蘭「え！？……そ、それなら新一の家がいいんじゃないの？そこでもいいわよね、新一？」

新一「あ……ああ……」

そういうと、服部と蘭は心配そうに見送る人達の前から、ほとんど意識のないオレを背負って学校を後にした。

平次（工藤のやつ、今回は大丈夫や、って言うてたけど、ほんまに大丈夫なんやろうか……）

蘭「新一？大丈夫？もうすぐ新一の家に着くからしつかりして？」

先を走っていた蘭は、長く住人のいなかった（といってもついないだまでは沖矢昴さんっていう人が住んでいたのだが、先日新しい住まいが見つかったって言って出て行ったのだが……）家の玄関扉を勢いよく開ける。

蘭「新一の部屋は2階の左よ！！」

平次「なあねえちゃん、ねえちゃんはなんか頭冷やすものと薬をとってきてくれ」

蘭は服部にそう指示されて1階の奥の部屋に向かった。

平次「お、ここやな？ 工藤の部屋は……」

服部は、いまだに荒い息づかいで意識が朦朧としているオレをベッドに寝かせる。

そこで、ようやくオレは意識を取り戻した。

新一「服部……隣の家……阿笠博士の家に……アイツが……アイツがいるはずだから呼んできてくれ……」

平次「わかった。あのちっこいねえちゃんやな？」

第39話 突然の異変（後書き）

新一くん大丈夫？ やっぱ何度も急に大きくなったり小さくなったりを繰り返してるから、体に想像以上の負担がかかっているのかな？ 作者も心配です……あ、でもちゃんとそこは治るので心配なく

第40話　ブツブツと……

平次「わかった。あのねえちゃんやな？」

激しい痛みと高熱で意識が朦朧としながらも必死に頼むオレの願いを聞き、部屋をもろのすごい勢いで飛び出していった。

そしてその入れ代わりで、蘭が氷を入れた透明な袋と汗を拭くためのタオルを持って来た。

蘭「服部くん、どこに行くの？」

新一「蘭……か……」

蘭「新一！？　気付いたの？　よかったあ……突然苦しみ出して心配したんだよ？」

蘭は、オレのことを心から心配し、心から愛し、失いたくないと心から大切に想ってくれている。

いや、わかっていたはずだった。そんな蘭のことはわかっていたはずだった。

そうだと思ったかった。

蘭の気持ちはわかっていたはずだった。

だけど、蘭の時々遠くを見つめるような寂しそうな姿。

その原因は言わずともわかる。そう、オレのことだ。

オレがあの時組織の取引現場を目撃しなければ……興味本位でついていかなければ……蘭を置いていかなければ……

でもそうするしかなかった。

蘭を置いていき、姿を隠して江戸川コナンとして毛利探偵事務所に居候して元に戻るため組織の情報を集めるしかなかった。

そうしなければ、蘭をはじめとするオレの関係者が命の危険にさらされてしまうからだ。

蘭はつらかっただろう。そしてオレもつらかった。

いつそのこと、オレの大切な蘭のことを……それに関わるすべてのことを……オレが有名な高校生探偵だということもすべてリセットして忘れて普通のどこにでもいる高校生として暮らしたほうが楽だし、みんなを危険な目にあわせなかったかもしれない。

最近わかんないな……オレの気持ちは……蘭を守ると、死んでも帰ってくるって誓ったのに……

蘭「新一……？　どうしたの？　なんかブツブツ言ってる……聞こえないよ？」

そう、オレは待っててって言ったから……生きて帰らないといけな
いから……だめだよな……オレがこんなこと言ってちゃ……いくら

それがどんなに楽な方法だとしても……

？「新一くんが倒れたじゃって!？」

どこからか突然、そう聞こえたかと考えているうちに、阿笠博士を連れた服部が部屋に飛び込んできた。

新一「博士……なんで博士が……オレはアイツを呼ん……」

服部が慌ててオレの口をふさぎ、ヒソヒソと耳打ちをする。

服部（阿笠博士んちにあのちっこいねちゃん呼びにいったんやけどな、「今の私はまだ工藤君とはまったく関係のないただの小学生。そんな子が慌てて血相を変えて工藤君の家に飛んでいくわけにはいかないでしょ？今の私ではね……」だそうや。そんなわけでしょうないから博士を連れてきたってわけや）

新一（そ、そうか……う!!ゴホツゴホツ!!）

阿笠「新一くん、ほら無理に体をおこそうとするでない。今はじつとこの薬を飲んでおとなしくすることじゃ。そうすればじきによくなるわい」

博士はそう言って、おそらく服部から症状を聞いて、灰原から受け取ったであろう症状を抑える薬をコップ一杯の水とともに差し出した。

蘭「よかったあ。新一、これでもう大丈夫だって。これからはあんまり無理しちゃだめよ?」

薬を飲むと、そう聞こえるか聞こえないかのうちに、意識は遠のいていつの間にか眠ってしまった。

ホントに……ホントに……何もなければ………

第40話 ブツブツと……（後書き）

オレがあれだけ苦しんで寝てりや治るなんてことないだろ、博士？オレの体はどうなっちまうんだ？

次回からは、なんとか学校に復帰するまでに回復したオレがつかの間の幸せを見つけます。どうかお楽しみに！！

b y 工藤新一

第41話 ビミョー……？（前書き）

私は前の小五郎のおっちゃんの声のほうがおジサマ！！　って感じで好きだったなあ！皆さんはどう思いますか？

第41話 ビミョー……？

まわりの世界は漆黒の闇に染まっている。何もかもすべてを飲み込みそうなブラックホールのように、左も右も前も後ろも……

しかし、そんな闇に一筋の光が指す。

その光は、現れた当初から強い輝きを放ち、闇を清め、悪を正そうとしていた。

そう、あの時までは……

その光は時々弱りながらもなんとか持ちこたえ、いつしか“銀の弾丸”シルバーブレット”と呼ばれるようになった。

そう、弾丸は一発でも二発でも抜けない楔があればあるほどよかった。

その光のひとつが消えかけ失いかけても、いつかまた蘇り輝きを放つように……

蘭「ねえ新一、聞いてる？」

新一「ああん？ 何だよ、蘭？」

帝丹高校新入生歓迎会での事件を解決後、体の異変で倒れ休養してから3日がたった。

オレの体調は日常生活に不自由がないくらいに回復し、めでたく学校に復帰することになった。

そして服部はいつの間にか大阪に帰っていったようだった。

蘭「だから、新一、もう大丈夫なんですよ？ だったら学校復帰しないと。一年ほとんど休んでたんだから単位大変だよ？ 今から迎えに行くから待ってなさいよ!!」

蘭はそれだけ早口で言うと、電話を切ってしまった。

新一「おおい蘭……?」

むなしく電話に向かって叫ぶ。

その10分後、チャイムが鳴った。

ピンポン

ピンポン

ピンポン

新一「…… ったくうるせいなあ、蘭だろ？ 今行くからおとなしく待ってるー！」

一年ぶりに奥から引きずり出した制服と鞆を身に付け、ようやくオレは蘭の前に姿を現した。

蘭「もう遅いよ、新一！！ さ、遅刻しちゃうから早く学校行く？」

蘭はオレの腕を掴み、工藤邸から引つ張り出した。

新一「わあっだから」

そして学校までの道のりを2人は並んで歩き出す。

しかし2人はビミョーに離れていた。2人とも久しぶりにまともにこうして会っているというのに、何を話したらいいのかわからないのだ。

聞こえてくるのは電線に止まってさえずっている小鳥の声と、子供の声だけだ。

新一（…… 何を話そう…… あーわかんねえ！！ なんか気まずいな

……)

そう考えながら黙々と歩いていると、なにやら前が騒がしい。

蘭「学校の方からだね？ 何かあったのかな？」

第41話 ビミョー……？（後書き）

久しぶりに皆様にアンケート!!

Q 1

FBIの赤井さんは生きてると思いますか？

Q 2

組織の“あの方”とは誰だと思えますか？

Q 3

バーボン是谁？

3つもありますが、みなさんはどうお考えですか？

第42話 どこから……？（前書き）

次回の映画、非常に楽しみです

第42話 どこから……？

学校のまわりには人だかりができていた。

蘭「すつごおい人！！ 誰か有名人でも来るのかな？」

新一「……やばい……蘭、隠れてろ！！」

蘭「……？……」

見つからないように逃げようとした瞬間、その人だかりから悲鳴のようでもあり地響きのようでもある声があった。

女性記者「あつ！！ 今、高校生探偵、工藤新一君が現れました！！」

その一声を合図に、どこからか漏れたオレが復帰するという情報を掴んだ記者たちが凄い勢いでオレと蘭の元に向かって来た。

蘭はとっさに道の角っこに隠れた。

記者1「工藤君！！ 君が先日の帝丹高校での事件を解決したってのは本当かい？」

記者2「何か一声……」

記者3「どうしてこの1年間表舞台に出てこなかったんだい？」

次から次へと飛んでくる矢のように質問が飛び交う。

新一「相変わらず記者のみなさんは行動がお早いことで……それに、ボクを取材したいのであれば、ボクの父と母の許可をとれる勇気のある方、1社だけお受けいたします」

そう、あの有名で権力と影響力のある工藤家に向かっていけるのは、この中でわずか1人だけだろう。

新一「……さあ行くぞ、蘭」

オレは集まったギャラリイ達に一睨み鋭い視線を浴びせてから、3年B組の教室へと足早に去っていった。

第42話 どこから……？（後書き）

続けてアンケート……！っていうか、前にも同じような質問を皆様にお尋ねしたような……？

まあそれはほつといて。。

Q1

名探偵コナン登場人物の中で誰が好きですか？

Q2

今までの映画で1番好きなのは？

Q3

実写版第3弾はあってほしいですか？

毎回毎回少しずつしか話しは進みませんが、これからも応援よろしくお願いします！！

第43話 夫婦！？／／／（前書き）

今回は会話が多めです

第43話 夫婦！？／／／

記者たちはそれ以上何も言えず、蘭とオレが立ち去るのをただ遠くから見ているしかなかった。

蘭「ちよつと新一いい？」

蘭は、顔を赤くしながらついてくる。

(……もしもし……)

後ろでカメラのフラッシュが光った。いつものように下駄箱で上履きに履き替えようとしたが……

新一「あつ、あれ？ オレの靴箱、どこだっけ？」

蘭「新一、何してんの？ 新一の靴箱はこっちだよ？」

そうだった。

オレが1年江戸川コナンとして過ごしていたから、蘭たちは高校3年生に進級し、下駄箱も移動していたのだ。

っていうかオレは3年生に進級できるのか？ 1年間もまとも
高校に通ってなかったんだぞ！？

蘭「ああそうそう新一。新一がちゃんと卒業するには、単位をひ
つも落とさないことが条件だって」

蘭はさすがおっちゃんの娘だけのことはある。

いや、オレが今まで事件だなんだでいろいろつきあわせてたから
かな。

新一「それで、オレたちの教室はどこなんだ？」

蘭「3階の階段上がって右よ」

階段を一步一步上がる。いろんなところから視線を感じるのが気にな
るが……

教室のドアを開ける。

ガラッ

男子生徒「ヒューツッ！！ 復帰そうそう夫婦で登校かよ！！」

園子「あついねえ蘭？」

蘭「…… つつまだ夫婦じゃないってば／＼／」

園子「まだ？」

園子たちクラスメイトはニヤニヤしている。

新一（夫婦…… か／＼／）

担任「はいみんな、ホームルームを始めますよ？」

バカ騒ぎをしていたみんなは、先生の言う通りにそれぞれの席に座った。

そして数日後の放課後……

プルルルル

ブルルル

新一「おつと電話か……はい、工藤新一ですが……？」

「私、東都テレビの記者、高本敦美と申します。工藤君を取材したので、他社と協議した結果、我がテレビ局がすることになったんですが、ご予定はいかがでしょうか？」

新一「ああ、あの時のボクが言ったこと、聞き逃さなかったんですね……ええ、今度の日曜日の昼間ならかまいませんが？」

「受けてくれるんですね！？　ありがとうございます！！　それで場所と時間なのですが、今度の日曜日、14時に米花駅前の喫茶店でどうでしょう？」

新一「わかりました。では、その時に……」

蘭「こないだ新一が言ってた取材？」

新一「ああ……」

その時、なぜか嫌な予感がした。

もう2度と以前のようにバカ騒ぎしたり、事件を解決したりできないような……

いや、今はそんなこと考えるのはやめよう。

近いうちに組織との命をかけた戦いがある。それに備えて準備をするほうが先だ。

まだ、組織のこと、江戸川コナンという人物との関係を話すのは、すべて解決した後の話だしな。

しばらくは、この束の間の平穏な日々を楽しませてもらおう。

第43話 夫婦！？／／／（後書き）

今度4月のコナン最新作映画『天空の難破船』超楽しみ♪♪最新の情報だと、キッドが新一くんに変装して乗り込むらしいんだけど、蘭ちゃん、キッドにハート盗まれちゃうのかな？

いやあ〜！！ 私は断固新蘭派なんで……

第44話 運命から逃げるor逃げない!? (前書き)

今回は不吉な話かも…… 44 } 死死 } 新一くんたちの身になにもありませんように……!!

第44話 運命から逃げるor逃げない！？

テレビ局の取材日時が決まった次の日、オレはこの前と同じように蘭からの電話で起こされた。

その日は雲ひとつなく、電線に止まった小鳥が気持ちのよい歌声を聞かせてくれた。

いまだ組織のことなにもわかっていないし、これから命をかけて対決しないといけないというのに、オレはこの平穏な日々が逆に怖い。永遠に続けば楽かもしれない。

組織の追っ手から正体を隠して逃げ続けることにいつか疲れるかもしれない。

そう、灰原に何度かあったように……

でも、この平穏を守るため、蘭を守るため、オレの関係者を守るため、運命から逃げるわけにはいかない。

何度自らの命が危険にさらされようと、その戦いによってオレがオレでなくなつたとしても……

蘭「新一、聞いてる？」

新一「？　なんだよ、蘭？」

オレは蘭に引つ張り出されて学校への道程を並んで歩いていた。

（いつまでこうしてられるかな……）

とその時

ピリリリリリリ

ピリリリリリリ

つと、どこからか機械音が聞こえてきた。

新一「ん？　目暮警部からか……はい、工藤新一ですが……？」

目暮「おお工藤君、朝からすまんね。突然で悪いが、今からこっちに来れるかね？」

新一「事件ですか？　ええ、大丈夫ですが……どこへ行けばいいんですか？　……はい……はい、わかりました。今すぐそちらに向かいます」

オレは事件と聞いて不謹慎にも喜び、瞬く間に探偵の顔になった。

新一「わりい蘭！！　そういうわけだから、先生にはうまく言っていてくれ！！」

蘭「ちよつと新一いい？」

オレは蘭のそばから現場へ急いで走り去った。蘭のコタエ・シツモンも聞かないうちに遠くに……

（新一がまた遠くに行っちゃう……追いかけたいけど体が動かない……でも、新一は逃げないって言ってたから信じてあげる。それに、新一のあの不謹慎な探偵としての笑みと表情、私は大好きだよ……）

第44話 運命から逃げるor逃げない!? (後書き)

みなさんは、名探偵コナンの最終回、どのような展開を望みますか？

第45話 そうつわいで（前書き）

キッド（快斗）が新一くんにパシられます

第45話 そういうわけで

そついうわけで、蘭はオレと別れて、1人帝丹高校へと向かった。

その頃、帝丹高校近くのとある事件現場では……

新一「目暮警部!-!」

目暮「おお工藤君、待つとつたぞ!-!」

『あれが工藤新一……日本警察の救世主……』

『いよつ待つてました名探偵!-!』

そんな声が、ついさつき事件が起こって心配で不安そうに見ていた野次馬の中から聞こえた。

新一「それで、警部。殺人事件ですか?」

高木「ええっ!? まだ事件の詳細は教えていないのに、どうしてこれが殺人事件だとわかったんだい?」

オレは不敵な笑みを浮かべる。

そう、何もかも見透かしたような不敵でミステリアスなキザなあのこそ泥のように……

新一「なに、簡単なことですよ。ここへ来る直前に、2台の救急車とすれ違っただです。被害者は2人いますね？　しかも、その救急車はこの現場の方向からやって来た……そういうわけですよ」

佐藤「それはいいけど、工藤君、あなたは学校はいいの？」

新一「そうなんですよ、単位を落としたら卒業できなくなってしまうんでね。でも大丈夫、すぐに解決できますよ。応援を呼びましたしね……」

目暮・佐藤・高木「……？」

（その頃、とある高校の教室では……）

快斗「ああ授業なんかかったるいなあ……」

青子「なに言ってるのよ、バ快斗。もうすぐ快斗の好きな数学でし

よ？」

そう、ここは怪盗キッドの正体、黒羽快斗と幼なじみでクラスメイトの中森青子を通う高校。蘭やオレたちが通う帝丹高校からそう遠くない、同じ地球の空の下にある。

そしてオレと蘭と同じように、お互い正体を隠し、こういうことには奥手で素直になれないでいる。

しかも、顔や背格好に声までよく似ていとなると、もう生き別れた双子にしか見えない。

つということは、いつか会った、ヴェスパニアのミラ王女と蘭と青子が同じ場所に集まったら……うん、似ているを通り越して少し恐怖さえ覚えるかもしれない。

まあ、自分とよく似た容姿をした人間が世界には3人はいるとよくいうんだけどな……

まあそれはいいとして、そろそろ本線に戻ろう。

快斗「だあゝかゝらあ、バ快斗は止めろっ……………」

青子「どうしたの、快斗？」

快斗「わりい、電話だ。すぐ戻るから!!」

青子「ちよつとお……」

快斗はすぐに教室を飛び出し、授業前で人気のない屋上へと急いで駆け上がった。

そして屋上に誰もいないことを確認し、今から話す内容とその相手を聞かれないように、ドアのカギを閉めた。

快斗「はい、黒羽快斗ですが、どちらですか？」

新一「よう久しぶりだな、怪盗キッド」

快斗「……！？ 何の用ですか、探偵君？」

快斗は、自分の正体を名指しして突然かかってきた電話の主、工藤新一の声を聞いて、声に出さなかったが、少し動揺していた。

しかし、ポーカーフフェイスだけは忘れなかった。

新一「今、帝丹高校近くの事件現場にいるんだけど、すぐこっちに来れる？ ってか来るよな？ 事件の情報を集めてオレの助手をしてほしいんだ。断ることはできないはずだが、怪盗キッドさん？」

数秒の沈黙が流れる。その場で聞こえる鳥のさえずりや、人の話し声……それらが心臓の鼓動と共鳴する。

快斗「わあかったよ、オレの負けだよ。で？ 何の情報を集めればいいんだ？」

新一「……………というわけだから、頼むぞ。誰に変装するから、お前に任せるから。それじゃあ」

(……………まさかこの怪盗キッド様が高校生探偵工藤新一にパシられるとはな……………)

そう感慨にふけっている快斗を、あの声が現実の世界へと引き戻す。

青子「バ快斗どこ？ もうすぐ授業始まるよ！！」

快斗「わりい、青子に先生！！ 黒羽快斗は所用の事情により早退させていただきます」

快斗は、そう数学の授業の先生の前に跪き、紳士的に彼女の手を取ってキスをした。

そして次の瞬間には、いつものように煙に紛れて姿を消すのだった。

第45話 そういうわけで（後書き）

キッドは誰に変装して新一くんところに行くんでしょう？

みなさんは誰だと思いますか？

第46話 助手（前書き）

ちよつと無理な設定かもしれませんが……

第46話 助手

目暮「で、工藤君。もうすぐ来る君の助手というのは?」

新一「すぐにわかりますよ……あ、来ました来ました」

目暮・佐藤・高木「……………」

現場近くの緩やかな坂道からゆっくりと、かつ颯爽と現れたのは、オレによく似た同じ年頃の少年だった。

その少年の後ろから、柔らかくもあり鋭くもある風が背中を押す。

高木「……工藤君が2人!」

今ここに、姿形、それに声まで驚くほど似た同じ年頃の少年が2人揃い、目暮警部たちを得意げな目つきで見つめた。

高木刑事たちは目の前で起こったことに非常に驚き、オレに向かって震える指をさした。

目暮「いったいどういふ……!」

佐藤「よく似ている……いや、似すぎている……」

快斗「いや、オレは……」

キッド（快斗）が説明しようとする前に、オレは左腕をやつの前に
翳し、静かに小声で制止した。

新一（ここはオレに黙って任せろ……正体をバラされたくなければ
な……）

快斗（あゝはいはい……）

軽く咳をし、目暮警部たちをゆっくりと見渡した。

新一「実は、彼はオレとはなんの関係もない、ただ姿形がよく似た
少年に過ぎないんですよ」

高木「いや、それにしても……」

新一「ほら、よく言うでしょ？ 自分とよく似た人間が世界に3人
はいる、って」

佐藤「しかし……」

隣で静かに心の底で笑っていたキッド（快斗）は、静かに口を開い
た。

快斗「はじめまして、目暮警部。警部たちのことは、この新一君か

らよく聞かされていました。実は、オレは新一君の親戚で、頼れる助手でもあるんです」

高木「そうなんですか……」

目暮警部たちは、オレと快斗をじろじろと見比べた。

いくら世界に3人いるっていても、あまりにも似すぎている……これほど完璧なまでにコピーされたような人間が2人も並ぶだろうか？

オレは、この気まずい状況を打開しようと、再び咳をした。

新一「で、オレの助手君？　言われた情報は得られたのかな？」

オレは、先程のお返しに、と、嫌みと皮肉たっぷりの笑顔を向けた。

快斗「つつ！？　ああ、そのことだったら……」

快斗は、他の人には聞こえないように、オレが密に頼んだ情報をボソボソと耳打ちした。

新一「……！？　そうか！？　そうだったのか！？」

高木「どうしたんだい、工藤君？」

目暮「まさか、犯人がわかったのかね!？」

ちようどオレの背中から、黄金色に輝いた美しく優美な光がさし、
優しくオレを包み込んだ。

そして、その光をバックに、オレは……

新一「さあ、この事件の関係者を全員、ここに呼び出してください。
そして、明らかにしようじゃないですか……この、暁色の空の下で
……」

第46話 助手（後書き）

キッドは、あえて見破られる恐れのある変装などせずに、髪型さえも変えずに素のままでもいいける新一君によく似た人物に変装したのでした……

あ、てか変装じゃないか……

第47話 シミ(前書き)

遅くなってごめんなさい!! 警察官採用試験の勉強で忙しくてなかなか投稿できませんでした……感想、ご意見お待ちしております!!

第47話 シミ

目暮警部に言われてやって来た、この事件の関係者たちは意外と早く来た。というか、ほんの数メートル先に止められたパトカーの中で待機させられていただけなのだが……

その彼らが不満そうに言う。

美零「いつたいなんなの!？」

莊司「早くボクたちを解放してほしいですね」

植次「そうそう、まだ仕事が残ってるんだぜ？」

新一「まあまあ皆さんお静かに。すぐ終わりますから……」

この事件の関係者、いや、容疑者を落ち着かせなだめるように優しく言葉を発する。

容疑者、犯人は自分の犯行を知られ、真実を明らかにされた時、追い詰められて、時として思いもよらない行動を突然起こすことがある。

それで大怪我をしたり、最悪命を落とした人を何人も見てきた。

オレが探偵としてこれから先真実を明らかにし続ける限り、いつか

自分が大怪我したり最悪命を落とすことだってあるかもしれない。

いつも気を張り詰めて油断できない。

不安を外に出さない。

そう精神的にも肉体的にも疲れてきた時、オレはどうなるのか……？

それでも続けるのか……？

それとも、1番なっではいけないとわかっているけど1番楽な方へ
いってしまうのか………？

目暮「……おーい工藤君？」

その思考の外から、聞き慣れた声が聞こえる。

高木「そのお、話って……？」

いつの間にか、オレは別世界に行ってたようだ。

目暮警部たちの声でようやく現実世界に戻る。

新一「これで容疑者が顔を揃えたというわけですね」

美零「ちよつと！！ 私たちを容疑者扱いだなんて」

植次「それにガキが偉そうに！！ お前は誰なんだ！？」

新一「ああ自己紹介がまだでしたね。ボクは工藤新一、探偵です」

莊次「工藤新一って…あの高校生探偵として有名な！？」

美零「それで？ その探偵さんとそちらの双子君は私たちを集めて何をしようとしているのかしら？」

快斗「だあかああ、オレは双子なんかじゃ……………」

快斗は鋭く刺すような無言の視線を感じた。

その発信源は、もちろん隣に立って快斗の背中をつねっている工藤新一である。

快斗「つつ！？ あ…………いえ…………ボクは工藤君の助手の快斗です」

痛つてえなこのやろ…………と顔に書いてある。

新一「被害者を殺した犯人がこの中にいるっていう話ですよ」

美零「あら、じゃあその犯人はもうわかっていらっしやるのかしら？」

新一「ええ……犯人はあなたですね？　直木植次さん？」

その場にいる人の視線がすべて1人の男に集まる。

莊次「お前が犯人……？」

オレが犯人と名指しした男、直木植次は明らかに動揺している。

体は震え、脂汗をかき、心臓が疾走する馬のように激しく鼓動する。

植次「な……何を言っ……ってかなんでオレの名前を知ってるんだ！？」

快斗「それはボクが工藤君に言われて入念に調べあげましたからねえ……もちろん、あなた方3人と被害者がどういう関係でどういったことでトラブルになっていたのかもばっちりね……」

植次「そこまで言うのなら、証拠はあるのかよ！？」

新一「そのズボンのシミはどうしました？」

植次「こ……これは……自転車をこいでて水たまりの水がついたんだよ……」

明らかに動揺している。視点が定まらず、空中を泳ぐ。

そんな容疑者にとどめを刺す。

新一「うまく拭き取ったようですが、知ってますか？ 血つていうのはいくらうまく拭き取っても必ずルミノール反応が出るんですよ？ その血を調べればそれが誰の血かすぐにわかりますし、それがついている人物を犯人じゃないと説明するほうが難しいと思います
が……？」

植次の顔から血の気が引き、青白くなっていく。

体に力が入らなくなり、膝を折るように地面に倒れ込む。

植次「あいつが……あいつが悪いんだ！！ オレの裏口入学をバラされたくなければ金を用意しろ、なんて言うから！！」

快斗「犯罪を別の大きな犯罪で隠そうとする典型的な犯行ですね…

…」

犯人の直木植次は高木刑事と佐藤刑事に連れられ、聞こえなくなるまで『あいつが悪いんだ！！』とわめきちらしながらパトカーで警察署へと連行されていった。

目暮「さすが工藤君！！ 見事な解決だったな！！ それに助手君もご苦労だったな。じゃあ、むしろは事情聴取があるからこれで…
…また事件のあった時はよろしくな！！」

そう言い残し、割腹のいい目暮警部たちは警視庁へと帰っていった。

快斗「じゃあ、ボクはこれで……」

新一「ああ、ま・た・な？」

快斗
……

快斗は背を向けて去りながら、その心の中で毒つくのだった。

第48話 どうしてだ！？（前書き）

いよいよ今週土曜日に映画公開ですね！！私はもちろん観に行きませんが、みんなはどうですか？楽しみにしていますか？蘭ちゃんの唇とハートはキッド様に盗まれちゃうんでしょうか！？

第48話 どうしてだ!?

そしてその週の日曜日。。。朝目覚めると冷たくて重い雨が降っていた。

北極に吹くブリザードのように、冷たく刃となって人々に襲い掛かる。

傷だらけになる者、命を落とす者、中にはそれに立ち向かおうとする者まで・・・

オレはその黒くて重く鋭い雨に立ち向かえるのだろうか・・・?

立ち向かって戦ったその結果、なにか大切なものや誰かを失うことになっても、オレは笑って生きていられるだろうか・・・?

それとも大切ななにかを失ったそのショックから立ち直れず、自ら自分を傷つけ、殻に閉じこもるのか・・・?

どういう結果になろうとも、どういうことが起ころうとも、

それを克服し、大切な・・・蘭を仲間を、

楽しかった江戸川コナンとして生きていた時の大切な仲間を守らなければいけない。

いつからオレは時々こうして記憶が飛ぶようになったのだろうか？

またもや、人間が人為的に作った機械音に現実世界に戻された。

新一「はい、こちら工藤新一ですが・・・？」

蘭「やっと出たあ新一。あのね、今日何の日か分かってる？」

新一「やっぱり蘭か・・・ああ、もちろん分かってるぜ。インタビューの日だろ？」

蘭「さっすが新一！！　それでね、相談なんだけど、私も一緒に行ってもいいかな？」

新一「まったくしょうがねえなあ・・・あんましゃべんなよ？」

蘭「ありがとう、新一！！　じゃあ、正午に米花駅の改札前で待ち合わせね？」

新一「ああ、わあったよ・・・じゃあな」

はあ・・・なんで蘭のやつ今回に限ってついてくるんだよ？

今まで何度も取材とかあったのについてこなかったくせに・・・どうしてだ？

これじゃあ下手な事話せねえじゃねえか！！

・
・
・
・
・
・
・
・

ああ頭が痛い・・・

（新一君の悩み疑問の種がまたひとつ増えたのであった・・・by 作者）

第48話 どうしてだ！？（後書き）

推理力と記憶力はよくても、音楽とこつこつことにはまったくって
いていいほどだめなんだよなあ、新一君って……。まあ、そん
なところがいんだけど。。。

第49話 インタビュー（前書き）

新しい小説『難破船はどこへいく』を始めました！！まだ全然短くて映画をまだ見ていない人もいるかと思いますが、どうか応援よろしくお願いします！！さて、この物語は新一君のインタビューに入ります！！

第49話 インタビュー

日曜日の昼下がり、オレは米花駅前の喫茶店の前にいた。

もちろん、隣には蘭となぜか園子がいる。

新一「まったく蘭はいいって言ったけどよ、なんで鈴木財閥のお嬢様までついてくんだよ？」

園子「べつにいいじゃない？　だって、新一くんがインタビュー受けるってこと」

パパが出資してるんだもの」

蘭「はいはい、お嬢様の気まぐれ特権ってやつね・・・」

園子「それに、蘭と新一くんのラブラブっぷりも見たいしね」

蘭・新一「ラブラブって・・・そんなんじゃないってば／＼／」

（ねえってば）

今更だが、園子は時々おじさんっぽいこと言うよな・・・

こんな海や行楽地へ行けば、

「男ゲットー！」

「愛しの愛しのキッド様・・・」

なんて言ってるこんな女子高生のどこに京極マコトは惚れてラブ
ブになったんだか・・・

帝丹高校の新七不思議にでも加えておきたい・・・

新一「まあここまで来ちゃったんだからしかたねえけど、

お前らあんまりしゃべるんじゃないぞ。

特に園子！！ お前はな！！

そしてもうひとつ。

オレたちの近くに座るのは許すけど、話に絶対首と突っ込む
んじゃないぞ！！」

園子「あーはいはい、わかったわよ・・・」

喫茶店の前でそう話しこんでいると、もういつのまにか昼の2時5
分前になっていた。

新一「あ、やつば！！ 早く行かねえと・・・ほら、行くぞ」

3人、いや、2人と1人は少し離れて別々の客を装い、

日差しが強く照りつけて窓ガラスにまぶしく反射した喫茶店のドア
を開けた。

店員「いらっしやいませ。お客様、2名でいらっしやいますね?」

蘭「あ、いいえ私たちは・・・」

蘭がそう対応に困っていると、1人の男性が近づいて話しかける。

カメラマン「工藤新一さまですね? お待ちしておりました。さあ、こちらへどうぞ」

と、オレと蘭を店の一番奥の席に案内する。

そのテーブルには、もうすでに1人の女性が座っていた。

こちらに気づき、立ち上がって手を差し出して握手をし、挨拶をする。

記者「はじめまして、工藤新一君。私が君に取材の申し込みをした者です。」

そしてこちらはカメラマンの林田です。

さっそくインタビューを始めたいと思いますので、まずはこちらにお座りください」

と言って、自分が座っているソファアの反対側を勧める。

そこに座るとほかの客席に背を向けるようになるので、視線などを

気にしなくてすむ。

蘭が奥、窓側で、オレがその隣に座る。

記者「ではさつそく・・・君のお父さんは世界的に有名な推理小説家、工藤優作で

母親はあの伝説的女優、藤峰有紀子さんでしたよね？

どうして親のように俳優になったり小説家にならずに探偵を目指したんですか？」

ゆっくり息を吐き、自分を落ち着かせようと努力する。

なにぶんこうした正式なインタビューを受けるのは初めてだから

性格に似合わず、かなり緊張しているのだ。

誰もが、高校生探偵、工藤新一の最初の一声を耳を澄まして待っている。

新一「いい質問ですね。

僕は世界最高の名探偵、シャーロック・ホームズを心から尊敬しています。

彼に一步でも近づけるよう、日々努力した結果、

探偵という職業が僕の運命の職業だと思ったのです。

この才能と環境を与えてくれた両親、

支えてくれた周りのみんなに感謝しています」

カメラマンは無言で、画面をズームしてインタビューの様子を撮り続ける。

記者「それでは、次の質問。

隣に座っている女の子との関係は？」

蘭「え………//」

蘭の真っ赤になった顔からかすかに壊れそうな声がもれる。

一方、オレは必死に表情にでないようにポーカーフェイス（冷静さ）を保っている。

新一「あ、いえ……ただの幼馴染ですよ」

蘭（……はい？ 今新一なんて言った？

た・だ・の・幼馴染ですって！？

ふふふ……覚えときなさいよ新一……）

蘭は右手に思いつきり力をこめる。

オレの左手の甲がつねられて背中に寒気が走ったのは気のせいだろうか……？

記者「……？　じゃあ次。

君は前はよく新聞やメディアなどに顔を出していたようだけど、

どうしてこの１年間表にまったく出てこなかったんですか？

やっかいな事件に巻き込まれていた、とか？」

マイクを顔に突き出して問い詰める。

といっても、誰もが思う普通の疑問をぶつけたただけなのだが……
オレにとっては、今はまだそこは触れてほしくない、立ち入ってはいけないレッドゾーンなのだ。

30秒程の静かな時間だけが過ぎていく。

ほかの客の話し声と時計の針が進む音しか聞こえない。

新「NEED NOT TO KNOW

君たちは知る必要のないことですよ。

こう言えば、もうお分かりでしょう？

さあ、帰るぞ、蘭。

残念ですが、僕は時間がありませんので、これにて失礼します」

丁寧にお辞儀して足早にその場を振り返らずに後にするうしろから、蘭が一生懸命ついてくる。

記者「……警察の隠語……どこかで聞いたような……ジーノ、万が一のためにあの方に連絡よ」

カメラマン「……了解。アップル……」

第49話 インタビュー（後書き）

ジーノにアップル・・・何者なんでしょう？

第50話 雨（前書き）

今回は、場面の入れ替わりが頻繁です

第50話 雨

雨の中をオレは傘もささずに無心で走る。

外はもうすでに暗く、漆黒の闇に染まった冷たい雨がオレの体から熱を奪う。

ただでさえ、どうして自分がクドウシンイチで、

どうして自分の命を犯罪者に狙われるのか、

どうしてキミはボクの命を、命をかけて助けて守ってくれるのかわからないというのに……

キミは誰？

クドウシンイチって誰？

どうしてキミはボクの命を、キミの命をかけて守ってくれるの？

住んでいたのか？

あの立派な家の庭一面に花が咲き誇って風に揺れて、

そのむこうには洋館があってキミが傍らにいてくれて、キミはいつも微笑んでいた。

その洋館の書斎には大量の本がつまった本棚があつて、

そこでオレは一日中何かの本を読み漁っていた、とキミから聞いた。
うらやましいな……

キミがそこまで自分のことのように嬉しそうに話す、そのクドウシンイチっていう人のことが……

ボクは誰なの？

ボクがクドウシンイチっていう人なの？

ついこないだまで小学生生活を送っていたと思っていたのに、

どうして今ボクは高校生の体なの？

ねえ、どうして？

何か思い出せそうな気がするのに、思い出そうとすると頭の奥が激しく痛む。

記憶の扉が思い出を思い出そうとするのを邪魔をする。

それはそんなにいけないこと、してはいけないことなのか……？

キミ……どうしてそんな顔をするの……？

待って!!

どうして……！！

この奥にキミはいる。

ボクがボクであるために、悪者に連れ去られてこの廃倉庫に監禁されている。

待っている……

必ず助けてあげるから……

新一「らあああん！！」

オレは飛び起きる。

ふと時計を見ると、針は朝の7時をさしていた。

体にはあたたかい血が流れ、それをかみしめるように頭を掴む。

新一「夢、か……それにしてもリアルな夢だったな……」

でも、それを夢と感ずることができないのはなぜだろう？

オレは、オレでなくなってしまうのか……？

新一「そんなこと言ってる場合なんかじゃねえ！！ 今日蘭と映画を見に行く日だったじゃねえか！！」

早く支度をしないと、蘭に必殺回し蹴りをくらうと寒気がしたのはオレだけだろうか？

蘭のアレだけは避けたい。

そんなことを想像しながら支度を済ませ、待ち合わせ場所の米花映画館へと向かう。

（米花映画館前）

新一「わりいわりい。待ったか、蘭？」

蘭「べつつにいい？ 推理オタクを待つことにはとづくに慣れましてから」

蘭の精一杯のささやかな嫌み。

新一「あ、そう……それよりも早く行こうぜ。映画が始まってしまっうー！」

どこから見ても美男美女のカップルが痴話喧嘩しながら建物の中へと消えていく。

その美男（？）の男がクドウシンイチだということ以外は、とうの本人も蘭も気づいていないだろう。

（2時間後、映画館ロビー）

蘭「ああドキドキした！！ 私てつきりあの息子が犯人だと思ってただけだな……」

新一「だから最初の方で言っただろ？ 被害者の奥さんが怪しいって」

蘭「もう、新一と映画見に行くといつもこれなんだから……」

そんなたわいもない話をしながら外へ出ようと扉を開けると……

蘭「なによ、雨が降ってるじゃない！！　朝はあんなに晴れてたのに……」

新一「ほらよ、そう思ってちゃんと準備しといたぜ」

蘭にひとつの折りたたみ傘を差し出す。

その傘がどれだけ暖かったことだろう……

まるで、体中を流れる血液のように……

蘭「あ、ありがとう……」

2人傘さして並んで交差点で信号を待っている。

激しく雨が降る中車は走り回り、人々は傘をさして目的地へと足早に急いでいる。

そういえば、今日見た夢でも雨が降っていたな……

キミって誰のことだろう？

蘭「新一？　早く！！　信号赤になっちゃうよ……」

新一「お、おう悪い悪い！！　今、行く……………」？」

蘭の背後から、雨の音に紛れてトラックが突っ込んでくる。

新一「蘭、後ろ！！　危ない！！」

蘭「え……………」

そうする間にも、トラックは蘭めがけて突っ込んでくる。

ブレーキをかけていないのは、居眠り運転をしているからか……………？

蘭は驚いて体が動かない。

雨でタイヤがスリップする音がけたたましく交差点に響き渡り、逃げ惑う人々。

そんな状況なのに、オレは蘭めがけて突っ込んでくるトラックの前に飛び出した。

新一「らああああん！！」

蘭「きゃああああ！！」

ドン！！

第50話 雨（後書き）

私も、思わず映画2回見にいったいました！！

キッド最高です（o^ ^o）勇気ある泥棒もいいですねえ。

っていうか、勇気ないと泥棒なんかできないか……

第51話 ごめんな、蘭・・・（前書き）

新一くんが大怪我しちゃいます！！

その結果・・・？

もう新一は戻ってこないのかな？

表現が残酷かもしれませんが・・・

第51話 ごめんな、蘭・・・

キキーーーーー！！

車のタイヤがスリップする音。

その異常な音に怯え、逃げ惑う人々の悲鳴。

そんな音しか聞こえないような世界で、

オレはトラックの目の前、動けないでいる蘭の前に飛び出し、

かばうように抱え込みながら突き飛ばす。

すべてがスローモーションに見える。

わかっているのに逃げられない。

どこかで思っていたのかもしれない。

「蘭のことを忘れたほうが幸せだ」

「このままでは蘭はオレのせいで危険な目にあってしまう」

「それならいつそのこと・・・」

と・・・。

蘭の悲鳴が聞こえる。

新一「ごめんな、蘭」

蘭「しんいち・・・？　だめっ！！　危ない！！」

だけど、蘭は間に合わなかった。

次の瞬間、オレは雨でスリップしたトラックにはねられ、数メートル空を舞う。

オレが死ぬことで蘭は安全だから・・・。

キミだけは幸せに生きていてほしいから・・・。

オレがその犠牲・楔になる。

地面に強く頭と全身をたたきつけられ、

体中のあらゆるところから雨で冷たくなった血がドクドクと流れ出し、

交差点を血の海に染める。

その体には血の気がうせ、どんどん死人のように青白くなる。

痛みと精神的ストレスで体が動かない。

意識がどんどん遠のいていく。

そんなオレの死にかけた体を目の前にして、蘭は必死に叫ぶ。

蘭「誰か！！ 救急車を呼んで！！ 新一・・・死んじやいやあああ！！！」

体中に流れるすべての血が出てしまったかのように青く意識のない体。

その横たわっている1人の人間に、1人の女性がもたれかかって泣き崩れる。

蘭「救急車はまだなの・・・早くしないと、新一が・・・新一が死んじやう！！！」

そんな蘭を少しだけ正気に戻してくれたのは、遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音だった。

事故を目撃した誰かが通報してくれたようだ。

オレはその救急車に意識のないまま乗せられ、蘭も同乗して米花病院へと搬送されていった。

救急隊員「こちら119。患者は高校生と思われる男子。」

症状は主に頭からの激しい出血と全身麻痺。

いまだに意識が戻りません。どうぞ

医師「こちら米花病院。了解。急いでこちらに搬送されたし」

蘭「もうすぐだからね・・・がんばって、新一・・・」

まもなく、米花病院へと到着した。

すぐさま、待ち構えていた医師や看護師などに、救急隊員から引き渡される。

看護師「頭部からの出血が止まりません!!」

医師「すぐに止血と手術の準備を!!」

オレは蘭の止める呼びかける暇もなく、手術室へと運ばれていった。

蘭「新一……助かるよね……ごめんなさい……私を助けるために……」

涙が頬を伝い、静かに、いや激しく嗚咽とともに零れ落ちる。

廊下に何人もの人の靴音が響き渡る。

毛利「蘭!! 無事か!？」

蘭「お父さん……目暮警部に佐藤刑事……私は大丈夫……」

でも……でも新一が私をかばって!!」

そう言つて、真っ赤に光っているランプを指差す。

「手術中」

そう静かにただ光り続けるだけ。

もうあれから6時間がたって、あたりはすっかり真っ暗になっていた。

蘭「どうして……どうして新一がこんな目にあわなきゃいけないの!?!」

蘭はただ泣き叫ぶばかりで、まわりの大人はなににも言うことができない。

高木「・・・！？・・・」

ちょうどその時手術室のランプが消え、中から執刀医が出てきた。

蘭「新一は・・・新一は助かったんですか？」

第51話 ごめんな、蘭・・・（後書き）

蘭「新一は助かるんだよね！？ 大丈夫だよね！？」

作者「さあ・・・」

蘭「さあ・・・じゃないわよ！！ はああああ・・・」

ビューーーーーー（↑作者が逃げる音）

蘭「ちょっと待ちなさいよ！！ 新一が死ぬなんてただじゃ済まさないんだから！！」

第52話 意識いまだ戻らず（前書き）

新一くんが意識ない間を振り返る形です。ご意見ご感想お待ちしております

第52話 意識いまだ戻らず

手術室の赤いランプが消え、中から血に染まった青緑色の術着を身にまとった執刀医が出てきた。

その様子から、大変難しいオペだったことが容易に伺える。

蘭「あの……新一はどうなったんですか？ 助かったんだよね？」

この間と空気がどれだけ重く、暗く感じただろう。

それでも、わずかでも望みがあるのなら、執刀医の言葉を待つしかなかった。

手袋を取りながら答える。

執刀医「体にうけた傷は右足の骨折だけで済んだのですが、頭を激しく打ちつけたことによる急性くも膜下出血と、激しく揺さぶられたことによる脳挫傷も併発していました。なんとか血腫は取り除いたのですが、助かるかどうかは五分五分でしょう」

全員「そんな……」

執刀医「それでもうつひとつ言わないといけないことが……2、3カ月までの間に意識が戻らなければ、例えば意識が戻ったとしても、な

んらかの障害が残ることを覚悟しておいたほうがよいでしょう」

その“死”ともとれる内容に、みんなは絶望した。

顔からさーつと血の気が引いて死人のように青白くなっていく。

蘭「どうして……どうして新一がこんな目にあわなきゃいけないの！？ 私を……私をかばったせいでこんなことに……」

小五郎「蘭、気をしっかり保つんだ。まだ死んだ、というわけじゃない。今は、アイツの生命力にかけるしかないだろう……」

蘭「……………！！」

その後大手術を終えたオレは、すぐに無菌室機能のある集中治療室へと物々しく運ばれていった。

もちろん、当分の間は絶対面会謝絶である。

蘭たちは、ただオレの意識が無事後遺症なく戻るのを、ガラス越しに不安な気持ちで待つしかなかった。

蘭「新一、死なないで……私、あの時のコタエ、まだ聞いてないんだから……」

そしてそれから3ヵ月がたった。

オレがずーと意識を失っている間、毎日のように多くの人が見舞いに来てくれた。

蘭や海外から知らせを聞いて駆けつけたオレの両親はもちろん、小五郎のおっちゃん、帝丹高校の同級生、それに事件捜査の合間をぬって見舞いに来る目暮警部たちまで。

オレの関係者と言われる人はみんな、見舞いに来ているようなものだ。

ただ、江戸川コナンとして過ごしていた時の大切な友達、歩美や光彦、元太以外は……

その人たちみんな、未だに刻々と眠り続けるオレに、ガラス越しにひたすら話しかけ続けるのだった。

意識が無事に戻ることを願って……

たとえ障害が残ってもいい。

命さえ助かれれば……

新一は1度心臓が止まって死にかけたのに、こうしてまだ息だけはしてくれている。

体にただ心臓が動いて血が流れ、呼吸ができることがどれだけ素晴らしいことか、この時ほど身にしみてありがたく感じることはなかった。

そうでなければ、そこに転がっているのはただの屍にすぎないのだから……

小五郎「それで、事故の詳細はわかったんですか？」

高木「いや、まだ何も……あれだけ多くの人が注目していた事故なのに、何も手かがりがないんですよ」

佐藤「でも、これだけは言えるわね。犯人はそうとう工藤君に恨みを持っていたってこと。じゃないと、ここまで証拠品が残らないわけないもの」

高木「工藤君が以前担当していた事件の被疑者やその家族とか？」

白鳥「調べましたが、工藤君が担当した事件の被疑者は全員刑務所に服役中です」

目暮「せめて工藤君の意識が戻ってくればいいんだが……」

それから数日後、事態は急速に動き出す。

第52話 意識いまだ戻らず（後書き）

空白の3カ月間にいったい何があったのか、短いですけど自分なりに表現してみました。もっと表現できればいいんですけど……

第53話 キミはダレ？（前書き）

新一くんがユウタイリダツ（？）していたり、川の方こうで銀髪の男が待ち構えていたり、なんか作者自身もうまく説明できませんが、意識が戻るまでの新一くんの様子を描いてみたつもりです

第53話 キミはダレ？

あの事故から気づけば3カ月がたっていた。

新一は刻々と意識が戻らないまま眠り続ける。

意識が戻る前兆もないまま、毎日、1日何回も看護師や担当医が体温や脈拍、人工呼吸器に変化がないか見て回っている。

何本もの管と機械に繋がれてなんとか生きている、いや、生かされているというべき植物状態一歩手前の新一を……

機械を止めたり、管を抜いてしまえば、たちまち死に至ってしまうようなもうい命々存在の状態である新一を……

こんなにも人間の命は儚いものなのか……

そして3カ月が過ぎた頃、いつものように看護師が確認に来た。

いつもと何も変わらない、ただただ意識が戻らず眠り続けている患者の生命力を信じて、その補助と確認をするだけのはずだった。

体温と脈拍、機械の点検を終えて帰ろうとした時……

看護師「……………つつ!？」

看護師が何かの変化に気づき、すぐさま担当医に連絡する。

担当医「そんなに慌てて何かあったのかね？」

看護師「集中治療室に意識が戻らないでいる患者の左手の指先がわずかに動いたんです!!」

担当医「なんだって!？」

ここはどこだ……？

オレはいつたいどうしたんだ？

あたりはまっくらでいやな匂いがする。

そうだ。

オレは蘭をかばってトラックの前に飛び出し、大怪我をしたんだっ
たな。

そして意識の戻らないまま3ヵ月もの間、眠り続けていた。

声が聞こえる……

下に見えるのは、誰だ？

知らない人……高校生くらいの女の子だろうか……？

あれ？

知っているはずなのに思い出せない……

大切な人だったはずなのに、どうして……？

いや、大切な存在だったからこそ、忘れてしまったのか……？

それに、どうして上から見下ろすような視界なんだ？

オレは死んだ、のか……？

どうして！！

まだやらなければいけないことがいっぱいあるのに……

川の向こうから誰かが手招きしている。

全身を真っ黒に染めた背の高い銀髪の痩せた男と、割腹のいいサン
グラスをした中肉の背の低い男が……

何か言ってる……

え？ 悪い？ オレが？ どうして？ 薬？ なんのこと？

……後ろから声が聞こえる……

（死んじやいや……まだあの時のコタエ、聞いてないんだから……
シンイチー！！）

（戻ってこい！！）

（蘭を残して死ぬなんて格好悪すぎるぞ……）

蘭？ シンイチ？

そうか、あの泣き崩れてる若い女の人が蘭、という人で、オレがそのシンイチ、という人なのか……？

どうして……？ どうして忘れてしまったんだ？ 自分の名前も大切な人のことも……

思い出そうとすることがつらいことなら、忘れたほうがよかったのか……？

でも、川を渡る前にその声を聞けてよかった。

オレはキミにとって、大切な存在なんだよな？

もしそうなら戻ってもいいか？

覚えてなくてもいいか？

キミのいうシンイチじゃなくてもいいか？

頼むから泣かないでくれ……

今、戻るから……

暗い闇に一筋の光がさす。

あまりの眩しさに一瞬怯むが、ゆっくりとまぶたを開く。

最初はぼやけていたが、次第にはつきりと見えてきたのはどこかの部屋の鼠色の天井。

そして次に見えたのは、側で心配そうに見つめる大勢の人。特別に消毒された服を着た若い高校生くらいの女の人と医者らしき人。

しだいに音も聞こえてきた。

医者「気がついたかね？」

看護師「キミは事故にあつて3カ月も眠っていたんだよ」

蘭「ごめんね、私のせいで……新一、大丈夫？」

絞り出すように、消えてしまいそうな細い声を発する。

シンイチ「キミはダレ？」

第54話 ボクは彼じゃなきゃいけないの…？（前書き）

この小説とは関係ありませんが、先日、警察官採用試験の1次結果がきて、みごと通過しました！！次は1週間半先、今度は血液検査や体力テスト、それに面接があります。みなさんは将来何を目指していますか？新一くんはやっぱ探偵になるんでしょうか…？

第54話　ボクは彼じゃなきゃいけないの…？

シンイチ「キミはダレ？」

その言葉が重く暗く押し掛かり、空気を暗く染める。

聞こえるのは、壁にかけ掛けてある時計の秒針が動く音と、機械の静かな音だけ。

10秒、30秒、1分。

それ以上に感じた。

ずっとこのまま時間が止まってしまうんじゃないかと思うぐらいの重苦しい雰囲気。

蘭「な…何を言ってるの、新一？」

小五郎「寝ぼけたこと言ってるんじゃないやねえよ。

お前は工藤新一、そして俺の娘でお前の幼馴染の毛利蘭だ」

シンイチ「クドウシンイチ…？ モウリラン…？

ボクがクドウシンイチっていう人なんですか…？

わからない…みんな知らない人ばかりだ…なにも思い出せない…」

蘭「そ…そんな……」

その絞るように発せられた今にも消えてしましいそうな言葉が何を意味しているのか、

みんなすぐに理解をした。

いや、理解をせざるをえなかった、というべきか…

シンイチの視線は窓の外を見つめている。

季節はもう夏になり、セミの鳴き声や子供たちの楽しそうな笑い声が聞こえる。

それなのにシンイチは感情が抜き取られたかのように無表情、無感情だ。

「記憶喪失ですね」

小五郎「記憶喪失…？」

医者「はい。分類的には、逆行性全健忘といいます。

受傷より昔の記憶が抜け落ちた状態のことで、

ある時点からさかのぼっての記憶が引き出せなくなります。

自分の名前さえわからず、一般的にご存知の「ここはどこ？
私は誰？」状態です。

多くは心因性なのですが、彼の場合、

頭部を激しく打ち付けたことによる脳挫傷が原因と思われるま
す。

そして目の前で大切な人が危険にさらされ、

自分がかばうことで彼女を救った、とも考えられるでしょう」

小五郎「日常生活には問題ないんですか？」

医者「はい。計算や文字を書くなどの日常生活に関することには、異常は見当たりませんでした」

小五郎「そうですか…よかったな、蘭…？」

どうして…どうして新一がこんな目にあわなきゃいけないの…？

新一は何も悪いことしてないのに…

正義の味方、弱い立場の味方なのにどうして…

本当は私がそうなるはずだったのに…

あの時、新一が私をかばったばかりに…

あれ？

悲しいことなのにどうして涙がでないんだろう？

涙さえ出なくなってしまったの…？

あの時と同じ…

いや、あの時は逆だった…

私がそうなくても、コナンくんが命をかけて守ってくれた。

そして事件の果てに、私の記憶は戻って事件は解決した。

そしてあの時も…

いや、その時は偽者だったけど…

その時も新一が命をかけて私を守ってくれた。

まるであの時のコナンくんのように…

今度は私が新一を助ける番だよね…？

たとえ記憶が戻らなくてもいい…

私は一生、新一の味方だから…

医者「日常生活に問題はありますが、大事をとって数日入院したほうがいいでしょう」

医者はそう言い残し、部屋を出て行った。

そして気がつけば、新一と私のお父さん、そして目暮警部たちと私
しかいなかった。

新一の体からは、命の危険は過ぎたということで、生命維持装置な
どの機械の管が外された。

目暮「いやあ、命だけ助かっただけでもよかったな、工藤君」

蘭「そうだよ。今までのことは、これからゆっくりと思い出してい
けばいいんだからね、新一？」

シンイチ「どうして…」

蘭「え？」

シンイチ「みんなボクのことクドウシンイチだって言うの!？」

ボクはクドウシンイチじゃなきゃいけないの!？」

ボクはいつたい誰であればいいの!？」

白いベッドに寝かされた弱々しい新一は、力なさそうに叫ぶ。

まるで、クドウシンイチという人物をこの世から消し去ってしまう
かのように…

目暮「すまない…キミはキミのなりたいうつになればいいんだよ」

蘭「そうだよ。今までのこともこれからのもゆっくり思い出にしていけばいいんだよ、ね？」

シンイチ「……………」

そして2週間後、新一は退院の日を迎えた。

第54話　ボクは彼じゃなきゃいけないの…？（後書き）

今回は、蘭ちゃんが語るように進みました。

新一とシンイチは意味合いは違いますが、あえて表記を使い分けてみました。

指摘・感想などがありましたら、どしどしお寄せください。

第55話 迎えた退院の日（前書き）

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、タイトルを少々変えさせていただきました。突然のこと、大変失礼いたします。これから、応援よろしくお願いいたします。

第55話 迎えた退院の日

意識が戻ってからの新一の回復はすばらしいもので、2日後には、1日1回の抗生物質などの点滴や術後の経過観察のための採血はあるものの、その時以外は介助なしで1人で歩けるまでになった。

本来なら、数ヶ月もの間寝たきりだったのだから、体中の筋肉や内臓の機能が低下しているはずだった。

新一本人の努力もあるだろうけど、1番は、毎日尽きつきりで筋力が落ちないように、と手足をマッサージしていたり、常に体を清潔に保っていたり、という手厚い看護があったから今こうして歩けている。

そりゃあ、最初は新一は嫌がった。

誰でも自分の下々の世話を他人にしてもらうのは嫌だよね？

他人……

そう、新一の記憶が戻るまでは私は他人でいるしかない。

たとえ一生戻らなくても、その求めた結果が信じられなくて認めたくないことだったとしても、

私は………

記憶が戻らなくてもいい

忘れてしまってもいい

過去の記憶は忘れてしまっても、今からの思い出は作れるものだから……

(退院当日)

医師「それでは、お大事に。何かあったらすぐに連絡をくださいね？」

蘭「今までありがとうございました」

有希子「さあ、新ちゃん。私たちの始まりの家に帰りましょう?」

優作「大丈夫だ、心配するな。我々はみな味方だから……」

シンイチ「は……はい……」

雨がしとしと降る夏の朝、1台の車が病院を後にした。

向かった先は、工藤邸。

息子の退院に合わせて、両親の優作と有希子がわざわざ海外から駆けつけてくれたのだ。

みな、その超セレブ(?)な工藤夫妻が手配した車に乗っている。

雨はだんだん弱くなり、雲の合間から柔らかな光が地上に降り注ぐ。

そして次第に雲は流れ、隠れていた太陽がまぶしく顔を覗かせる。

水溜まりが光に反射してまぶしく見え、みなホツとする。

ただ1人を覗いて……

その人はまるで色のない世界に住んでいるように無反応無表情で、車から見える景色を灰色の目でただ見ていた。

空気がズシツと重くのしかかる。

蘭「ところで優作さん。新一はこれからどうするんですか？」

助手席に座って新一の様子を静かに見守っていた優作が答える。

優作「2、3日は自宅で安静は確實だろうけど、その間体調が悪くなければ短時間なら出掛けてもいいだろう。帝丹高校にも、な」

蘭「そうだね。帝丹高校に行けば新一の記憶、戻るかもしれないし……あ、新一新一って言うてごめんね」

有希子「無理に思い出さなくてもいいのよ？無理強いするのもよくないし……」

優作「ここはひとまず家に帰ろう。話はそれからだ」

シンイチ「……………」

車は加速し、水溜まりの水をバシャバシャと吹き飛ばしながら工藤邸へと走り去っていった。

重い空気と抜け殻のような新一を連れて……

第55話 迎えた退院の日（後書き）

今回はそろそろ目55話目です！…っていうかそれになんの意味もないですけど…

新一くんのこれからの思い出〜キオク〜がいいものでありますように…！！

みなさんは、新蘭派ですか？それともコ哀または新志派ですか？

第56話 彼、工藤新一く育った家（前書き）

みなさんは、コナンのアニメは見たことがありますか？

多くの曲がありますが、みなさんはどの曲が好きですか？

今までの映画で1番好きなのはなんですか？

1番好きなキャラとカップリングはなんですか？

第56話 彼、工藤新一く育った家く

雨はあがり、雲の合間から太陽の温もりが地上を照らす。

大地に、海に、空に。地球上のあらゆるところで生命を謳歌する、人や生き物たち。

1度恵みから見放されたり、自分だけではたちまち生きていけないもろく儚い生き物。

それが人間。

自らの頭脳と才能を世の中のために生かそうとする者、反対にそれの使い方を間違つて悪事を働く者。

たくさん人の数だけ様々な個性、能力がある中で、彼は経済的にも能力的にも大変恵まれていた。

父親は世界的に有名な推理小説家、母親は伝説の元アイドル女優。

父親から類い希なる推理力と洞察力、母親から容姿と行動力を受け継いだその少年。

それが今走る車の中から外を静かに見つめている、工藤新一である。その新一が私をかばって大怪我を負い、その命を保つ代償として自

らの記憶を差し出した。

高校生探偵として華々しく活躍し、犯罪事件を見抜く鋭い嗅覚を持つ新一。

その新一と行ったトロピカルランドで行方をくらまし、時々嵐のように現れて煙のように消えた数々の事件。

私が聞く前に、真実を確かめる、引き止める前にいずこかへと消えてまわりの風景と同化する。

そしてそれから1年後、コナンくんがいなくなった後、新一は再び姿を現した。

またすぐ前みたいになくなるんだと思っていた。

でも、今回は違っていた。

新一はどこへも行かない、と言ってくれた。

帝丹高校での事件を解決し、また前と同じように謎の体調不良で倒れ、なんとか回復し、穏やかで平穏な笑いあえる日々が続くんだと思っていた。

はにかんだ笑顔、何もかも見透かしたような不敵な笑み。プロから声がかかるくらいサッカーが上手で、ホームズと事件バカの新一。

その新一が、あの雨の日、どこかへ行ってしまった。

目の前にいる、見えるところにいる、手が届くところにいるはずなのに……

なぜか霧と硬い殻に包まれたように閉じこもる新一。

今までの自信たっぷりな新一は帰ってこないんじゃないか。

記憶を犠牲にするくらい、何に不安負担があつたのか？

今の私にはわからない。

でも今わからなくても、じっくり無理せず時間をかけていけばいい。

取り戻した記憶が認められないものだったとしても、それがどれだけ危険だとしても、一生記憶が戻らなくても……

新一は新しい新一であればいい。

今からの記憶や体験は、思い出として作り保存できるものだから……

そんなことを考えている間に、いつの間にか車はとある場所に止まっていた。

有希子「さあ、ここがキミ（新一）の育った家、私達のお家よ」

シンイチ「ここが……ボクの家……？」

ヨーロッパにありそうな立派な邸宅の前に、彼は静かにたたずんで不思議な気持ちを感じながら見つめていた。

第57話 覚えていること（前書き）

ある読者様から、更新が遅いのと、1回分が短いというご指摘を頂きました。大変申し訳ないです。努力はしているのですが、風景や周りの描写を入れていると、どうしても文字数が多くなって、その結果、物語の進み具合が遅くなってしまうのです。これからなるべく次回更新までの期間を短くしていきたいと思っています。他にも、上記のように感じていた方はいらっしゃいますか？

第57話 覚えていること

日本には似合わないその洋館は、ただ黙ってその少年を見つめていた。

庭の木々や屋根に止まった全身真っ黒なカラスたちが不気味に鳴き声をあげる。

それはまるで、あの世からの使者であるかのように……

優作「ここでつつ立ててもなんだ。話の続きは中に入ってからにしようじゃないか」

一向に中に入ろうとしないその少年（新一）を後押しするかのよう
に、優作がみんなに諭す。

勇気をもって扉のノブに手をかけ、ゆつくりと玄関の扉を開ける。

そこに見えてきたのは、赤い絨毯の上に天井まで届きそうな本がいっぱいの本棚のある部屋だった。

その本のほとんどは、世界中の推理小説や事件をまとめたファイルなどである。

ゆつくりとその部屋に足を踏み入れ、空を見上げるように周りを見

渡す。

シンイチ「ここは……」

有紀子「なにか思い出したの？」

新一は静かに首を振る。

シンイチ「わからない……でも、なんだか懐かしいような気がする。
どうしてだろう……？」

そして静かに本棚に近づき、何かに吸い寄せられるかのように1冊
の本を手取る。

まわりの人たちがその本を覗き込む。

蘭「あつ、シャーロック・ホームズの本。新一、それが大好きだったんだよ？」

事件と聞いちゃあ授業を放っっぱり出して、現場に駆け付ける、
ホームズ事件バカ。

高校生探偵として有名だったんだから……覚えてない？」

シンイチ「ボクが探偵……？」

優作「まあ、いきなり全部を思い出す必要はないよ。ゆっくりゆっくりとだな」

阿笠「そうじゃよ。今までが嫌な思い出なら、無理に思い出す必要はないんじゃない？」

これから、いい思い出を作っていけばいいんじゃない」

まわりの人間は、みんな焦らず急かさず暖かく見守っている。

嫌な記憶があるから心を閉ざしてしまったのか、思い出すのが怖いから記憶に蓋をしたのかはわからないが、急かしてしまっただけは余計蓋を頑丈にするかもしれない。

自然に戻るのを待つしかないのだ。

ただ、それにわずかだが希望があった。

ホームズに見覚えがあったのだ。

それは大きな前進だった。

新一からホームズを取ったならにも残らないんだから……

有紀子「さあ、今日はここまでにして、部屋でゆっくりしましょう？」

有紀子が新一と蘭を連れて2階の新一の部屋へ連れて行く。

その間も、シンイチは視界に広がる見覚えがない家を見つめているのだった。

ただひとつ。蘭が新一に手渡したサッカーボールだけは大事に抱えていた。

第57話 覚えていること（後書き）

私的にやることがいっぱいありすぎて、文章が短いです……

皆さんのやってる小説は比較的まとまっていたのに……

皆さんは、文章のボリュームと更新の頻度、どちらを優先していますか？

第58話 早朝のサッカーボール

そして翌朝。

工藤邸に付き添って寝泊まりしていた有希子と、小五郎を説き伏せて工藤邸に泊まった蘭は、小鳥が気持ちよくさえずる心地よい風の吹く音で目を覚ました。

優作は昨夜のうちに、連載小説の締め切りで缶詰のため新一の様子が気にながらも、編集者たちに連行（拉致監禁？）された。

その小鳥の声に混じって、何かが壁にぶつかる音がかすかに聞こえる。

軽く、重く、弱く、強く……

メトロノームのように軽やかで一定のリズムで、時々止まって思いっきりぶつかる音が……

蘭たちはその音のする方向に向かう。

大きな玄関の扉を開け、その先は木々や花々が見事に咲き誇る広い見事な庭の片隅だった。

蘭「新一、そこにいるの？」

サッカーボールに意志があるかのように、パジャマ姿のまま出て来

た蘭と有希子の前に転がってくる。

パジャマ姿でも、蘭の美しさは隠せない（ちょっとクサイかな／／
／by作者）

寝癖ではねている髪の毛、寝起きの瞳も、まっすぐとサッカーボールを壁に向かって蹴っていた新一を見つめていた。

有希子はサッカーボールを拾って、駆け寄って来た新一に優しくすべてを包み込む母なる海のように渡す。

有希子「記憶が戻ったの、新ちゃん？」

シンイチ「……わからない……」

有希子「そう……」

シンイチ「でも……サッカーをしていると落ち着くんだ。頭がすつきりするとか、なんというか……蘭さん、ボクはサッカーが上手だったんですか？」

蘭「うん、プロから声がかかるくらいうまくて国立のヒーローだったんだよ」

シンイチ「そう、なんですか……すみません。まだ何も思い出せなくて……」

蘭は優しく無条件に目の前の物や人を愛する微笑みで、新一に応える。

蘭「急ぐ必要なんかないわ。嫌な記憶なら思い出す必要はないもの。前の私のように……」

シンイチ「……?……」

有希子「さあ、夏といっても早朝はまだ少し寒いわ。中に入って朝食にしましょう。私が腕によりをかけておいしい朝食を作ってあげるから!!」

蘭「あ、有希子さん。私も手伝います」

蘭と有希子は、愛しい我が子と新一に愛情を示し、ハキハキとこれ以上ないかのように嬉しそうに家の中へと消えて行った。

愛する我が子や恋人などにご飯を作ってあげることが、最大の喜びであるのかもしれない。

焦らないでいい、とはいいいながらも、無意識に急かしていることに誰か気付くだろうか……?

『ボクは誰なの?』

『ボクは彼じゃないといけないの?』

ボクはいつたい誰なのか？

サッカーが少しうまくて推理小説ホームズが好きな、どこにでもいる普通の高校生じゃないか？

ボクはみんなが“新一”“シンイチ”っていう人なの？

彼はいつたい誰なの？

いつか誰かが言ってた、

『君は高校生探偵で、我々警視庁も頼りにしていた救世主なんだよ』

『ホームズオタクで事件バカ。けどいつも自信たっぷり』

ボクはみんなの言うそういう人物なんだろうか？

『無理に思い出す必要はないんだよ』

『嫌な記憶なら思い出さなくてもいいんだから』

『今までの記憶が戻らなくてもいい。今からの思い出は記憶できるから……』

そうか……そうだよな……

自分が誰かなんてどうでもいい。

自分は自分になりたい、こうありたい自分でいればいいんだから……

蘭「新一、早く来なさいよ？」

家の中から、美味しそうな匂いと蘭の楽しそうな声が聞こえる。

ここで初めてお腹が空いているのに気付き、普通の人間であることを確認したシンイチ（オレ）は、純粹に喜びながら家の中に向かった。

その顔からは、きれいな汗が流れていた。

第59話　そう言いつと想つて……

シンイチ「学校に通う？」

退院した翌日の朝、有希子や蘭と朝食を食べていた時、有希子がそう提案した。

テーブルの上に置かれた様々な種類の朝食やコーヒーからは、美味しそうな匂いと湯気が家いっぱいに漂っていた。もちろん、この料理は有希子と蘭が心をこめて作ったものである。

フォークを握っていた右手を止めて話す有希子。

有希子「そう。新ちゃん退院してだいぶ体調も落ち着いたから、そろそろ高校にも復学したらどうか、って思つて……」

シンイチ「そこに行けば、ボクの記憶も戻るかもしれないんですか？」

シンイチの顔は複雑な表情で、曇っていた。

ボクは何者なのか？

ボクと蘭さんや有希子さんとの関係は何なのか？

どうして彼女らが嬉しそうな顔をするのか？

どうしてボクは覚えてもいないのに懐かしい、と感じることがあるのか？

その以前のボクが通っていた学校、帝丹高校に通えば何かわかるのか？

記憶を取り戻す手掛かりがつかめるのか？

思い出そうとすると何かが出てきて邪魔をする。

記憶を取り戻さなくても日常生活は問題なく送ることができる。

でも、怖いけど、不安だけど、なぜだか蘭さんを愛おしく大切に感じるから、そのコタエがわかるのなら、そうしたほうがいいのかもしれない……

シンイチ「わかりました。そうすることでボクが誰なのか、どういう人間なのかかわかるきっかけになるのなら、学校に行きたいです」
有希子はホッと安心したように息を吐く。

有希子「よかったあ。新ちゃんがそう言うと思って、もう復学届は

出してあったの」

蘭「新一、体調とか気分が悪かったら無理しないでいいんだよ？」

シンイチ「いいえ、行きます……そうすることで忘れていた何かがあるのなら……」

有希子「そう、わかったわ。それじゃあ、高校に復学するのは数日後、ということ、ひとまず今は中断している朝食を食べてしまいましょうー！」

（朝食後）

ほどなくして、朝食を食べ終わった私たちは、それぞれ思い思いの食後のくつろぎタイムを満喫していた。

有希子さんは食器を私（蘭）と洗った後、電話で優作さんと笑いと真剣な表情も交えながら何か話しているし、私と新一は家の中を改めて見て回っていた。

新一の行きたいとこ、意志、意識に任せて……

そして、私と新一は本が天井に届きそうなくらいたくさんある書斎に入った。

新一は、キヨロキヨロとあたりを物珍しそうに見渡している。

ほとんど戻らない、とはいっても自分の家なのに、珍しそうにあたりを見回すことに私（蘭）は少し悲しい感情を覚えた。

新一は本棚から1冊の本を取り出して開き、黙々と読んでいる。

私はそんな回りが多少見えていない新一に近づき、言葉をかける。

蘭「ホームズの本。新一、ホームズが大好きだったんだよ？

事件と聞いちゃあ、私を置いて現場にすっ飛んでっちゃう大バカ推理ノ助。

でも、私はそんな新一が、事件を解いた時のあのキラキラと輝いていた新一の表情が大好きだったな……」

新一は、顔を赤くして照れながら自慢気に話す蘭を不思議そうに見つめていた。

シンイチ「蘭さん……ボクも推理、できるでしょうか？」

蘭「もちろん！！」

できるよ、新一なら！！」

シンイチ「そ……そうかな……………／／／」

今度は新一が顔を赤く染める。

そして、お互いの顔を向けて見つめ合う。

2人はお互いに照れてすぐ顔をそらしたが、その表情からは、お互いのことを心から大切に思う“愛”“慈悲深い”心が伺えた。

ジリリリリリリリ

そんなかすかに甘い2人の関係を、突然家中に鳴り響いた音がふと我にかえした。

第60話 初推理？（前書き）

数少ない読者の皆様、大変お待たせしてすみません。私的に大変忙しくて更新が遅れてしまいました。その辺も不満とか感想とか言いたい方、感想お待ちしております。

第60話 初推理？

ジリリリリリリリ

突然その静かな室内に響き渡った音に、ボクはびっくりした。

それまでの平凡だけど小さな幸せを感じる空気は、一気に鋭く尖った刃のように変化した。

そしてそれと同時に、シンイチの表情も変わった。

それまでは平穏を望むちょっと内気などどこにでもいる高校生だったのに、その音を聞いて探偵の目に……

記憶はないはず？

そのはずなのに、シンイチの心、体に染み付いた探偵としてのDNAがその血を呼び覚ます。

シンイチ「はい、工藤シンイチですが……」

気がつけば、無意識に電話の受話器を取って話している新一が目の前にいる。

どうやら、目暮警部からのようだ。

シンイチ「はい……はい……えっ？ でも……ボクは皆さんが知っている以前の……はい……わかりました。それでもよいのなら、今からそちらに伺います」

静かに受話器を置く。

そして振り返った新一の顔は輝いていた。

以前の事件が好物であるかのような新一に……

キラキラ輝いている新一に……

蘭「事件なの？」

シンイチ「うん。米花駅で事件だって。それでボクの力を借りたいらしい。だけど、今のボクは……」

新一は下を俯き、不安そうな表情を浮かべる。

以前の自分にいくら時間がかかろうとも、いつか記憶を取り戻すと決めた自分。

以前は類い希なる推理力と観察力、豊富な知識を武器に迷宮入なしの名探偵、といわれた自分。

だけど、今は……………

記憶をなくしたどこにでもいる普通の高校生。

そうなのに、ホームズに親近感を沸いたり、事件と聞いてドキドキする自分がいることに驚き、安心する。

『やっぱり、ボクは事件バカだったのかな？ この写真に写っている嬉しそうな得意気な自分なのかな？ 生き別れた双子じゃあるまいし……………いずれにせよ、自分を大切に自分のしたいようにすればいいんだ。そうすれば、きっと記憶は戻るはず。きっと……………』

シンイチ「行きます。ボクがどういう人だったのか知る手がかりになるのなら……………」

蘭「わかった。じゃあ私も行く。新一だけじゃ、心配だもん」

こうして、シンイチと蘭は今し方起こった事件を解決するために、現場へと向かった。

後から誰かがこっそり距離を置いて着いてきているのも知らずに……………

（米花駅）

目暮「おお工藤君、待ったぞ。早速ですまんが、こっちへ来てくれんか？」

シンイチ「あ、すみません、蘭さん。そこで待っていてください」

蘭「わかった。新一、頑張って!!」

蘭は旦那を仕事に送り出す妻のように、現場まで走ってきたためよれているネクタイをキレイに正す。

シンイチ「で？ どういった事件なんですか？」

目暮警部は、上着の内ポケットから警察手帳を取り出し、ページをめくりながら事件の概要を説明する。

目暮「被害者は高遠美沙都さん、21才。この近くに住むキャバクラ嬢だ。今日の明け方、帰宅途中に何者かに刃物で背中を刺され重傷。そのまま倒れて気を失ったため、犯人の顔は見ていないそうだ」

シンイチ「……………凶器は？」

目暮警部「刃渡り10センチぐらいの果物ナイフだそうだ」

顎の先で右手を丸め、人差し指と親指を顎に当てる。

その姿勢で目を閉じ、頭をフル回転で何かを考えるシンイチ。

蘭（あつ、いつもの新一だ／＼この新一の表情、ポーズが好き…
…だよ／＼）

柱に背中を預けて、頭脳をフル回転で糸と糸をほぐし、まっすぐに

真実を見つけようとする新一。

記憶がないはずなのに、体に染み付いた本能で自分も気づかないうちに、証言と証拠を1本の糸にしていく。

無色透明な糸の束に混じっている赤い糸を解きほぐすように……

第61話 工藤新一、探偵です……？（前書き）

事情聴取なのですが、表現が難しくて飛び飛びになっちゃってます……感想ご指摘アドバイスお待ちしております。

第61話 工藤新一、探偵です……？

遠くで何かがチカッと光る。

太陽の暖かく、いや、暑苦しいくらいの光線が地上に降り注ぎ、駅のホームの屋根や道端の看板で反射する。

シンイチは顔から流れる汗を右手で拭きながら、目暮警部に自分が連れて来るように頼んだ関係者（容疑者）を待っている間、今まで現場や聞き込みなどでつかんだ情報を頭の中でパズルのように組み立てていた。

以前ならたいして難しくない事件もあったが、今は記憶を失っているし、そうでなくても、難事件、というものはたくさん数えきれないほどあった。

新一の時も、コナンの時も、そして元に戻ってから……

目暮「工藤君、関係者を連れてきたぞ」

思考を一時中断し、その言葉で現実世界に戻される。

シンイチ「では、右の方から順番に、名前と職業、それから今日の
明け方何をしていたのか話してくださいますか？」

（何か変な言葉遣いだが……ま、いいか……by目暮警部）

女性「な、なんなの!!」

男性「ガキ風情が偉そうに!!」

お前はいつたい誰なんだよ!？」

蘭（新一、ファイト!!）

蘭が現場に張られたロープの外から声援を送る。

シンイチ「ボクは工藤新一です」

男性「えっつ、あの高校生探偵として有名な!？」

女性「きゃー／／私、だあいファンなの／／」

女性がそう顔を赤くしながら、シンイチに近づいて手を握る。

女性（工藤くん、あの人に注意したほうがいいわよ……）

と握手をするふりをして、こそつと耳打ちする。

その言われた視線の先には、1人の男性がいた。

シンイチ（彼のどういうところが……？）

（女性。以下、能美理恵とする）

（男性。以下、高津亮とする）

理恵「まあ、いいわ。私は能美理恵、教われた彼女と同じキャバクラ嬢よ。今日の明け方は家で寝ていたわよ。まあ、証明してくれる人はいないけど……」

亮「ば、ボクは証券会社に勤務するサラリーマンです。彼女のキャバクラに時々通っていました。明け方は……会社が遠いので、その頃は通勤電車に乗っていました」

シンイチ「ふむ……それでは、この用紙に書いてあることに少々ご協力していただけますか？」

新一はそう言って、数枚の白い紙を2人に渡した。

蘭（いつ……いつの間にあんなものを……さすが新一／＼／記憶がなくても行動力は心の記憶として残ってるのね！！）

シンイチ「それにはいくつかの質問^{クイズ}があります。それに正直に答えてください。そうすれば、すぐに犯人はわかりますよ……」

第62話 問題その一（前書き）

長いこと放っておいてごめんなさい！！

いろいろやることがありすぎて、めっちゃ多忙でした。

そんなに忙しいなら小説やらなきゃいいじゃん、とか

やる資格がないとかいろいろ考えてる方もいらっしやるかもしれない
せんが、

どうか気長に更新を待っていてください。

他にも私みたいな想いをしてる方、いらっしやいますか？

第62話 問題その一

(10分後・・・)

目暮「おいおい工藤君、これで何がわかるというんだね？」

シンイチ「もちろん犯人ですよ、警部」

全員「!？」

その場にいた関係者全員の視線が工藤新一に向けられる。

以前の新一ではないし、まさか記憶喪失の人間が

こうして警察にも顔が利くし、ここまで堂々としているものなのか、と

少なからず感じる人間がいるのだろうか・・・？

まさかそうだななんて知るよしもない、いや、今は知らない方がいいだろう。

高木「犯人って・・・ただ何問かの推理クイズをしただけじゃないか？」

佐藤「これでどうやって犯人がわかるっていうの？」

シンイチはそれまでみんなに向けていた背中を返し、

振り返って堂々と自分の推理（しようとした意図）を話し始めた。

まっすぐに真実、真相に目を向けて・・・

シンイチ「実は、この2人に渡した紙には、犯人にしかわからないようなことが書いてあったんです」

高木「犯人にしか知り得ないこと・・・？」

シンイチ「そうです。例えば、第1問目。

【あなたは今から誰かを殺そうとしています。そのために使う凶器はどこで入手しますか？】

【1・家にあるもの】

【2・店で購入する】

【3・誰かから奪う】

【4・現場にあるものを使う】

というような具合です。目暮警部、警部ならどれを選びますか？」

第62話 問題その一（後書き）

さて、表現が少々不適切かもしれませんが、みなさんなら何を選びますか？

これは、金田一少年の事件簿から参考にしました。
またまた短くてごめんなさい

第63話 聞こえた声と本当の意図（前書き）

私の駄文小説の数少ない読者の皆様、かなり遅くなつてすみません。採用試験のほうも落ち着きました。短いし更新が遅いし・・・ほんとに駄文ですよ？それでは、ご覧ください。新一くんの記憶は、いったいどのような形で戻るのでしょうか・・・？ヒントは、この小説のトップページで。今回は、シンイチくん目線です。

第63話 聞こえた声と本当の意図

いきなりシンイチにそうふられた目暮警部は、きょとんと鳩が豆鉄砲をくらったような表情をしていた。

風が気持ちいいくらいに、サアーっと耳の側を駆け抜けていく。

その風に、蘭さんの黒くて長い髪がしなやかになびく。

綺麗、美しいということはこんな時に言うんだろっとな、と素直に思う。

やわらかでしなやかな体と黒くて美しい髪、そして性格もいい。

まさに大和撫子そのものだ。

これが空手で都大会優勝女だなんて、詐欺にでもあったような気分。

(・・・・・・・・？・・・・・・・・)

あれ？こんなこと、前にも言ったような気がする・・・

どこでだろう？

どんな時にそう思ったんだろう？

いつそんなことを・・・？

どうして、彼女のことをそんなふうに思うんだろう・・・？

初めて、と思っていたのに・・・

以前の僕は彼女のことをそう思っていたんだろうか？

覚えていない。思い出せない。

いや、思い出さない方がいいから思い出せないのか・・・

『私だって何もかも忘れてしまいたいわよ。』

お姉ちゃんを殺されたことや×××を作っていたことも・・・』

『死んでも戻ってくるから、待っていてくれて×××兄ちゃんが・・・』

『オレの推理によると、それはお前が聞きたいことと一緒に思うからよ……』

頭の中に次々と聞こえてくる聞き覚えのない謎の声。

幼いが、どこか大人びて寂しそうな女の子の声で淡々と、時に感情的に。

わざと子供っぽく演じ、時に大人っぽい子供の男の子の声。

今度は高校生くらいの男の子の声で、自信ありげに。でも真実をなかなか言えないような。

頭の中に響いた謎の声は、どこか聞いたことのあるような声だが、みんな自分を偽っているような、自分の気持ちをなかなか素直に伝えられないでいるような。

なんだか不思議でミステリアスな感じ。

記憶を失う以前の僕が体験したことなのだろうか？

それなのに、なぜ知らない、と感じるのか？

なぜ思い出せないのか？

禁断の果実に触れて食べたために記憶に蓋をされたのか？

まわりの人間は、僕を工藤新一だという。

高校生探偵として有名なもとの自分に戻れ、という。

自分はそうじゃないと価値、存在意味がないのか？

そうだとしても、そうであるしか僕は生きられない。

記憶をなくした僕はそうしなければいけない。

そうなのなら、頑張つて無理をしないでちょっとずつ進んでいけばいい。

たとえ後退しても、自分の命が誰か大切な人の命を失うことになつても・・・

自分の記憶を取り戻すためなら、大切な人を守るためなら・・・

どんなつらいことだって、どんな危険なことだって耐えられる、

試練を乗り越えられるような気がする。

そして無くしたあの頃に戻るために・・・

目暮「おーい工藤君・・・？」

いつの間にか、僕はまた別世界にいつていたようだ。

冷静さを忘れないように、動揺さを見せないようにひたすら努める。

シンイチ「あ、はい。それで、目暮警部ならどれを選びますか、つてことでしたよね」

目暮「まあいいが・・・それなんだが、わしなら現場で凶器を確保するな」

高木「ボクもそう思います。この事件は突発的な犯行のように思いますし・・・」

佐藤「それにどこかで購入すれば、そこからアシがつきますしね」

みんながいる方向に振り返り、続ける。

シンイチ「そうなんです。用意周到な犯人なら、凶器からアシがつくことを考えて、

店では購入しないのが普通です」

理恵「だからなんだっていうの!？」

シンイチ「先程も言いましたが、これには犯人しか知り得ないことが書いてあるんです。」

そして犯人の心理から、普通に考えて正解を選ぶのではなく、

わざと間違えるのではないのでしょうか？」

高木「そうか！！ 犯人の心理状態を利用したんだね」

目暮「それで、犯人は一体誰なんだね？」

シンイチ「いくつかのこの質問（問題）の中、正解率が限りなく低いのは・・・」

能美理恵さん、あなたですね？」

第63話 聞こえた声と本当の意図（後書き）

久しぶりです！ー1ヶ月ぶりですね。こんなに長い間放っておいてすみません・・・そして、今回もなかなか話の展開が前に進みません・・・次回は、犯人の動悸と新一くんの記憶が少し戻るかも・・・？

第64話 事件解決（前書き）

ころころと語る人物目線が変わってごめんなさい！！

今回は、蘭ちゃん目線です。

指摘感想アドバイスなどありましたら、ぜひよろしくお願いいたします

第64話 事件解決

シンイチ「犯人は、能美理恵さん。あなたですね？」

全員「!？」

現場にいるすべての人間の視線が、驚きの表情と共に1人に集まる。暑い日差しと熱い視線が交差し、地面から塵気楼のようなものもわもわと昇り、あたりに立ち込める。

まあ、煙、いや霧のようなものなら今の季節であればそう珍しくもないが。というか当たり前だが……

しかしその自然現象の中で、1つだけ不自然なところが……

それは……

シンイチ「ハアハアハア……」

蘭（新一……？

暑いのかな……？

私も、そういえば……）

理恵「わ……私が……！？」

新一に自信満々に指を指された、犯人（？）の能美理恵さんは、

明らかに瞳孔が広がり、顔からたくさんの汗が重力によって、下へ下へと落ちていく。

呼吸も荒く乱れ、視線も宙を泳ぎ、定まらない。

理恵「どうして私が犯人だと？

根拠はあるんでしょうね？

私が犯人だという証拠が……！？」

新一もまた、荒い呼吸を深呼吸で正し、自分に向けられている視線（声）にゆっくりと答える。

シンイチ「いいでしょう……先程も言いましたが、答えてもらった

問題には、その心理を利用した仕掛けがして……ありました……」

高木「犯人にしか知り得ない盲点をついたんだね」

シンイチ「そう……です……」

理恵「でも……！！」

だからってなんだっていうの！？

それは、たまたま私の解答があなの言うことと一致しただけじゃない……！」

理恵さんは、すごい剣幕でシンイチに詰め寄る。

そんな様子を見ても、シンイチは少しも驚いた感じを見せなかった。

いや、それどころじゃなかったのかも……？

（新一………？）

シンイチ「……そう。それだけでは何の証拠にもなりません……しかし、あなたは1つのミスを犯しています」

目暮「それは……？」

新一は呼吸を整え、落ち着いて続ける。

シンイチ「……最初の方で僕が言ったこと……覚えていますが、みなさん……？」

目暮「最初の事情聴取の時だね」

シンイチ「そう……です……あの時、僕はこう言いました。

『それでは、名前と職業、それから今日の明け方どこで何をしていたのか話してください』

と……」

高木「それがいったい……？」

シンイチは、不敵でちょっと謎めいた苦し紛れの笑みを浮かべた。

しばらくの沈黙を挟み、続ける。

日はいつの間にか空高く昇っていた。

蝉せみがけたたましく鳴き、日差しが熱いくらいに強く照りつけ、反射する。

その反射し、増幅した太陽の光によって、塵気楼、もや、煙など様々なものがあたりに立ち込める。

そしてあそこからも、先程より強く……

シンイチ「……僕はそう言っただけで、アリバイのことまでは聞いていません……」

もう、おわかりですよね……？

すべりましたね、理恵さん……

自分で自分の穴を掘ってしまうなんて……」

亮「………理恵さん？」

自分が気づかない間に、自分で自分の犯行を認めてしまったことにようやく気づいた理恵さんは、下を向いてうなだれ、膝をガクッと地面に叩きつける。

その顔からはかすかに涙がこぼれ、地面に涙の水たまりが出ていた。

理恵「あの人が悪いのよっっ……！！

私より後に入ったくせに、1番になった！！

そのあげくに、友達と思っていたのに……私の1番の太客と一緒に宝石店に入るところをつっ……！！

だから……だから刺して……殺してやったのよ！！

もう、2度とできないように……あの客を完全に私のものにするた

めに……!!

……

ふ……あーははははは!!」

そう言いながら、新一に犯行を暴かれた能美理恵さんは、涙を流しながら手錠を両手にはめられた。

高木「目暮警部!!」

今、被害者が運ばれた病院から連絡があつて、一命をとりとめたそうです!!」

目暮「そうか!!」

その時、強い風がヒューッと駆け抜けていった。

理恵「どうして……どうして私の太客を捕ったくせにつつ、私がつらい思いをしたくせに……どうして……どうしてつつ……!!」

パンツツツツ!!

乾いた音が響く。

亮さんは、いきなり彼女を平手で殴った後、真実を語り始めた。

亮「まだ……まだわかんねえのかよ？」

彼女は……君の客を奪ったんじゃない！

君にプロポーズするために……結婚するために一緒に指輪を選びに行っただけだ！」

殴られて赤く腫れ、痛んでいる頬を左手で抑え、ゆっくりと向く。

理恵「うそ……うそよ……！」

あの女がそんなこと、するわけが……」

亮「そのお客が言ってたよ。」

『僕はこついうのには疎くて……どんなのが君が好きかわからないから、一緒に選びに行ってもらっただけだ』

って。

だから、彼女は君を裏切ろうとしてそうしたんじゃない!!

誰よりも、君と一緒に、君の幸せを願ってただけなんだ!!」

さらに涙があふれる。

理恵「そ、そんな……私は……私はっ……!!」

高木「さあ、あとは署の方で」

隠されていた真実を知った彼女は、最後に目暮警部の問いかけに静かに頷き、大人しくパトカーで運ばれていった。

そして高津亮さんも、また事情聴取のために任意同行で署へと別のパトカーで向かった。

目暮警部が見えなくなるまで見送った後、新一の方を振り向くが……

目暮「工藤君、いやあさすがだね」

私（蘭）も新一の側に駆け寄り、苦勞をねぎらう。

しかし、私はその時ようやく気づいた。

新一の様子がおかしいことに……

新一の肩に右手を置き、うつむいた顔を覗き込む。

蘭「新一、どうしたの？」

シンイチ「な、なんでもないよ、蘭……さん……ちょっと……ちょっと疲れただけだから……」

目暮「無理もない。まだ退院してから間もないのに無理言って悪かったな、工藤君。また後日、署まで来てくれ」

シンイチ「わかり……ました」

そう言っていると、目暮警部たちは、みんなパトカーで先程連行されていた車を追うように去っていった。

第65話 女神イシュタルのような……？（前書き）

今回は、新一くん目線です。みなさん、女神イシュタルって知っていますか？

第65話 女神イシュタルのような……？

走り去る車の音がだんだんと小さくなり、それに伴って事件を野次馬していた人達も、それぞれの場所へと帰って行く。

聞こえなくなるまで、僕と蘭さんはただまっすぐと静かに見つめていた。

それと反対に、今は夏真っ盛りなんだ、と思い知らされる。

虫がジージーと鳴き、湿度楼のようなものがあたりから立ち上る。

暑い太陽の日差しが、体力と体の水分を奪っていく。

もう、汗も出ない。

視界がぼやけ、体中の水分が抜けてしまったような感覚を感じ、その次の瞬間には、僕はその場に倒れてしまった。

蘭「新一、大丈夫？
しっかりして！！」

その大切な人の声もだんだんと聞こえなくなり、僕は意識を失った。

ただ、あの声を除いては……

？「もしもし、アニキ……………」？」

（１時間後）

ゆっくりとまぶたを開ける。

視界がだんだんと鮮明に見える。

そこに見えたのは、記憶をなくしてるハズの自分には覚えているはずのない、

懐かしささえ覚える、吹き抜けのある天井の高い家だった。

そして横を向くと、2種類の声が聞こえる。

赤い茶髪の髪の妙に大人びたミステリアスな少女と、

天使のような微笑みとは裏腹に空手都大会優勝女の……

蘭「よかったあ、新一。気がついたのね……」

まだ頭がぼーっとしているがなんとか声にする。

シンイチ「蘭……さん……ここは……？」

灰原「ここは阿笠博士の家よ。起きれる、工藤君？」

僕は2人の美しい女性に両脇を抱えられて、なんとかベッドから起き上がる。

美しい女性、というのは冗談じゃない。

ホントに女神にでもどこかのミス。。なんていうのになれそうな文句のつけようがない、誰が見ても美人だと言える。

右側には、小悪魔のような茶髪でボブレイアーで毛先がカールしている妙に大人びた少女が。

左側には、天使か女神イシユタルか女王のような神々しくもある微

笑みの似合う高校生くらいの女性が。

今、僕は両手に美しい花を従えているような。

どちらを選べばいいのだろう？

茶髪の哀さんという少女のことも、ついこないだまで別の姿でいたような不思議な感覚。

覚えていない、記憶をなくしたはずなのに、なぜか懐かしいような不思議な感じ。

でも、以前の僕にとって、2人とも大切な人。それだけはわかる。

灰原「ごめんなさい、工藤君。

はじめまして。私は灰原と言うの。

あなたの家の隣、阿笠博士の家に住んでいるの。

それで工藤君、あなたいきなりだけど高校に復学しない？」

シンイチ「……………」？」

蘭「そうよ、新一。だいぶ退院して体調も落ち着いてきたし、単位のこともあるから、無理をしない程度に、ね？」

シンイチ「……わかった……」

蘭「それじゃあ、さっそく復学できるように手続きとか準備もしくつちやー!」

阿笠「わしも手伝うよ、蘭くん」

第65話 女神イシュタルのような……？（後書き）

今回は、記憶喪失の新一ちゃんと蘭ちゃんの束の間の穏やかな高校生活が始まる予定です。そして、あの人も出るかも……？

第66話 復学と教育実習生（前書き）

今回は記念すべき第66話目です！！だからとどういいうわけではないのですが……

今回も新一くんの目線です。指摘アドバイス感想などお待ちしております。

第6話 復学と教育実習生

そして数日後……

その日は真夏のような暑さも少し和らぎ、秋の訪れが感じられそうな爽やかな朝だった。

やわらかい光が大地に降り注ぎ、電線には、季節外れの燕つばめが1匹だけ寂しそうに止まっていた。

仲間に置いて行かれ、自分を見失い、行き場所を探して彷徨う生き物。

それを見て、ボクは思わず自分を重ねてしまった。

予想外の大雨の中、事故にあい、蘭さんをかばって大怪我を負い、尊い命と引き換えに記憶を失った。

自分が誰なのかもわからず、自分の居場所もわからず、何をしたらいいのかもわからない。

まるで集団という生活から排除された、孤独な1匹狼のような。

思わず重ねずにはいられなかった。

でも、重ねても意味はない。

責めても意味はない。

そう自問自答すると、どこからか声が、記憶が聞こえる。

『未来は決まってる。決まってるからこそ意味がある。そう信じてるからボクは戦ってるんだ。君はそうじゃないのかな？』

君も。。。も1番正しいと思うことをしたんだ。

結果は受け止めなくちゃいけないけど、未来を知らない過去の自分を責めても何にもならないよ』

ホントは不安だった。

未来がどうなるのか不安だった。

自分が誰で、どうあればいいのか不安だった。

でも、未来を知らない自分を責めても何にもならない。

無意味だ。

だけど、未来を変えることはできる。

いくら過去が嫌な思い出でも、未来は決まっていな

自分次第で様々な色に変わる。

だから、未来は怖いようで楽しい。

でも、1番正しいことって何？

結果って何？

まだまだわからないことはたくさんある。

でも、記憶を取り戻すためにこれからどうするかが大事だ。

取り戻した思い出が例え嫌なものでも、

自分や周りを危険にさらすものだったとしても、

自分の行動次第で、漆黒の黒色と鮮血の赤色から甘く幸せなばら色
に変えられる。

そうどこか心の中で信じてるから、1歩1歩進んでいける。

変えていける。

蘭「新——！！」

準備できた？」

蘭さんは帝丹高校の制服に身を包み、カバンと柔道着を持ち、玄関でボクを呼ぶ。

ボクはその声を聞きながら、久しぶりに自分が通っていた懐かしい香りのする高校の制服に袖を通す。

ネクタイを締めて身なりを整え、鏡に写った自分の姿を見ながらそう考えていた。

蘭さんの現実的な声に現実世界に戻され、玄関を出て、学校へと続く道を歩く。

少し涼しくなった心地よい風を後ろから浴びながら、

蘭さんとたわいもない話をしながら歩く。

蘭「そうそう、新一。新一はサッカーとホームズが大好きなんだけど、覚えてる？」

ボクは右手の指を顎にあてて考えながら答える。

シンイチ「そうですね……覚えてるか、と聞かればまだわかりませんが、

サッカーをしている自分と、ホームズの小説を読んでいる自分だけは覚えていて、夢にしょっちゅう出てくるんです。

でも、まだ完全には思い出せないんです。

思い出したこともあるんですけど……

すみません、蘭さん」

蘭「新一がどうして謝るの？」

新一は何も悪いこと、隠し事してないのに……！

それに記憶をなくしても、それでも覚えてることがあることが素晴らしいんだから……！」

シンイチ「ありがとう、蘭さん／＼／」

そうこうしているうちに、帝丹高校へと着いた。

ボクの復学を聞きつけて報道陣が待ち構えてるかと思いきや、1人も学校へと入っていく学生以外は誰もいなかった。

どうやら、ボクの両親の権限？

いや、半分脅迫も混じっていたかもしれないが、

それはそれとして有り難いことだった。

靴箱で上履きに履き替え、蘭さんの案内で教室へと向かう。

階段を上り、教室の扉を勢いよく開けた。

ナカミチ「お、工藤じゃないか！！

もう大丈夫なのか？」

シンイチ「はい。心配かけてごめんなさい」

ナカミチ「それはそうと、工藤。今日、このクラスに教育実習生が来るんだって」

蘭「へえー」

ガラツツツツ

と扉が開き、担任の先生が入って来た。

担任「はい、今日から工藤くんも復学で私も嬉しいです。

さて、みんな知ってると思うが、今日は教育実習生を紹介するぞ。

入って!!」

ガラツツツツ

と、本日2度目の音が教室に響いた後、スレンダーなモデル体系の美女が入って来た。

「はじめまして、宮野志保といいます。これからよろしくお願いします」

第66話 復学と教育実習生（後書き）

灰原が元に戻ったうえに、組織に知られている極めて危険な本名で、
なんて……

哀ちゃんが少年探偵団のみんなに何て言っ
て別れたのか、などはま
た後に……

第67話 宮野志保という名前に聞き覚えは？（前書き）

長いタイトルだしなかなか話が前に進まないし：ホントにごめんなさい？私の駄文を楽しみにしてくださっている数少ない読者の皆様、そしてそうじゃない人も初めて読む人も、ぜひ感想を聞かせてください。お待ちしています。

第67話 宮野志保という名前に聞き覚えは？

「はじめまして、宮野志保です。これからしばらくよろしくお願いします」

おおー美人ー

スタイルすっげえー

なんていう男子生徒の声が、あちらこちらから聞こえてきそうだ。

一方、そんな男子生徒の様子を見て、女子生徒は彼らを白い目で見ていた。

（なによ男子のやつ……）

（でも、確かにスタイルよくて美人よね……）

そういう声も聞こえてきた。

ただ、新一を除いては……

シンイチ「み……宮野志保……!？」

新一は席を勢いよく立ち、そうつぶやいた。

私は新一の隣の席で、不思議な気持ちになった。

新一に左手を伸ばしながら、心の中で問う。

(新一……?)

もしかして記憶が……?)

志保「あら、工藤君。どこかで会ったかしら？」

まるで女の人を口説く大人の男の人みたいね」

シンイチ「バ……バ……口……そんなじゃねえよ／＼」

と言いながらも、新一の頬はほのかに赤くなっていた。

それと同時に、同級生全員から、いや担任の先生からも同じ視線が新一に集まる。

（ああいうのが工藤の好みなのか？

毛利の空手を喰らうぞ……）

などなど。

そしてその視線が次の瞬間には、私（毛利蘭）に集まった。

蘭「えつつ、私！？」

ええーと新一、知っている人なの……？」

しばらくの沈黙の後、新一は小さい今にも消えてしまいそうな声で答える。

なんとか声を拾えるくらいの大きさで……

シンイチ「わからない……でも、なぜだろう？

初めて会ったような気がしない……

そう、別の姿で、別の場所で………

………っっ！！

あああああ————！！」

突然、新一は痛そうに頭を抱えて叫びだした。

声がかすれるくらいの大声で。

こんなに苦しそうなっつらそうな新一は見たことない。

まるで、頭を鈍器で激しく殴られたような、激しい大声。

蘭「し、新一大丈夫！？

だ、誰か……誰か救急車を呼んで！！」

シンイチ「ら……蘭さ……ん……」

そうもう少して消えてしまいそうな声にならない声で、新一は私を見た。

そして次の瞬間には、椅子から崩れ落ちて床に倒れ込んでしまった。

ドサッ

そんな人が倒れる音が教室内に響く。

蘭「しんいち……？」

新一「iiiiiii！！」

その瞬間、遠くから救急車のサイレンの音が聞こえ、だんだん大きくなり、帝丹高校の前で止まった。

新一は意識を失う前に、心配して集まったクラスメイトや担任の先生のたくさんの人影の中から、

「ふふっ」

つという謎の女の人の口元をチラッと見たあと、

意識を再び失った。

第68話 2回目？の入院（前書き）

みなさん、しばらくです。なかなか話が進まなくてじれったい、なんて思っていることもあると思いますが、これからもお付き合いしていただければ嬉しいです。

そして、皆さんは来年のコナンの映画についてどう思いますか？

次に、私は今、名探偵コナンの映画バージョンの小説を計画しているのですが、こんな設定にしてほしいとか希望はございますか？

もしある方、そしてない方も感想お待ちしております。

第68話 2回目？の入院

ピーポーーーー

ピーポーーーー

遠くから救急車のサイレンの音が聞こえ、だんだんと大きくなる。

小さくなる音と反対に、ボクの頭の中では反射するようにサイレンの音がこだまし、段々と大きくなる。

(…………頭が痛い…………)

救急車のサイレンの音…………？

なぜ…………

早すぎる…………

誰かが先に呼んでいたのか？

そうだったら、いったい誰が…………？(

そこで再び、謎の女の微笑みが……

？「クスッ……」

シンイチ「やっぱり……あの……人……だ……」

蘭「……えっ？」

（でも、なぜ名前は思い出せても……その人との関係と……今まで
の出来事を結びつけられないんだらう……？

大切な何かを忘れているような気が……

ダメだ……意識が……）

まわりの音が完全に聞こえなくなり、段々と意識が遠退いていく。

視界もぼやけ、瞼も重くなる。

そして、完全に視界が真っ黒になった。

（そしてしばらくして……）

シンイチ「ん……ここは……？」

どれくらい時間がたっただろう？

ボクは再び目を開けると、白い天井が見えた。

そして横には、蘭さんが心配そうに覗き込んでいた。

蘭「よかったあ新一。気がついたのね！！」

シンイチ「ここは……？」

蘭「病院よ。新一、学校で突然倒れたんだけど、

誰かが先に救急車を呼んでくれたおかげで、大事にいたらなかったのよ。

ホント、誰が呼んだんだろうね……？」

しばらくの沈黙を挟み病室の扉を開けて入ってきたのは、白衣を着た医師だった。

医師「目が覚めましたか？

工藤君、体調はどうだね？」

ボクは、手を握ったり腕を伸ばしたり首を回したりして異常がないか確認した。

シンイチ「はい。大丈夫みたいです……」

蘭「それで、新一は……？」

医師「頭痛は記憶が戻ろうとする際に起きたもので、記憶が戻るのをどこかで嫌がっているのではないかと考えられます」

蘭「どう、新一？」

ボクはしばらくの間を置いて、限りある記憶から絞り出すように、ポツリポツリとしゃべり始める。

シンイチ「わかりません……でも記憶をなくす前のボクは、厄介な事件に関わっていた、と蘭さんたちから聞きました。

ですから、その時の体験や記憶を表に出さず留めておくためなのではないでしょうか？」

蘭「……よくわかんないけど、新一、無理しなくていいんだよ？

またこんなことが起きたりしたら私、嫌だし、

嫌で危険な記憶なら、無理に思い出す必要もないんだから!」

医師はボクたちの会話を聞き、頷いて話す。

医師「ええ、医者としてもその考えには賛成です。

それに検査の結果、無理しない範囲で日常生活を送るのは問題ないでしょう。」

数日後には退院できるでしょう」

蘭「よかったね、新一。」

2回目の入院だけど、今回は前よりも状況はいいんだから!」

(そうだよな……

今回は2回目の入院、なんだよな……

でも、どうしてだろう?

そう遠くない過去に、違う体で同じようなことがあったような気が

……

いつか、その謎が……

心の記憶を取り戻せるのかな………?)

第69話 思い出の場所へ（前書き）

私的に忙しい日々を送っていますが、少ない時間の合間をぬって、更新しました。宮野志保（灰原哀）の出差、いや回想シーンはもう少し先です。ほんと、組織のあの方って誰なんでしょうね？

第69話 思い出の場所へ

そして数日後……

医師「それでは工藤君。何かあったらまた連絡してくださいね」

ボクは素直に笑顔で答える。

木々が揺れ、葉っぱが擦れ合う音と共に風が心地よく吹いていた。

シンイチ「はい。ありがとうございます」

蘭「じゃあ、新一。行こっか」

蘭さんはボクの隣で、眩しいかぎりの笑顔をボクに向けていた。

仕事で忙しいボクの両親、という人に頼まれて、代わりに蘭さんが病院まで迎えに来てくれたのだ。

よく晴れて、柔らかく心地よい風が吹く日曜日の朝のことだった。

日差しが暖かく降り注ぐ大地の下では、日曜日ということもあり、入院患者を見舞いに来た人達や、ボクと同じように退院する人達もいた。

みんな心から笑顔で、これから普通の生活に戻れるんだ、と表情からも読み取れる。

あれもできる、したい。

これもできる、したい。

と希望に満ち溢れていた。

ただ1人、ボクを除いては……

記憶が戻りかけてるとはいえ、まだまだ肝心な部分は思い出せていないのが現状だ。

いつもいつももう少しで……という時に、過去の記憶は手の平から逃げていく。

まるで、誰かが先回りし、ボクの記憶を思い出せまいと意図的に操作しているような。

でも、過去の記憶は嘘をついても、今からの未来の記憶は上書きされないし、嘘をつかない。

これから先どんなことが待っていようと、どんなことが起ころうとも、蘭さんと一緒なら乗り越えて、心の記憶を取り戻すことができるような気がする――

蘭「え、何、新一？」

ボクたちは、病院からボクの家がある米花町までの道のりを話しながら歩いていた。

シンイチ「ええつと……ボク、まだ少ししか記憶を取り戻せていませんが、蘭さんと行きたいところがあるんです」

蘭「突然どうしたの、新一？」

シンイチ「今までの生活で思い出したことがあるんです。

記憶喪失になる前、米花町のホテルのレストランで蘭さんと食事をしていたのを……

そこで考えたんです。

そこに行けば、記憶を取り戻す手掛かりや手助けになるのではないかと。

ですから、今晚、ボクとそこへ行きませんか？」

蘭「うん、いいよ！！」

新一と食事に行くの、久しぶりだね♪」

第70話 好きです、蘭さん。記憶がなくても・・・

そしてその日の晩・・・

蘭「新一 いいいゝゝゝ お待たせ!!」

シンイチ「あ、蘭・・・さん・・・・・・・・」

ボクはその姿を見て言葉が出なくなった。

きらびやかな美しいドレスに身を纏い、

赤いヒールの靴を履いてめいいっぱいオシャレした蘭さん。

化粧はしていないのに、神々しさや気高ささえ感じる姿。

綺麗だ・・・地球上の誰よりも・・・

そう、蘭さんに見とれていたのだ。

蘭「しん・・・いち？」

どうしたの？」

蘭さんはボクを覗き込むようにして天使のような声でボクを現実に戻した。

シンイチ「え・・・あ、あの・・・」

蘭さんは綺麗だなあって・・・この地球上の誰よりも／＼」

お互いの顔が真っ赤に染まる。

背景の夕暮れの空のように美しい黄金いろに・・・

そしてそれがまた美しい蘭さんを引き立てる。

いや、お世辞ではなく本気だ。

蘭「あ、ありがとう・・・新一／＼」

2人は並んでホテルへと入る。

お目当ては、高層ホテルの思い出の場所。

思い出のレストラン。

いい思い出かといわれればそうでもないが、

ここしか考えられなかった。

ボクのあの想いを今も、過去も大切な蘭さんに伝えるには・・・

記憶をなくす前もなくなった後、今も

変わらない想いを今、心から大切な蘭さんに伝える時がきた。

蘭「ここって……まさか……」

シンイチ「そう。記憶をなくす前のボクが、蘭さんで行った思い出のレストラン、

そして思い出の席です」

ボクたちは向かい合って席に着く。

ウェ이터がコップに入れたお冷やを持ってくる。

蘭「でも新一、大丈夫なの？」

ここ、高いんでしょう？」

シンイチ「大丈夫。今日はお父さんのカードを持ってきてるから！」

ボクは上着の内ポケットから一枚のカードを取り出して見せる。

その様子を見て、蘭さんはクスッとほほえむ。

蘭「それで？」

今日はどうしてここに食事に来たのかしら、名探偵さん？」

小悪魔のような天使のような微笑み。

まさに不敵な必殺技。

ボクは勇気を振り絞って襟を正し、蘭さんに向かって正面を向く。

勇気というのは、ボクの心の中で不安に思っていたのかもしれない。

蘭さんにふられるのを、自分のこのけなしの勇気を否定されるのを……

でも、言わなきゃわからない。

やってみなきゃわからない。

する前からわかっていいる勝負なんて面白くない。

たとえ1パーセントでも可能性があるのなら、とことん追求、追求めるのが真実だ。

それが正しいのだ。

今回ダメでもいいじゃないか？

それによって自分の気持ちに整理がつかないじゃないか？

記憶喪失というハンデ、障害を乗り越えて実らせたい思い、想いが今、ある。

シンイチ「ボクは記憶がなくても・・・蘭さんが好きです!!この地球上の誰よりも!!」

第70話 好きです、蘭さん。記憶がなくても・・・（後書き）

みなさんは今年どのような2010年でしたか？私はいろいろありましたが、いい1年だったと思います。警察官採用試験に落ちてしまったのも、いい思い出です。ルクセンブルクの片思い中の彼と進展がなかったのも悪くないです。来年も試験受けます。そして次こそは合格したいです。みなさんは、2011年、どのような年にしたいですか？感想と合わせてお待ちしています。

第71話 返事はわかってるくせに／／／（前書き）

お久しぶりです。

突然ですが、私は現在名探偵コナンの映画バージヨンの小説を計画中です。

その舞台とか登場人物とかのネタとかこうしてほしいとかを募集します。

何か思いついたことがあったら、感想と共に書き込みお願いします。

第71話 返事はわかってるくせに／／／

『蘭さんのことが好きです。この地球上の誰よりも……!!』

その言葉が私の頭の中で反響し、コンサートホールで聴くクラシック音楽のようにこだまする。

何回も私の頭の中でそのセリフを繰り返し、その言葉にのまれてしまいそうだった。

蘭（新一が…私のこと…好き……………？）

そして気がつけば、私の右頬をダイヤモンドのような光の涙が静かに伝っていた。

シンイチ「……………迷惑でしたか、蘭……………さん？」

蘭「ううん!!」

そうじゃないの……………でも……………!!」

心配なの。

あなたがまた私の前からいなくなってしまういそうな気がして……

そう喉まで出ているのに出てこない、いや言えない言葉。

声に出してしまえば、また同じことになってしまいのではないか？

と心配して、不安になって。

シンイチ「ボクは、もうどこにも行きませんよ」

そう新一が私の気持ち、心の中を見透かしたように言う。

すると、自然に私の涙は止まっていた。

蘭「うん……大丈夫。新一には何もかもお見通しだね」

シンイチ「ボクにだって、解けない謎の1つくらい……?」

蘭「あるはずないわよねえ、新一？」

少し意地悪っぽく新一をからかってみたら、やっぱり

シンイチ「バー口!!」

なんじゃねえよ!!」

まるで記憶が完全に戻ったみたいに、私達2人は笑いあっていた。

シンイチ「それで、蘭さん。

返事は？」

私の顔は一気に真っ赤になる。

蘭「返事なんて……

わかってるくせに／／／」

そしていいムードの中、私達は運ばれてきた料理を幸せそうに話しながら食べていた。

しかし、それを遠くから見つめる1人の女性が……

？「見なければ……よかった……」

第71話 返事はわかってるくせに／／／（後書き）

さて、最後の女性は誰なんでしょう？もうすぐわかった人もいるでしょうね。

みなさんは今年春のコナン映画、楽しみにしていますか？

第72話 伝えられない想い

こうなるとわかっていたのに……

私が入る隙間なんてないとわかっていたのに……

でも、来てしまった。

聞いてしまった。

あなたの声を、あなたの姿を、あなたの嬉しそうな幸せそうな2人の様子を……

私だけ灰色の世界にいるように、あたりは幸せそうなカップルがたくさんいて、私だけ場違いなような。

結局どれだけ密かに想っていても、

同じ境遇でも、

報われない運命だったのね、私達。

いや、私のひとり歩き、一方通行だったのかしら？

でも、いいの……

私の愛する、いや愛したあなたの笑顔が見られたから……

さようなら、工藤君。

あなたとの偽りの姿で過ごした時間は、とても……楽しかったわ。

私は私で、決着をつける。

あなたには黙って行くわ。

あなたをもうこれ以上巻き込みたくないから……

すでにあなたは、踏み入れてはいけないところに足を踏み入れていくけど、

あなたが決着をつけるその時まで、

私はそばにいるわ。

灰原、いや宮野志保として……

そうね。大切な実験体なんだもの。よく観察させてもらっわ。

……頑張りなさい、工藤君。

もう、あなたの大切な人とその笑顔を失わないように……

それは私だけで充分だから………

あなたには、幸せでいてほしい。

あなたの幸せが私の幸せだから………

シンイチ「……………？……………」

蘭「どうしたの、新一？」

シンイチ「いいや、何でもない……………」

今、誰かの視線を感じた………

誰がよく知ってる人のような………

誰だろう？

そしてしばらくして、ボクと蘭さんはレストランを出て家路についた。

終始手を握りあい、幸せオーラ全開で……

第72話 伝えられない想い（後書き）

哀ちゃん、いいや志保ちゃんの性格が壊れかけてるかもしれません
が、少し新志要素を出してみました。

第73話 呼び寄せるものは

灰色の瞳から静かに雫石が落ちる。

志保「あれ…涙なんてもう流さないと決めていたのに…」

私の涙は、彼に届くことはない。

彼の視界には私はいるだろうけど、中心にはいない。いやいてはいけない。

私と彼には死に神が憑いている。

それは、組織に命じられて開発した毒薬から逃げようとした罰なのかしら？

だけど、私は彼らからは逃げなかった。

そう、あの時……

歩美「えー灰原さん転校しちゃったの!？」

元太「なんでだよ？」

一呼吸置いて答える。彼らが納得する理由を答えなければいけない。

――と自分に言い聞かせて……

灰原「ええ、私の両親が海外に転勤することになったの。

それで私も一緒に」

元太「灰原の父ちゃんと母ちゃん、なんか悪いことしたのかよ？」

光彦「やだなあ元太くん。そんなわけないじゃないですか！！」

歩美「……寂しくなるね。コナンくんが続いて哀ちゃんまで……」

灰原「そんなに寂しがらないで。たまには手紙を書くから」

歩美「ホント！？

約束だよ！！」

涙が涙を呼び寄せ、昨日のことかのように頭の中で再生される。

でもあの時、その一方で吉田さんたちは嬉しそうにしていたわね。

工藤君の……いいえ江戸川くんとしての転校してからの初めての手紙が届いたから……

第73話 呼び寄せるものは（後書き）

哀ちゃんの理由も海外に転校とは…同じでセンスないかな……？

後1カ月でコナン映画が公開ですね。個人的には、コナンくんが一時的に新一くんに戻ってほしいですし、キッド様も絡んでほしいかな

第74話 江戸川コナンからの手紙

よう、少年探偵団のみんな。元気にしてるか？

オレはやつと海外生活にも慣れたとこ。

少年探偵団としての活動はどうだ？

事件がなくて平和なのが1番だけだよ、お前らのことだから暇そうにしてんじゃねえかな、って思ってたさ。

オレがいなくてもちゃんと頑張ってるか？

歩美ちゃん。歩美ちゃんが1番寂しがってたよな。

ごめんな、急に何も言わずにいなくなったりして。

歩美ちゃんの気持ちはわかる。けど、残念ながらオレは歩美ちゃんの気持ちには応えられない。

オレなんかより、もっと格好よくて歩美ちゃんのことを大事にしてくれる相手がいるはずだぜ。意外と近くにいるんじゃないか？

光彦。お前は相変わらず非科学的なものは信じていないのか？

光彦のことだから、オレと灰原が抜けた後、うまくまとめるだろうな。

聞いたんだ。オレの後に灰原が転校したこと。

なあ、光彦。お前はいつも歩美ちゃんと灰原を見ていたよな。

届くといいな、その気持ち。大切にしろよ。

元太。オメエは相変わらず「うな重うな重」ってんのか？

バランスよく食べないと、体に毒だぞ。

まあこんなこと言っても、元太には無駄なこと、オレが1番よくわかってるつもりだけどな。

最後に、歩美ちゃん、光彦、元太。今までありがとう。みんなで始めた少年探偵団、楽しかったぜ。

また、できるといいな。オレと灰原が抜けた後も、ちゃんとまとめるよ？

離れ離れになっても、オレ達の友情と思い出は忘れないぜ。どんなに遠く離れていてもな。

じゃあ、元気だな。また会えることを願って……

江戸川コナン

第75話 作者より皆様へご挨拶3（前書き）

今回は、作者よりのご挨拶です。次回は、ここまでのストーリーを
まとめてみようと思います。

第75話 作者より皆様へご挨拶3

みなさん、お久しぶりです。アイリーンです。

もう私のことなんて忘れてしまったでしょうか…？

知ってる方もいるかもしれませんが、私はこの5月8日に警察官採用試験を控えています。そしてその勉強の為、しばらく小説の投稿をお休みさせていただいていました。

今からいつ更新できるかはわかりませんが、これからも末永いお付き合いを、そしてこの小説を初めて読む方も、どうかよろしく願います。

名探偵コナンのファンフィクション小説『心の記憶』以外の小説、例えば『アディオス・オニーノ』の方もよろしく願いますね。

さて、今日はイギリスでビッグイベントがあります。みなさんご存知ですよね？

私もプリンセスに憧れてる1人ですが、女の子なら1度は憧れたことがあるのではないのでしょうか？

世界には様々な国があり様々な王子様たちがいらつしゃいますが、みなさんはお気に入りの王子様とか国はありますか？

話はそれてしまいましたが、これから私を、そしてすべての作者を、被災地の人達をどうか応援よろしくお願いします。

そして、お気に入り小説登録も増えていました。本当にありがとうございます♪

第76話 これまでのstory

高校生探偵工藤新一が幼なじみの毛利蘭と行った遊園地で、黒の組織の怪しい取引現場を目撃した。

こっそりその様子をつかがっていた新一だったが、後ろから近づいてくるもう1人の仲間に気づかなかった。

その男に殴^{ジン}られ、気を失ってしまう。

謎の薬（アポトキシン4869↓出来損ないの名探偵という意味）を飲まされ、気づいたら小学生の体に幼児化していた。

自分が生きているとわかると、まわりの人物にも危険が及んでしまう。そのため、新一は江戸川コナンという小学1年生として、幼なじみの毛利蘭の家の探偵事務所に居候しながら、組織の情報を追うことになった。

自分の正体を知っているのは、実の両親と阿笠博士と元組織の一員の灰原哀、西の高校生探偵服部平次と、巷を騒がせている怪盗キッドである。

組織の情報を集めようとするものの、わかったのは、組織のボスのメールアドレスが七つの子の歌に聞こえることと、組織のアジトが

鳥取（島根でしたっけ？違ってたらか誰か指摘してください）にあることと、最近、組織の一員が自分の関係者のまわりにいるかもしれない、と考えるようになったことだけだった。

そうこうしているうちに、幼児化してから1年が経とうとしていた。そんな時、ついに灰原がアポトキシン4869の解毒剤を完成させる。

この1年の間、何度か解毒剤の試作品で元の姿に戻ったものの、一時的にすぎなかった。

しかし、今回は完全に元の姿に戻れるという完璧なものだった。

江戸川コナンは両親の仕事の関係で海外に転校ということになり、少年探偵団のみんなや蘭たちに別れを告げた。

工藤邸で薬を飲み、久しぶりの独特な痛みに耐えて、ようやく本来の元の姿に戻ることができた。

しかし、その直後から激しい頭痛や熱が新一を襲う。

そうなることを予知し、怪盗を辞めることを告白しに来た怪盗キッドに新一は言った。

『やめんなよ…怪盗……面白くねえし…お前との決着、まだついてねえんだよ……』

そう新一に言われたことも気になったが、新一の異常な体調と物音を聞きつけた新一のお母さんの足音に気づき、

『わあったよ…機会があつたら、またどこかで会えるといいな』

と言い、素早く変装して夕方の街に紛れ込んでしまう。

しばらくして、なんとか体調が落ちついた新一は、帝丹高校の新入生歓迎会である劇をやることを知り、こっそりとまた紛れることにした。

しかししかし、新一に疫病神が死に神が憑いているのだろつ。またまた事件が起きてしまう。

なんとか解決したものの、謎の体調不良で倒れてしまう。

蘭たちの献身的な世話のおかげで、帝丹高校に蘭と登校するまでに回復した。

何気ない平和で楽しい日常も束の間、ある雨の日、蘭とデートをした帰り道、雨でスリップしたトラックが蘭に突っ込んできた。

蘭を突き飛ばすようにして庇い、新一はかわりに引かれて瀕死の重症を負ってしまう。

なんとか一命は取り留め数ヶ月後意識を取り戻したものの、命と引き換えに新一は記憶を失ってしまった。

自分は工藤新一でなければいけないのか？

自分はそうなければいけないのか？

思い出さなければいけないのか？

などなど自分の心の中で葛藤しつつ、退院の日を迎えた。

新一が自分の記憶を失ってから、蘭は新一ともう1度やり直そうと決め、決して強要はせず、普通の日常生活が再び始まった。

高校に一緒に通い、事件を解決し、一緒に過ごし…そしてある日、新一は日頃の感謝の気持ちと蘭への自分の素直で大切な気持ちを伝えるため、あの思い出の場所へと向かう。

それは、あの高層ビルのレストランだった。

前回と同じ席で、ついに新一は蘭に自分の気持ちを伝えた。蘭もその気持ちを受け入れ、新一の記憶喪失という障害があるものの、2人は晴れて恋人同士となった。

その2人の笑顔を、遠くから同じく元の姿に戻り組織と戦うと決めた帝丹高校に教育実習生として潜り込んだ宮野志保が見つめていた。

自分の心の底にしまっていた新一への想い。それは叶わないと知り、新一の幸せを願う1人の女性として、身を引く覚悟を決めた。

ここまでが今までの主な流れです。

新一が記憶喪失になる前に、キッド（黒羽快斗）をパシったりマスコミのインタビューを受けたりしました。

さてさて、これからどうなるんでしょうか？

ここまで読んでくださった皆様だけに、この物語のクライマックスをお教えします。

蘭や関係者たちは、新一の記憶が早く戻ることを願い、新一をイギリスのベイカー街やホームズと宿敵モリアーティー教授が戦ったライオンバツハの滝などに連れて行った。

しかし、その関係者の中に組織のメンバーとあの方が混じっていて……

という感じです。

では、次回からも小説『心の記憶』を、そしてその他の小説を、どうかよろしく願います。

間違っていたところや意見などがありましたら、遠慮なく書き込みしてください。

そして今日、この小説のお気に入り登録が38になりました。

ありがとうございます。そしてこれからも応援よろしく願います！！

第77話 変わった呼び名（前書き）

私の小説の数少ない読者の皆様、そうじゃないたまたま読んでくださった皆様。長い間ほったらかしてごめんなさい。。。採用試験も残念ながら終わったので、ぼちぼち小説投稿も再開したいと思います。駄文ですが、これからも末永い応援をよろしくお願いします。

第77話 変わった呼び名

再びここから始まった。

あの時同じ場所で聞くはずだった新一の言葉。

ロンドンでの事件の時に聞いたあの言葉、新一の気持ち。

『オレがいくら優秀な探偵でも、好きな女の心を読み取るなんて簡単じゃねえんだよ!!』

〇〇ラブは終わりを意味してるんじゃない。

これからスタートなんだ』

蘭「って言ってくれたよね、新一。

新一が記憶を取り戻してなくても、私は覚えてるよ。

「…………ホント嬉しかった。ありがとう…………」

蘭の顔は真っ赤になっていた。

外はすっかり暗くなり、ビルの光が星や希望のようにキラキラと輝いている。

とても美しい。

この光景も蘭のはにかんだ笑顔も・・・

この笑顔をなくさないように守っていききたい。

この人が傷つかないように守っていききたい。

そう素直に思う。

いつの間にか、蘭さんが‘‘蘭’’に変わっていた。

記憶をなくす前もこうやって呼んでいたのかな・・・？

ただの幼馴染から恋人へ変わった瞬間。

それは何事にも変えがたい特別な呼び名、感情。

新一「そうだな、蘭。

覚えてないのは悔しいけど、大切にしたいのはボクも変わらないよ」

しばらくボクと蘭は運ばれてくる食事を食べながら話していた。

いつにもまして、食事が美味しいし楽しい。

よかったわね、工藤くん・・・

・
そうつぶやき、志保は黙って身を引いた。彼の幸せと引き換えに・

新一「じゃあ、帰ろうか」

蘭「うん!!」

手をつなぎラブラブモード全開でレストランを後にする。

蘭はすっかり安心し、エレベーターで下へと降りる間ずっと、ボクの肩に顔を置いていた。

1階に着き、蘭をお姫様のようにエスコートする。

新一「さぁお嬢様、お城までお送りします」

タクシーに乗り込み、米花町に向かう。

ボクはなぜかこの時胸騒ぎがした。

ボクたちに危険が迫っていることを……

第78話 記憶を取り戻すために（前書き）

みなさん、お久しぶりです。アイリーンです。長い間放っておいてごめんなさい・・・警察官採用試験の勉強の合間を見つけたので、今回短いですが更新します。こんな駄文を楽しみにしていたださってる方もそうでない方も、お待たせしました。これからクライマックスに向けて進んで行きます。

第78話 記憶を取り戻すために

それは突然だった……

新一「え？イギリスへ？」

蘭との甘い食事の数日後、蘭は突然そう切り出した。

蘭「そう。新一と事件を解決したロンドンに行かない？」

もちろん、お父さんや少年探偵団たちも一緒に」

ボクの記憶を取り戻すため、周りのみんなが計画してくれていたらしい。

蘭「新一のお父さんとお母さんが費用は全部出してくれるって。

もちろん、目暮警部たちも着いてくるらしいよ」

新一「目暮警部たちも・・・？」

着いてくる必要はないんじゃない？

蘭「それがね、新一は今まで危険な事件とかにたくさん関わってたんでしょ？」

だからその関係者たちが新一の命を狙わないように、

って気を利かせてくれたんじゃない？

志保さんが・・・」

新一「そう・・・なんだ・・・」

ボクは過去どれだけ危険な事件に関わっていたんだろう・・・

それも、ボク自身の命や関係者の命までも狙うようなやつと・・・

それに、なぜだか志保さんも無関係ではないような、

ただの心配する心だけでそうしたのではないような気もする。

そう、何か自分が起こしたことへの責任というか義務を果たすように・・・

どっちにしても、ボク自身のために、そしてみんなのために、

ボクは行ったほうがいいのかもしれない・・・

新一「わかった。ボクも行くよ。」

・・・ただ、もう1つだけ行きたいところがあるんだけど・・・
」

蘭はボクに振り返って顔をこちらに向ける。

新一「ライエンバッハの滝に行きたいんだ」

しばらくの沈黙の後に、蘭は答える。

蘭「ホームズとモリアーティ教授が対決したっていう滝だよな？」

でもどうして？」

新一「ボクはこのままでもいいと思ってた。」

例えば記憶が一生戻らなくても、それはそれで幸せな日常が送れると・・・

だけど、それから逃げていてはいつまでも先へは進めない。

時には危険を侵してでも、取り戻さなければいけない時がある。

ボクの記憶とそれを信じてくれているみんなに、

そして、蘭の笑顔を守るために・・・」

その言葉を聞いて、蘭は顔を真っ赤にしていた。

蘭（恥ずかしいけど、でも、嬉しい。素直にそう思う。

新一の危険を省みず先へ先へと進んでいく姿。

そして時々見せる不敵で自信に満ち溢れたその顔。

それが私は好きだし、大切にしたい。この気持ち・・・）

蘭「わかった。じゃあ、みんなに伝えておくね」

こうしてボクたちはイギリスへと向かうために準備を進めた。

その先にあんなことが待ち受けているとも知らずに・・・

第78話 記憶を取り戻すために（後書き）

さてさて後書きを読んでもうございまして。イギリスとライヘンバッハの滝を強引に結びつけたかもしれませんが・・・さすが蘭ちゃんは何年も新一くんの幼馴染をやっていただけあつて、すぐにその名前がでてくるなんて、さすがです。私も行ってみたいな・・・

第79話 計画（前書き）

お久しぶりです。採用試験は残念な結果になりました。もうすぐクリスマスですね。みなさんは何かご予約はありますか？私はヨークツパのルクセンブルクに住んでいる男友達に手紙を送る予定です。

第79話 計画

その晩は、早速蘭とボクの記憶を取り戻すための海外旅行の計画を立てた。

その計画では、

？出発は1ヶ月後。蘭をはじめ蘭のお母さん妃英理さんと父親の毛利小五郎、ボクの両親と友達でありライバルでもあるという服部平次くんと遠山和葉さん、それに目暮警部などの警察関係者たち、そして何故か黒羽快斗と中森青子も…

？まずイギリスに行き、テニスの事件が起きた関係する場所やベーカー街などを巡る。

？そしてスイスのライヘンバッハの滝へ行く。

だいたいこんな感じだ。

長いこと話していたのか、蘭が煎れてくれたコーヒーはすっかり冷たくなってしまった。

でも、お互い笑っていた。何気ない日常に幸せを感じていた。

こんな時間がずっと続けばいいな……………と

しかしその時!!

!!!!!!!!!!!!!!

蘭「……………どうしたの、新一？」

(今……………!! 鋭い視線を感じた!! 柔らかい感情などではなく、殺意すら感じる……………ボクは誰かに命を狙われているのだろうか……………
…)

蘭「???」

蘭は不安そうにボクの顔を横から覗き込む。

新一「……………何でもないよ……………」

蘭「そう……………?じゃあ、新一、また明日ね!!」

蘭がボクの家を出て行った後、ボクは静かに考えていた。

さっきの視線は一体……？

ボクを狙っているのだとしたら、あまり猶予はないだろう。

どれ程の危険なのかはわからないけれど、とてつもなく鋭く尖った
急所に突き刺さるような危険な香り。

ボクが想像している以上に何か動き始めているのかもしれない。

第80話 記憶の欠片（前書き）

お久しぶりです。あれから少しお気に入り小説登録してくださった方が増えたみたいで、とっても嬉しいです。私なんかの駄文のどこがお気に召したのか、それが不思議ですが…さて、今回は記憶喪失になった新一くんの過去の記憶の欠片が出てきます。みなさんはそれがいつの時のものなのかわかりますか？

第80話 記憶の欠片

蘭が帰った後も、ボクは1人で考えていた。

後からこの時のことを考えれば、1人になるということとはとても危険な行為だっただろう。

さっきの視線が誰のものなのかはこの時はまだわからなかったけれど……………

チクタクチクタクチクタク……………

屋敷の大時計の時を刻む音だけが、静かな屋敷に響き渡る。

この一時でもとても貴重なもののなのに、そんな思考を邪魔するかのように、頭に嫌な予感が非常に大きい音で鳴り響く。

ドン……………ドン……………ドン……………ドン……………

最初は小さな不安ぐ音だったのに、だんだんとそれは大きくなっていく。

それは頭の中で反響し、凄まじい程に増幅する。

.....キミはいつたい.....

.....知りたいのなら.....

.....その待ちぼうけをくらわせている.....は.....

.....あなたの選択肢は.....

.....待つてくれって.....が.....

.....死んでも.....って.....が.....

.....お前のことが.....だからだよ.....誰よりも.....

.....おめえのことは.....わかってるからよ.....

.....好きな.....の気持ちを.....なんてことは.....

.....なんで.....を助けて.....の？

.....どうします.....？

.....おめえとずっと.....時もな.....

.....君と私.....相性ぴったり！！

……君が……だったの？

頭の中にその言葉と途切れ途切れの映像が、フラッシュバックのよう
に次々と流れる。

これはボクが記憶をなくす前に体験したことなのだろうか？

だとしたら………

………

なんだか頭が痛くなってきた………

今日は早めに寝よう………

なんだか、記憶を取り戻すのが怖い………怖い………

なんだか大切な何かを失ってしまいそうで………

夢の中…………

ボクと蘭がまだ幼い頃。

2人で探検に行った。

意外と言い出したのは幼いボクの方。

あれ？なんだか幼い頃のボクの顔、懐かしい……

というか、つい最近までそうだったような不思議な感じ。

僕たちは見てしまった。

暗闇の洞窟で、怪しい人たちが……をしているのを……

危ない！！

そう思った時にはすでに遅かった。

僕たちは犯人たちに凶器の鉄パイプみたいなもので一撃をくらった。

必死に逃げる。けど、大人にかなうはずもなかった。

蘭はピクリとも動かない。

僕がこんなところに連れて来たら……

僕は………を………

ウワアアアア！！

僕は犯人に突進していった。

それから後のことは覚えていない。気がついたら病院のベッドに寝かされていた。

蘭は無事だった。

第80話 記憶の欠片（後書き）

名探偵コナンのチーフプロデューサーは読売テレビの周防さんということはみなさんご存知ですよね？ということは、彼に気に入られれば……なんて考えちゃってます／＼よい子の皆さんは決して真似をしないように（笑）

→
→

（誰？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8730f/>

心の記憶～あの頃に戻れたら...～

2012年1月7日12時45分発行